
甲斐田紫乃
Shino Kaida
大魔王は笑わない!?
～信じてください、聖女サマ～
ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

大魔王は笑わない!!
～信じてください、聖女サマ～

甲斐田紫乃
Shino Kaida

ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

大魔王は笑わない!!
～信じてください、聖女サマ～

甲斐田紫乃
Shino Kaida

ビーズログ文庫

Contents

008 序　章 ✦ 呪殺令嬢ふたたび

012 第一章 ✦ 四番目の危険

060 第二章 ✦ 不信と不審、そして

105 第三章 ✦ 仮面の策動

150 第四章 ✦ 翔べよ赤竜

202 第五章 ✦ その祈りは誰のため

246 終　章 ✦ 魔王様の活躍にご期待下さい

254 ✦ あとがき


バスティアン・レスタック・ド・フォルキデ
フォルキデ王国の第二王子で、
かって大魔王を滅ぼした聖女の生まれ変わり。
現在は、ベルナと四天王が
悪さをしないように監視中。
ベルナデット・ド・シャルトリューズ
大昔、人々を恐怖に陥れた
「伝説の大魔王」の生まれ変わり。
だが本人に自覚は無く、
平和的解決を望んでいる。
大魔王は笑わない!?
～信じてください、聖女サマ～
登場人物紹介


ネメシロ
風を司る四天王。過去の魔王を知る唯一の魔物。
気位が高く傲慢だが、面倒見はよい。
ギンレー
火を司る四天王。
理屈っぽくて面倒くさがり。
蓄財と野菜が大好きで、
恋愛沙汰が大の苦手。
ウシュク
水を司る四天王。
魔王に対して厚い忠誠心を持つ。
温厚で誠実だが、
倫理観はもちろん魔物基準。

イラスト／吟

昔々、フォルキデ王国の北の果てに、ドラゴンの山がありました。
そこにはたくさんのドラゴンたちが住んでいて、いつも悪さをしていました。
様々な財宝が毎日のように奪われ、また美しい乙女も毎日のように攫われました。
立ち向かう者は、みんなドラゴンが吐く恐ろしい炎に焼かれてしまいました。
自分たちに敵う者などいるものか、とドラゴンたちは大笑い。
誰も彼らを止められないのかと思ったその時、一人の勇敢なる騎士様が現れました。
騎士様はみんなに、悪いドラゴンたちを退治してみせると言いました。
「ご心配なく。私には、神様と、聖女様のご加護があるのです」
人々にそう言うと、騎士様はたった一人でドラゴンの山に向かいました。
そして不思議な剣を振るって、あっという間にドラゴンたちを倒してしまいました。
奪われた財宝と乙女たちを取り返し、騎士様はみんなに感謝されました。
そしてもうこのフォルキデでは、誰もドラゴンに襲われることはなくなったのです。
恐ろしいドラゴンも、ご加護を受けた騎士様には敵わなかったとさ。めでたしめでたし。

『フォルキデ童話集・竜退治の騎士様のお話』より

序章　呪殺令嬢ふたたび

フォルキデ王国の王宮、黄金宮（ル・パレドール）にほど近い、とある商店街。
「ふぉっふぉっ、今日は本当にいい天気じゃのう」
多くの人が行き交うその通りで、花屋の店主の老人（ろうじん）は、伸（の）びをしながらひとりごちた。
新年を迎（むか）えてから約半月。
まだまだ肌寒（はだざむ）いものの、店先には、咲（さ）いたばかりの雪割（ゆきわ）り草（そう）の鉢植（はちう）えが並んでいる。
（今年も立派（りっぱ）に咲いたのう。新しい王様の世になってから、この国は平穏（へいおん）そのものじゃ）
可憐（かれん）な花々を愛（め）でつつ、彼が仕事に戻ろうとした……その時。
（……おや？）
老人はふと、視界の端（はし）の人影（ひとかげ）に気付く。
その人影は店先にしゃがみ込み、鉢植えをじっと見つめていた。
「こりゃいかん、お客さんが来とったか。いらっしゃ……」
声をかけようとして、老人は――

「ひいぃっ!?」
思わず悲鳴をあげた。
彼の目の前にいるのは、一人の――どうやら貴族の、少女。
ぞろりと長いダークブルネットの髪を左右に結い上げ、青白い肌に黒いドレスを纏っている。
この世のものとは思えないほどに重苦しく、陰鬱な雰囲気を漂わせたその少女は、緑色に光る鋭い三白眼を見開いたまま、雪割り草に向かって何やら呟いていた。
「クク……白……この汚れのない色……連れ帰ってたっぷりと……クックッ、ククククク」
「っ、あ、あの、お、お嬢ちゃん……？」
呪詛めいた言葉に慄きつつも老人が声をかけると、少女はゆっくりと立ち上がった。
彼女はその視線で老人を射抜くと、口の端をくいいっ、と笑みの形に吊り上げる。
「……クク……見ぃつけた……」
「ぎゃあぁぁあ!!」
途端に老人は腰を抜かしてへたり込む。彼の悲鳴に、通りを行き交う人々も足を止めた。
「なななな、なんなんじゃお前はぁ！　まっ、まだお迎えは要らんぞぉお！」
「……！」
動けなくなった老人に、しかし少女はおぞましい笑みを浮かべたまま、にじり寄る。
その右手がゆっくりと、まるで呪いをかけるかのように、老人に向けられる――！

「い、嫌じゃああ！　だっ、誰かーッ！」
老人の絶叫に、立ち止まって様子を見ていた市民たちは動揺し――
「う、うわあああっ！」
次の瞬間、我先にと逃げ出した。
少女がくるりとこちらを向いたせい、だけではない。
突然空から黒ずくめの謎の男が一人、音もなく地面に降り立ったからだ。
異国風の装束のその男は少女を見るなり舌打ちし、次いで周囲の人々に鋭い視線を向ける。
「フン！　さっさと散れ、人間どもが」
彼が一言吐き捨てると、通りを不気味な一陣の風が吹き抜ける。
残っていた人々も驚いて逃亡し、老人はついに泡を吹いて気絶した。
通りから人影が絶えたのを確認すると、黒ずくめはその美しい顔の眉間に皺を寄せ、鉤爪の生えた鳥の足で、かつかつと少女に歩み寄る。
「あっ……！」
それまで引きつった笑顔のまま表情を固まらせていた少女は、ぶるぶると震えだす。
「ネ、ネメシロ、さん……」
「貴様……何をのろのろしている！」
黒ずくめ、ネメシロは少女に向かって吼えると、ずいと彼女に顔を近づけた。

「王宮であのような失態を見せておいて、今度は呑気に買い物か？　無用な騒ぎを起こさずに、邸宅に帰れと言っただろうが！」

「すっ、す、すみませんネメシロさん！　で、でも、あのう、私……」

弁解を述べようとして、少女――ベルナデットは、ゆっくりと辺りを見渡した。

賑やかで楽しげだった商店街は、今や幽霊街のような有り様だった。

「わ、私……また騒ぎを起こしてしまったのね」

最悪だわ……と、彼女はがくりと頭を垂れた。

第一章　四番目の危険

「まったく……貴様の愚鈍ぶりは筋金入りだな。この我も驚くばかりだ、ベルナデット・ド・シャルトリューズ！」

「ご、ごめんなさい……」

軋んだ音を立てて進む、ぼろぼろだが格安の貸し馬車の席。

ネメシロの叱責に、ベルナデットことベルナは、項垂れて身を縮こまらせた。

花屋の騒ぎの後、その場を離れ馬車を拾った彼女は、ネメシロと共に家路についている。

「あっ、あの、私、今日はなんだか気分がよかったので、その、お花でも買おうかと……」

掠れた声でおどおどと言う彼女は、口元が引きつり、目をぎらつかせた恐ろしい表情だ。

他人からすれば、呪いを口ずさむ魔女のように見えるだろう。

事実、その風貌と笑い声、虚実入り交じった数々の噂から、彼女は社交界で『シャルトリューズ伯爵家の呪殺令嬢』として名を轟かせていた。

けれども実際のベルナは、内気で口下手な、ただの没落貴族の令嬢である。

先ほどの花屋でも、綺麗な花を見て気分がよくなり、家に帰ったらたっぷり水をあげようと、つい話しかけてしまっただけだ。

探していた店主がいつの間にか目の前にいたので、声をかけようと思っただけなのだ。

それなのに彼女の行くところには、いつも誤解がつきまとう。

いや――――

「この我が何度も言っているだろう。貴様はいい加減に、魔王としての自覚を持てとな！」

最近は、単なる「誤解」では済まなくなっているのだが。

「あ、あのうネメシロさん。私、確かに魔王ではあると思うのですが、その、自覚を持って振る舞うというのは、少し……」

「甘ったれるな、この半端者が!!」

自身に仕える四天王、魔神・風のネメシロの一喝に、ベルナはますます縮み上がった。

千年前に世界を恐怖の底に陥れた、凶悪無比なる魔王。

元は人間だった彼は、己の肉体と魂を懸けた契約を数々の魔物と結び、恐ろしい力を手に入れ、世界の支配を目論んだ。

しかし魔王は、神の力を借りた聖女の操る『光』の前に、滅ぼされるのだった――――

今は単なる「おとぎ話」として語られるこの話が、実は紛れもない事実であり、そして自分

が、その魔王の生まれ変わりであるということ。

さらにこの国の第二王子であり、城の内外で絶大な人気を得ているバスティアン殿下が、聖女の生まれ変わりであること――つまり、ベルナの天敵であること。

ベルナがそんな事情を知ったのは、去年の暮れの頃だった。

「今日も今日とて、『聖女』めにおめおめと敗れ去りおって。その癖に、気分がよかった、だと？　貴様、よもや彼奴から誘いを受けたのが嬉しかったのではあるまいな？」

「っ！」

言われたその途端に、ベルナの頬はほんのり赤くなる。

「……い、いえ。あの、そんなこと、な、ない、です……」

目を逸らしながら必死に手を横に振ってみせるベルナに、ネメシロはますます不機嫌そうに、眉間に寄せる皺を深いものにしていく。

「貴様ぁ……彼奴を抹殺し、魔界を閉ざす結界を破壊することこそ、貴様と我ら四天王の最大の目的だと、一体幾度言わせる？　少しは力を覚醒させる努力をしているのだろうな」

「いえ、あの。わ、私は戦いではなく……その、もっと穏便な方法を探……」

「なんだと？」

「あ、いえ。な、なんでもありません」

口ごもるベルナの顔を見て、魔神の眉がぴくんと跳ね上がった。
「――いいだろう。もう一度警告してやる」
不意にネメシロは右手の指を広げ――何かを摑むように、ぐいっと曲げる！
「うっ！」
その瞬間、ベルナの心臓が急激に締め付けられた！
息が詰まり、頭がくらくらし、もがくベルナを睨みながら、ネメシロは紫電を纏った指をくいくい動かし言う。
「いいか魔王……貴様の心臓が一体誰のものか、よくよく思い出すがいい。魔王としての責を放擲すれば、その瞬間――古の契約により、貴様の心臓は即座にもぎ取られ、我のものになるということをな！」
「うくっ……おっ、覚えて、い、いますぅ！」
ベルナは必死に主張する。
力を得る対価として、魔王は望みを叶えて寿命が尽きた時、魂と心臓をネメシロに渡す。
そして契約破棄の場合は、速やかに魔王の心臓はネメシロのものになる。
それが、千年前からの契約なのだ。
「フン！」
ベルナの返答に、ネメシロは術を解いた。ベルナはほっとして、自分の胸を撫でる。

「覚えているならば、それなりの働きはしてみせることだな！」
ネメシロは吐き捨てるようにそう言うと、口を閉ざしてぷいと向こうを向いてしまった。
（あ、呆れられてしまったわ……）
ベルナは魔神の横顔を見ながら、そっとため息をついた。
（やはり、穏便な解決の道など、どこにもないのかしら。確かに私は魔王の生まれ変わりで、殿下とは命を狙い合う運命……なのかもしれないけれど――）
今日のバスティアンのあの提案と態度は、いつか、その運命も変えられるかもしれないという希望を生んだのに。
そう考えながらベルナは、先ほどの王宮での出来事を思い出した。

「きゃ、きゃあああっ！」
王宮の小部屋に、ベルナの悲鳴が木霊する。
「そらそらどうしたベルナデット！　逃げ回るばかりでは、私の抹殺など到底叶わんぞ？」
黄金を紡いだような髪。青空のように澄んだ瞳。誰をも魅了する、整った顔立ち。
そんな神々しいまでに優美なかんばせに底意地の悪い笑みを浮かべつつ、彼女を攻めるのはバスティアン殿下だ。

彼の呼び出しに応えて王宮を訪れたベルナは、なし崩し的に今日もまた、『聖女』である彼と世界の命運を懸けた決闘をするはめになってしまった。

もちろん、前世からの力を目覚めさせているバスティアンと、そうでないベルナとでは、決闘というよりは、聖女による「一方的な攻撃」と言った方が正しいのだが――――

まるでネズミをからかうネコのような態度で退魔の力である『光』を撃つバスティアンに、ベルナは逃げ惑うので精一杯だった。

「――ふふ。まあ、今日のところはこれくらいにしておいてやろう」

ややあってから、手元で『光』を煌めかせたまま、バスティアンはにっと笑った。

「え、えと、あの、はい……ありがとうございます……」

逃げ疲れ、床に半ばへたり込みながら言うベルナの耳に、ネメシロのため息が届く。

一方でバスティアンは『光』を消すと、優越感たっぷりに言い放った。

「いくらお前が魔王であろうとも、『弱い者いじめ』は私の趣味ではない」

わざわざ『弱い』と強調するバスティアンに、ネメシロがさらに苛立った呻きをあげた。

だがそれを無視して、殿下はさらに目を細めつつ、ベルナに向かって続ける。

「私としては、お前の様子が新年明けても相変わらずだ、と確認できただけで満足だ。お前がいつまでも覚醒しないままなら、それはそれで世界平和のためでもあるからな」

「は、はあ……」

「その調子で大人しくしているのが賢明だぞ……と、もうこんな時間か」
懐から取り出した金時計を覗いた後、彼は部屋の扉に向かう。
「よし、ではお前たち、もう帰っていいぞ。私は忙しい。これから執務がある」
そう言うと、彼はちらりと壁際に立つネメシロに目をやった。
「ネメシロ、お前もせいぜい大人しくしていろ。この前のような騒動、二度と起こすなよ」
「……！」
バスティアンの言葉に、ベルナははっと声をあげた。
「おのれ……魔王の命さえなければ、貴様ごときっ……！」
一方で忌々しげに捨て台詞を残すと、ネメシロはその身を無数のカラスに変えて部屋の窓から飛び立った。鳥と颶風と腐敗を操ることが、彼の能力である。
ネメシロが去ったのを見送ると、バスティアンはベルナに視線を移す。
「……ベルナデット？　どうした」
「あ、いえ」
胸に手をやり、押し黙っていたベルナを見て、バスティアンは訝しげに眉をひそめた。
「そんな険しい顔をして……そこまで世界征服に未練があるのか？」
「いえ、ち、違います！　私は、その、この前の事件のことを思い出して」
そこまで言って言いよどみ、ベルナは再び口を閉ざした。

（アマトルさん……）

今は亡き地の四天王・アマトルのことを思い出し、彼女の気持ちは沈む。

バスティアンの言った「この前の騒動」とは、そのアマトルが起こした事件のことだ。

千年前の魔王が創った魔剣の化身である彼は、魔王を慕い、その仇である聖女を憎むあまりに暴走し、この王宮を巻き込んで大きな被害を出してしまったのだ。

最終的にベルナの中に眠る『魔王』としての意識と力が覚醒し、アマトルは、敬慕する魔王自身の手によって討たれた。

（……私がもっとしっかりしていれば、あのような事件は起こらなかったのに）

後悔の気持ちで彼女の胸はいっぱいになる。

だが反面、その事件は、『聖女』と四天王との敵対関係を牽制することにもなった。

覚醒した魔王は、バスティアンの目の前で、ネメシロとウシュクに命じたのだ。

「ネメシロ。ウシュク。厳命を下す」

その時、王宮で――姿形はベルナデットのまま、臓腑を抉るような殺気を身に纏い、深い闇を双眸に湛えて、魔王は言い放った。

「聖女を討つのは、私自身の手だ。――私以外の手で討つことは許さぬ。よいな」

「はっ！」

魔王の命に、魔神たちは深く額づいた。

（私が『魔王』になっていた時のことは、よく思い出せないけれど……その命令があるからこそ、もうネメシロさんもウシュクさんも、殿下のお命を狙うことがないのだわ）

元々、ネメシロたちはバスティアンの『光』には敵わなかったとはいえ、魔王の命令は、ベルナにとって、喜ばしいものではあった。――しかし。

（だからこそ……魔王である私だからこそ。もう二度と、あのようなことが起こらないように……魔界の力でどなたかが傷つくことなど、ないようにしなければ）

ベルナが決意を新たにしているその表情を、どう読みとったか、バスティアンはふむと小さく唸った後、ドアノブに手をかけた。

ドアを開ける瞬間、それまで挑発的でやや鋭かった彼の目つきが一転、その美貌に似合った穏やかで優しげなものに変化する。

「シャルトリューズ伯のご令嬢がお帰りです。門までご案内してさしあげてください」

柔らかい微笑みと共にバスティアンが声をかけるのは、部屋の外で待機していた侍従だ。

バスティアンは――その本性はともかく――社交界では、温厚篤実で賢明で信仰心の篤い、まさに王子として理想的な人物であると評されているし、そのように振る舞っている。

「……ベルナデット嬢。本日はありがとうございました」

軽く会釈をしてから、バスティアンは「王子」としての笑みをベルナに向ける。
突然の優しい笑顔に、ベルナの胸はどきんと跳ね上がった。
同時に、何か頭に血が上るような、息が詰まるような、奇妙な感覚が彼女を襲う。
（や、やだ。どうしてかしら、私、また『殺意』が……!?）
バスティアンを見ている時に不意に訪れるこの感覚を、ベルナは魔王としての『殺意』の表れだと思っている。
（急にそのような感情が表れるなんて……まだ私が、きちんと自分の中の力や意識を制御できていないということだわ。しっかりしなくては、またご迷惑をかけてしまうのに）
ベルナは『殺意』を振り払うようにぶんぶんと頭を振った後、バスティアンに向かって深くお辞儀した。
「あっ、……あの、こ、こちらこそお招きありがとうございました、殿下……」
「ふふ、どういたしまして」
にこりと目を閉じて笑い、次に見開かれた彼の目は、ベルナに『じゃあな』とぞんざいな挨拶を投げかけていた。
ちょうどそこへ、準備を終えた侍従が入ってくる。
「お待たせしました。それではベルナデット様、こちらへ……ひっ」
ベルナの顔を見るなり、年若い侍従は悲鳴をあげた。

（た、たまたま目が合ってしまったのだけど……睨んでいると勘違いされてしまったのね）

いつものことながらがっかりしつつ、ベルナがもう一度バスティアンに一礼し、部屋を去ろうとすると――

「ああ、いけない。一つ、お渡しすべきものがありました」

バスティアンがベルナを引き止めた。彼は何やら封筒を取り出すと、彼女に差し出す。

「はい、どうぞ」

「え？　あ、あの、これは……？」

「これは招待状です。三日後に行われる、博物館での式典への」

「式典……？」

王子としての態度を崩さぬままに言うバスティアン。

ベルナが思わず首を傾げると、彼は説明する。

「実は今度、『ウェヌスの涙』がようやく博物館に寄贈されることとなったのです。あなたもご存じの通り、以前王宮にてあの宝玉を展示した際に起こった事故の影響で、寄贈がかなり先送りになってしまっていたのですが……」

「あ……！」

ベルナは息を呑んだ。

『ウェヌスの涙』とは、死んでしまったアマトルの欠片――魔王がかつて彼を生んだ時に魔力



を籠めた宝玉のことだ。

「あの宝玉を、ベルナデット嬢はとても『気に入って』おられたでしょう？　それに、式典のような公式の場に出れば、あなたにとってもきっとよい気晴らしになると思うのです」

「え、は、はい……」

ベルナは今一つ彼の意図を呑み込めないながらも、小さく頷く。

「その代わり、申し訳ありませんが、くれぐれもお一人でいらしてくださいね」

他の配下の連中は連れてくるなよ――――という意味らしい。

バスティアンの目が一瞬鋭く光ったのを見て、ベルナは慌ててこくこくと頷いた。

それを見て殿下はにっこりと笑った。

「よかった、おいでになってくださいますね。それでは三日後を、楽しみにしております」

「は、はい殿下」

彼の笑顔に、また胸の中で『殺意』が膨らむのを感じつつも、ベルナは深くお辞儀した。

「こちらこそ、クックック……」

「ひぃぃっ!?」

侍従がまた悲鳴をあげた。

ともあれベルナは、バスティアン殿下から公式に招待を受けてしまった、というわけだ。

「――まったく。今さら聖女めが罠を張っているとも思えぬが、招待を受けてやにさがっている貴様も貴様だ！」

「す、すみません……！」

再び馬車。こちらに顔を向けるなり小言を言うネメシロに、ベルナは謝ってばかりだ。

「あのう、ネメシロさん……私が殿下に招待を受けたこと、よく、ご存じでしたね」

「我の情報収集能力を甘く見るな。王宮の中の会話程度、いくら離れていようが手に取るようにわかるわ。そして無節操に喜ぶ、愚かな貴様の顔もな！」

鼻を鳴らしたネメシロ。彼の言葉を受け、ベルナは少し思案し――

「でも、あの、ネメシロさん……」

おずおずと反論した。

「わ、私、きっと、殿下にご招待を受けたのが嬉しいのでは、ないと思います」

「うん？」

「その、さっ……最近の私、殿下を見ると――す、少しおかしいのです。感情が、おかしいというか……魔王の意識が、目覚め始めているような」

「何っ！」

途端に、珍しくぱっと表情を輝かせ、ネメシロはベルナに問いかける。

「ほう、それは興味深い。どのように感じるのだ？　怒りか？　憎しみか？」
「は、はい。ええと、殿下を……特に殿下が笑っていらっしゃるのを見ると、胸が、こう……きゅっと締め付けられて」
「ふむ」
「それなのに、どきどきして」
「ん？」
「頭に血が上って、ぼうっとして、顔が熱くなって……殿下のことをじっと見ていたいような、それなのに目を伏せたいような、とても恥ずかしい気持ちになるのです。時々、気付けば殿下のことを考えていることがありますし」
ベルナは深刻な表情で配下に告げた。
「こ、これって『殺意』ですよね？」
「……」
主君の言葉に耳を傾けるうちに、徐々に無表情になっていったネメシロは、しばし口を閉ざしてから、こう答えた。
「このクソたわけが」
「ええっ!?」
そのままネメシロは、頭を垂れ、額に手をやり、ため息をついた。

「よもや……よもや、貴様がそこまで愚鈍だとは……この『鳥の王』たる我も気付けなんだわ、な……ふっ、魔神も老いるということか？　ふっ、ふふふ……」

「そっ、そんな！　ネメシロさん、わ、私……っ！」

呆れを通り越して深い悲しみすら感じるネメシロの態度に、ベルナは慌てた。

（い、いけない……誤解されている！　私、口下手だから、またうまく話せなかったのね）

見当違いなことを思いながら、ベルナは必死に言葉を重ねた。

「そ、その、わ、私が嬉しいのは！　……その式典で、アマトルさんに最後のご挨拶ができることなのです」

ちらりと顔を上げた魔神に、ベルナはさらに告げた。

「『ウェヌスの涙』は、アマトルさんの、大切な身体の一部でしたから」

彼女の言葉に、ネメシロは平静を取り戻す。

「……アマトルのことを、まだ悔いているのか？」

「は……はい。私がもっとしっかりしていれば……あのようなことにはならなかったと思うのです。だから……」

「そうか」

ふうと息を吐き、ネメシロは腕を組んだ。

「……フン。そういう意図があるというならば、責めずにおいてやる。くれぐれも、その意気

を忘れぬことだ」

黒い魔神はベルナの目を見て続ける。

「今日からギンレーも来ることだからな」

「あっ……!!」

その言葉に――ベルナはいつになく目を大きく見開き、声をあげた。

「ああ、忘れていました……ギンレーさん！　四天王の火のギンレーさんが、こちらに」

「ウシュクの報告があっただろう。ようやく彼奴めが今日、人間界に到着する、とな」

火のギンレー。同じ四天王である水のウシュクの言葉を借りれば、「四天王の中で最も獰猛」だという、魔王の四番目の配下――

姉の結婚式があるということで遅れてくることになった、最後の四天王が、ついに。

ベルナはごくりと喉を鳴らした。

「うう、あ、あのう。ギンレーさんとは、どのような方なのですか……？」

「会えばわかる。が……強いて言うなら、攻撃的な奴だ。自尊心が強く、馴れ合いを嫌う」

「そ、そうなのですか……」

「それから彼奴の実力、特に破壊の能力は相当なものだ。その点だけなら、四天王で随一と称していい。おそらく聖女の結界がある今でも、この市街を火の海にすることくらい造作ないだろう。望まぬ破壊を生みたくないなら、貴様も魔王に相応しい態度をとることだな」

「そっ、そんな……！」

ベルナは頭を抱えて黙り込んだ。

これまでネメシロとウシュクたちが魔界からやって来ても、なんとかこの人間界が平穏を保てていたのは、ひとえに千年前の聖女の張った結界が、彼らの力を弱めていたからだ。

それなのに、そんな中でも市街を破壊できるという、しかも攻撃的な魔物がやって来て、果たしてベルナはそれを止めることができるだろうか？

（あ、諦めてはいけないわ……！　け、けれど私、そのような危険な方ときちんとお話しできるかしら……もっ、もし失敗したら!?　父様、母様、どうしましょう……!!）

炎に包まれる市街の様子を想像し、ベルナは今は亡き父と母に脳内で必死に祈る。

「……やれやれ」

そんなベルナの様子を見て、ネメシロは殊更に大きなため息をつくのだった。

（ああ……それにもし街がそんなことになれば、兄様もきっと悲しむわ。やっと戦争が終わって、もうすぐ戻って来られることになったのに）

兄であり軍人であるシャルトリューズ伯爵を思い、ベルナはゆっくりと頭を上げ――

「……あら？」

ふと馬車の窓の向こうに目を向け、声をあげた。

路地裏を、ふらふらした足取りの見知らぬ青年が走り去っていくのが見えたのである。

そしてその後ろを、殺気立った男たちが数人、追いかけていくところも。
彼らの手に、何かぎらりと光るものが握られているのも……！
（あれはナイフ……ま、まさか！）
ベルナは慌てて同乗者に声をかけた。
「ネ、ネメシロさん！　ごっ、ご覧になりましたか、今っ……！」
「ああ、人間が人間を襲っていたようだな」
「ですよね、やはり危険な……い、いえそうではなくて！　あの、ど、どうしましょう」
「はあ？　何をどうするというのだ、貴様」
ネメシロはベルナを小馬鹿にした目つきで問う。
「あのような光景、人間の世にはよくあることではないか。我らには、なんの関係もない」
そう。関係ない以上、ネメシロは傍観するだけだ。
「でっ、でも！」
ベルナは食い下がる。
「わっ、私、あのような方を、放っておけないというか……放ってはいけないというか」
生前は高潔な貴族として知られていた父からの正義の教えが、ベルナの中でむくむくと頭をもたげた。
（きっ、貴族たるもの、いついかなる時も、たとえ見ず知らずでも……困っている方は助けな

ければならないと、父様は、よく仰っていたわ……！）

首を突っ込むのは怖い。

けれども決意し、ベルナは窓から身を乗り出して御者に伝えた。

「ばっ、馬車を停めれぉえっ！」

「ひ、ひぃい！　はい、今すぐッ！」

慌てていたせいで舌を噛み、「停めてください」というお願いが恫喝になってしまったが、それはさておき。

ベルナは馬車を停めてもらい、怯える御者になけなしのお金を払うと、すぐに先ほどの路地裏目指して駆けだした。

（よかった、この辺りならもう家のすぐ近くだわ。道ならわかる……！）

「なっ！　おい、貴様！」

あっという間のベルナの行動に、ネメシロはしばし唖然とし――

「チッ……馬鹿者が」

そう呟くと、すぐさま後を追ったのだった。

「ひいっ、ひいっ、はあっ……！」

よたよたと、青年は路地裏を進む。

二十代と思しきその身は細く、老人のような灰色の短髪と、掛けている大きな黒縁の眼鏡とが相まって、とてもひ弱な印象を与える。

簡素なシャツとズボンという服装が、彼が典型的な中流の市民であることを示していた。

どこに逃げればよいのかなどわからない。逃げるあてもない。

だが腕の中に抱えた、この小さな鞄の中身だけは、なんとしても守り抜かなければ——

使命感だけに突き動かされ、彼は今にも倒れそうな身体をなんとか前へと動かしていた。

「おい、待ちやがれ！」

「う、うわあっ！」

背中に近づく怒声を聞き、彼はますます慌てた様子になると、角を曲がり——

「あ、ああっ……！」

愕然とした。そこは行き止まりだった。

「ううっ……あっ、わあ！」

急いで引き返そうとしたが、時すでに遅し。

追手の一人が彼の肩を摑み、思い切り地面にうつぶせに叩き伏せた。

鈍い衝撃に顔をしかめる青年に、追手たちはにやにやした笑みを向ける。

「ようやくとっ捕まえたぜ。ちょろちょろ逃げ回りやがって」

「観念しな。もう逃げられねえぜ」
身動きできぬまま、抜き身の刃で頬をぺたぺた叩かれ、青年は涙目でひいっと息を呑む。
「おし、まずはブツだ。鞄をよこしな」
「はっ……い、嫌だぁっ！」
「今さら抵抗すんじゃねえ！　大人しくしてりゃ、命だけは勘弁してやる」
「だっ、駄目なんです、こっ、ここ、これだけは……これだけは、絶対っ……！」
鞄を腹の下に抱え込み、渡すまいとする青年に、追手たちは一気に気色ばむ。
「こいつッ……！　こうなりゃ殺してでも――」
青年の肩を押さえつけていた男が、苛立った様子でナイフを振り上げた――その時。
「待ちなさい」
「なっ!?」
突然路地裏に響いた別の声に、追手たちも、青年も動きを止める。
彼らの視線のその先に立っていたのは――一人の少女だった。
呪術でもやっていそうな不気味な外見のその少女は、数歩離れた場所からこちらをじっと睨んでいる。
少し顎を上げたその立ち姿は、まるでこちらを傲然と見下ろしているかのようだ。
「なっ……なんだてめえは！　こいつの仲間か!?」

「……」

少女は目を見開いたまま、答えない。

「女一人で止めに入るたあ、いい度胸してるじゃねえか！」

「……」

答えない。

「てっ、てめえ！　なんとか言ったらどうだコラァ！」

「……」

やはり答えない――――

（ど、どうしましょう……大変なところに入ってしまったわ……）

実際のところ、ベルナは恐怖で動けなくなっていた。

彼女の背中を、気持ちの悪い汗がだらだらと流れ落ちる。

（思わず止めに入ったはいいけれど、こっ、これからどうすればいいのかしら……せめてどなたか、人を呼んでくればよかったわ！）

怖がれば怖がるほどに、ベルナの目はカッと見開かれ、顔はますます引きつり、あたかも怒れる魔神のごとき面構えになっていく。

「な、なんなんだよこの女、ヤバいぞ……」

「おいってめえら、怯むんじゃねえ！　たかが女一人じゃねえか」
「けっ、けど襲いかかったらなんか、呪いでもかけられそうで……」
彼女のただならぬ（ように見える）様子は、男たちの威勢を削ぐのに十分だった。
「っ……ひいい！」
「あっ、こいつっ！」
その一瞬の隙を衝き、青年が拘束を振り払う！
ふらふらと立ち上がった青年は、逃げることまではできないものの、突きあたりの壁にもたれかかり、ひどく怯えながらも決意を秘めた目で追手たちを見据えた。
「くそッ……ふざけやがって！」
男たちはついに激昂し、一斉にナイフを振りかざす。
「こうなったらヤケだっ！　こいつも、あの女も纏めてやっちまえ！」
（え、ええっ!?）
恐怖で固まっている間に事態が悪化してしまい、狼狽したベルナは動けない。
後ずさる時間もない。ぎらついた刃が、みるみるうちに彼女に迫る！
「きゃっ……！」
どうすることもできず、目を閉じるベルナ。――しかし。
「なっ、なんだ!?」

その瞬間、路面の下水溝から、突然汚水が噴き出した！

（こ、これは……！）

ベルナはそっと目を開けた。

茶色く濁った汚水を浴びてしまったらしい男たちは、皆動きを止めている。

「うわあっ、ぺっぺっ、く、臭えっ！」

「なんだこりゃあ、一体っ……！」

「えーっ、これが臭いんですかあ？」

と、この場に似合わぬ間延びした男の声が、下水溝の中から聞こえた。

「ニンゲンって、ホントわからない生き物ですねえ」

一瞬の静寂の後、下水溝から膨れ上がった水がにゅるりと形を変え、男の姿となる。

「腐敗と汚濁の合わさった、こんなにいい臭いですのにぃ」

「あっ……ウシュクさん！」

海藻のような髪の毛をしとどに濡らし、時代遅れの鎧に身を固めたその男こそウシュク――水の四天王だった。

「な、な……」

震える男たちを置き、主君を見つけたウシュクは、ガラス玉に似た目を喜びに輝かせる。

「おお、魔王陛下！　やはりここにおられたのですね、水の『門』を使った甲斐がありまし

た！　実は――――」
「にっ……」
ウシュクの言葉を遮り、男たちが悲鳴をあげた。
「に、逃げろーッ!!」
「これ以上ここにいたら死ぬぞーッ！」
「えっ？　あ、あら……え？」
ベルナとウシュク、追われていた青年をその場に残し、彼らは瞬く間に去ってしまった。
「おおっ、愚かなニンゲンどもは去っていったようですね！　きっと陛下のご威光を前に生命の危険を感じたのでしょう。さすがは陛下！」
「い、いえ、あの、ウシュクさん……おそらく、ウシュクさんに驚かれたのではないかと」
「いや、それだけではあるまい」
声と共に、屋根から路面に降り立ったのはネメシロだ。
どうやら、上から様子を窺っていたらしい。
「奴ら、貴様の眼光を相当恐れていたぞ。なかなか魔王ぶりが板についてきたではないか」
「ですよねぇ！　あの事件以来、陛下のご成長は目覚ましいですよ。成長期ですかね？」
「わ、わかりません……」
ネメシロには皮肉交じりに、ウシュクには心から誉め称えられて、ベルナはなんとも答えら

れない。そんな彼女らに――――

「あ、あのぉ……」

向こうから、青年が恐る恐る声をかけてきた。

「……あっ」

いけない、この人を忘れていた。そう思いながらベルナが彼の方を見やると――

「ヒッ!?」

青年は突如真っ青になり、びくりと硬直する。

「あ、あの、お怪我は」

「ぴっ……ぴやぁあああぁあっ!?」

ベルナが一歩近づくと、彼はがくがく首を横に振り、警笛のような甲高い声で叫んだ。

「っ、あ、あのう落ち着いて」

「嫌ぁあ殺されるぅ！　殺されるぅ！　こっ……殺……殺、しゃれ……」

ばたり。彼はうつぶせに倒れ伏した。

「自分で舌を噛んだらしいな」

「ええっ!?　あっ、あのっ、しっかりしてくださいっ！」

ネメシロの一言に、慌てて駆け寄るベルナ。

事態を面白そうに見ていたウシュクも、彼女に並ぶ。

「自ら命を絶つことを選ばせるとは……さすがは陛下ですねえ」
「そっ、そんなウシュクさん、やめてください！　……ああ、よかった。怪我はしてらっしゃらないわ」
舌を噛む直前に気絶してしまったようだ。青年の無事を確認し、ベルナはほっとする。
（それにしても、私の顔……そんなに怖いのかしら……）
一方でそっと自分の頬を撫で、ベルナはがっくりと俯いた。
「……ほう。ジャン・ジャック・オドヴィド。ユニヴェール新聞とやらの記者のようだな」
「ネっ、ネメシロさん駄目ですよ！　許可なく手帳を見るなんて」
「黙れ、これも情報収集だ。……ん、これは……」
勝手に青年・ジャンの鞄を漁っているネメシロは、数枚の書類を見やる。と、その時。
「う、うぅーん」
ジャンの瞼が動き、次いで、大きく見開かれる。
「あれっ、僕は……？　し、死んでない？　ここは……ぴ、ぴやぁあっ!?」
「あっ、だ、大丈夫ですよ！　わっ、私はその、た、ただの人間ですっ！」
こちらを見てまた悲鳴をあげそうになった彼を、ベルナは急いで制止する。
「あはっ、『ただのニンゲン』だなんて。陛下はまたまたご謙遜をぉ」
「ウシュク、貴様はしばし黙っていろ」

なぜか嬉しそうなウシュクを置いて、ネメシロは青年に向かって言った。
「おい、貴様。命拾いしたな。我らが来なければ死んでいたぞ」
「えっ、あ……あ！」
ネメシロの言葉に、ジャン青年はぱたぱたと自らの身体を確認するように叩く。
「僕……生きてる……あっ、そ、その鞄は！」
「なんだ？　これか？　命を懸けてまで守りたかったのは」
「そっ、そうですう！　だっ、大事な地図が入っているのです！」
言いつつ、彼は必死に手を伸ばした。
「あうう、おっ、お願いです返してください！　そそそ、それを返していただけるならぼぼぼ僕の命は差し上げ……ああっ、そ、そうしたら取材に行けない……あうう」
「あっ、あの、ネメシロさん……」
混乱極まる様子に、おずおずとベルナが目で懇願すると、ネメシロは鼻を鳴らしてジャンに鞄を投げ渡す。
「ああっ……よ、よかった」
ジャンは鞄を抱きしめ、その中身を確認してから、安堵の息を漏らした。
「ああ、ありがとうございます……ありがとうございます！　お、お陰で助かりました」
「最初からそう言っていればいいものを。あなたの悲鳴、耳障りなんですよね」

ぺこぺこお辞儀をする彼に、ウシュクはぽつりと言い放つ。
「ヒイッ!?」
「ちょっと、あの、ウシュクさん！　……ええと、ご無事で何よりでしたわ、ククク……」
「ウヒイッ！　あ、いや……し、失礼しました。僕、怖がりなもので」
ジャンは取り繕うように頭を掻くと、ゆっくりと立ち上がる。
「つ、ついそこのお嬢さんに取って食われるのではないかと思ったり、よ、鎧の方が突然排水溝から現れたり、黒服の方が空から降ってきたり、したような気がしてしまったのですけれど！　きき気のせいですよね？　ねっねっね!?」
「え、えとそれは……」
「陛下が取って食うのは本当ですよう」
「ヒイイイイッ！」
「うるさいなぁ」
「それより」
と、ネメシロが話を戻す。
「貴様、なぜあの連中に追われていたのだ？　一応聞いておいてやる」
「えっ！　あ、は、はい。ぼ、僕……その、新聞記者なんですけれど。少し危ないネタを追ってて、その、街の外れの倉庫街に行きた……あいや」

ぶんぶんと彼は首を振った。
「いやいや、その、えと、とにかく歩いていたら、あの人たちに目をつけられちゃったみたいで……はは……どん臭いから、追いつかれちゃって」
ずれた眼鏡を直そうともせずに力なく笑う彼は、見るからに気弱そうだ。
（命を懸け、記事を守らなければならないなんて……新聞を作るのは、大変なことなのね）
ベルナがほろりと感動している横で、ネメシロは眉をひそめた。
「市街の地図に、印がつけてあったようだが。それがそれほど、益となる情報なのか？」
「ひっ!?　な、なぜそれを……ああっ、ど、どうか見なかったことにしてくださいっ」
顔面蒼白で鞄を後ろ手に隠す彼の様子から見て、そのネタは相当なもののようだった。
「だ、誰かに見られたのが知れたら、ぼぼぼぼ僕、クっ、クビになって、路頭に迷って、の、野ざらし生活をすることに」
「……安心しろ。口外するつもりはない」
半ば呆れた口調で言うネメシロに、ジャンは再びほっと安堵した。
「あっ、あのう……本当に、ありがとうございました。きちんとお礼をしたいのですが、も、持ち合わせがなくて！　はう、ほっ、本当です、本当！　ほらっ、ジャンプしても小銭の音がしないでしょう!?」
「い、いいえ、けっこうです！　と……当然のことをしたまでですから」

「え、あ、そんな……あはは」
落ち着かせるように言うと、ジャンはぴょんぴょん跳びはねるのをやめ、力なく笑った。
力ないその笑みは、しかし、どこか強い使命感を帯びているようにも見えて、ベルナの印象に深く残った。
「あのう……い、色々と、失礼しました」
前に踏み出し、ベルナたちの脇を抜け、急いで駆けだそうとして――
「それじゃ、あうっ」
彼は盛大に躓き転ぶ。
「あ、あうう……そ、それじゃっ！」
ふらふらと立ち上がると、今度こそ彼は一目散に走り去った。
「だ、大丈夫でしょうか、あの方……」
「ふん。貴様より惰弱な人間が、この世にいたとはな」
「ああいうニンゲンって、いずれ自滅するんですよねぇ」
その背を見送ったベルナたちは、それぞれに呟いた。
「ところでウシュク。貴様、一体何用で来たのだ？　邸宅の警護を任せておいたはずだが」
「ああ、そうでしたそうでした！　ニンゲンのせいで忘れるところでしたよぉ！」
ややあってからのネメシロの問いに、ウシュクはやおら嬉しそうに手を叩く。

「お喜びください、陛下！　つい先ほど、火のギンレー殿がお屋敷に到着なさいました！」
「えっ……」
ほう、と感嘆の声を漏らすネメシロの横で――――
「えぇえぇーっ!?」
ベルナの困惑した声が、路地裏に響き渡るのだった。

一方その頃、王宮の執務室では。
（ふふ……たまにはまあ、ああしてからかってやるのもいいだろう）
書類の決裁をしつつ、バスティアンはベルナたちのことを思い出してほくそ笑んだ。
（未だあいつが――ベルナデットが無害な奴だという確証はないが。それでもあの様子では、しばらくは大人しくしていることだろうからな。本心を試すのは、三日後でいい）
サインを終えた書類を積み上げ、次の書類を手に取る。
ふと己の手を見た、彼の表情が引き締まった。
（それにしても、あの時）
手をじっと見つめたまま、バスティアンは思い出す。

ベルナと最初に戦った時、聞こえてきた声のこと。
そしてベルナが魔王として覚醒した時に幻視した、千年前の過去の記憶を――
（あの時聞こえた訴え――過去の聖女の声は、一体なんだったのだろう）
バスティアンは、垣間見ていた。
それは千年前の光景――力尽き倒れた魔王に対し、涙を流しながら「私を許さないで」と口にする、聖女の姿。
「事の真相がわかれば、少しは私にも動きようがあるが……調べてもどうにもならない以上、今はどうすることもできない、か」
魔王と聖女に関する歴史的な記述は失われていて、一切知ることができない。
（それとも、あの四天王とかいう連中を締め上げれば、何か情報を吐くか……？）
魔を灼く『光』の力で、彼は魔物どころか、この世のあらゆる危害から身を守られる。
物騒なことを考えつつ、『光』を手元で点けたり消したりしている、と――
コンコンコン、とドアが叩かれる。
「はい、どうぞ」
途端に柔和な「王子」としての表情に戻り、彼が返事をすれば。
「……今、いいか」
部屋に入ってくるのは、将官用の軍服に身を固めた大柄の男。

身体中に古い傷の痕がある、無骨ながらどこか高貴な雰囲気の青年――バスティアンの兄、第一王子アルベールであった。

「兄上……どうなさいました」

つい最近まで顔を合わせれば険悪になっていた兄の登場に、バスティアンの表情が、少し緊張する。

それを見て、無表情な顔を僅かにしかめてから、アルベールは口を開いた。

「……まだ、俺に慣れないか？」

「い、いえ。そういうわけでは」

「わかっている。俺がお前の執務室を自ら訪れるなど、生まれて初めてのことだからな」

アルベールは手近な椅子を摑むと弟の机のすぐ隣につけた。

「俺も用がなければ、わざわざお前のところに来たりしない。……つまり、用件があって来た、ということだ」

やや回りくどい表現を使ったアルベールは、そう言うと、膝の上で組んだ手の親指をくるくると回し始めた。

（兄上も緊張しているのか？　いつもながらの無表情だが）

バスティアンが密かに思う間に、アルベールは再びそのひび割れた唇を動かす。

「警告に来た」

結論から話すのは、彼の流儀だ。驚いた様子の弟の目をひたと見据え、彼は続ける。
「……お前も知っているかもしれない。今年に入ってから、貴族の邸宅が何者かに狙われる事件が多発している」
「ああ……そう言えば、確かに」
バスティアンはこれまでに見聞きした報告の内容を思い返しつつ答える。
「上級貴族の邸宅を狙った、物盗りや放火が例年よりも多いとか。けれどもそれは、内務省で調べているところでは？」
「調べた結果、わかったらしい。この物盗りが、ただの単発的事件ではなく、なんらかの志向性を持った集団の犯行である可能性が」
「な……!?」
「つまり、テロかもしれない。ということだ」
淡々としたアルベールの言葉に、バスティアンは思わず喉を鳴らした。
――バスティアンたちの父であり現在のフォルキデ国王・アンリ9世は、革命を経て戴冠した新しい王である。
かつて暴政と弾圧でこの国を治めていた国王夫妻を処刑することによって成った今の治世は、安定したものとして高い支持を得ている。
しかし、革命に流血はつきもの。そして、流血は遺恨を呼ぶ。

新王政が旧体制を支持するテロリストに狙われるということは、十分にあるのだ。
「俺がベリス半島の戦争で勝利を収めたことで、諸外国は大人しくなりつつある。しかし国内は——ともすれば、未だ安定からは程遠いのかもしれない」
アルベールは小さく息を吐き、バスティアンに言う。
「内務省でも特別に警戒するそうだ。だが、気をつけろよ、バスティアン。お前は俺と違って社交の場によく出る上に、人気者だからな」
「兄上……」
兄の一言に、バスティアンは目をしばたたかせた。
威容と寡黙ぶりを恐れられるアルベールに比べ、バスティアンは社交の場で評価が高い。
それどころか貴族の間では、不遜なことに、第二王子の方こそ次の王位に相応しいなどと言う者がいる始末だ。
(以前の私なら、兄上のこの言葉を、妬みと怨みからくるものかもしれない、などと勘繰っていたところだが)
今のバスティアンは、感情に乏しい兄の瞳に、弟に対する気遣いの色を見つけていた。
「ありがとうございます、兄上。気をつけることにします。……兄上も、どうかご注意を」
「うむ」
弟の返答に小さく頷き、どこか満足した様子でアルベールは立ち上がった。

「あ……もう行かれるのですか？　コーヒーでもお淹れしようかと」
「いや、いい。これから用事がある。つまり……茶会をするつもりだ。お前の知らない、俺の友達とな」
「と、友達ですか」
社交嫌いだったはずの兄の意外な返答に、バスティアンは思わず問い返してしまう。
そんな弟に、アルベールは弁解するように言葉を繋いだ。
「社交の場など、一切の役に立たんと……いや、俺が出ても誰一人喜ぶまいと、以前はそう思っていたが。俺も少しは、お前に倣ってみようと思ってな。要するに、練習だ」
（わ……私に倣って……）
誇らしいような決まりが悪いような心地に、バスティアンはなんとも答えられない。
かたやアルベールは、そのまま扉に向かおうとして――不意に振り返った。
「……ときに。あの目つきの鋭いマドモワゼルにも、よろしく伝えておけ」
「え？　それはベルナデット……嬢のことですか」
「そう、それだ。シャルトリューズ伯の」
耳を疑っている様子の弟を見て、アルベールはさらに言葉を付け足す。
「……聞いた話では、お前、あのマドモワゼルを今度の式典に招待したとか」
「は、はあ。そうですが、よくご存じですね」

「王宮中で噂になっているからな。俺もたまには、噂に耳を傾けてみたというわけだ」
事もなげに言うアルベールの前で、しかしバスティアンは、心中密かに舌打ちしていた。
（しまった……さっき、堂々とベルナデットを誘ってしまったからな。こうなることはわかっていたはずだったのに）
宮廷の人間は噂好きだ。特に、人気のバスティアン殿下の話題ともなればなおさらだ。奴をからかうのが楽しすぎて、つい失念していた――と、バスティアンは悔しがる。
そんな彼をしばらくじっと見つめた後、アルベールは口を開く。
「……お前のように人気のある男は、どんな女性でもとっかえひっかえだと思っていたが。礼儀正しく誘うとは、意外と奥ゆかしいものだな」
「兄上！　一体何を」
「冗談だ」
「真顔で言わないでください。本気かと思いましたよ」
バスティアンの言葉に、アルベールは僅かに口元を笑みの形に歪めた。
「お前とあのマドモワゼルの間に、何があるのか俺は知らん。あのマドモワゼルの持つ秘密も、お前が彼女を警戒する理由も、知ろうとは思わん。だが」
彼は真顔に戻り、しばし間を置いてから言った。
「……あのマドモワゼルは、悪い奴ではないのではないか？」

「え……」

その問いかけに、バスティアンは――一瞬答えに窮する。

だがすぐに微笑みを浮かべると、アルベールに答えた。

「兄上、それは違います。ベルナデット嬢は、確かに、人の法律を犯しているわけではありませんが。何、社交界の噂というものも、たまには当てになるということですよ」

ベルナの渾名――『呪殺令嬢』を引き合いに出して、バスティアンは言う。

「ふむ――」

アルベールはぱちぱちと目を瞬かせた。

「まあいい。俺には関わるつもりはない。ただ――」

と、彼はゆっくりと部屋の扉に向かった。

「あのマドモワゼルの巻き起こした一件のお陰で、俺は、お前とこうして話せるようになった。と、思ってな」

そう告げるなり、返事も聞かずに――彼は、執務室から出て行った。

「……へえ」

一人になった部屋で、バスティアンは、知らず知らず感嘆の声を漏らす。

（あの兄上が、あんなことを言うとはな。確かに、あの事件に兄上が巻き込まれたお陰で……少しは兄弟らしくなれたと言えば、そうだが）

バスティアンは眉根を寄せた。

（そうだ。それに、きっと……兄上の言う通りだ。あいつは……ベルナデットは、悪い奴ではないはずだ）

それは彼にも、よくわかっていた。

（あいつの前世と……恐ろしげな佇まいと、噂と、四天王の連中の振る舞いとが相まって、あいつは魔王であることを強制されているにすぎない……少なくとも、今のところは）

ふう、と息を吐く。

（だがいずれにせよ、奴は魔王――神託で告げられた人類の敵であり、私の敵だ）

いや――――

（そうではないな。問題はそこではない）

彼は再びじっと己の手を見つめた。

（もしあいつが……ベルナデットが、本当に、真の意味で魔王となる時が来たなら。私は――あいつを討つことができるのか？）

視界が揺らぐような気がして、彼は頭を振った。

脳裏に、先ほどの逃げ回りへたり込むベルナデットの姿と――かつて与えられた神託の夢で見た、荒野に立つ魔王の姿とが重なり、浮かんで消える。

（神よ。私は、どうすれば――）

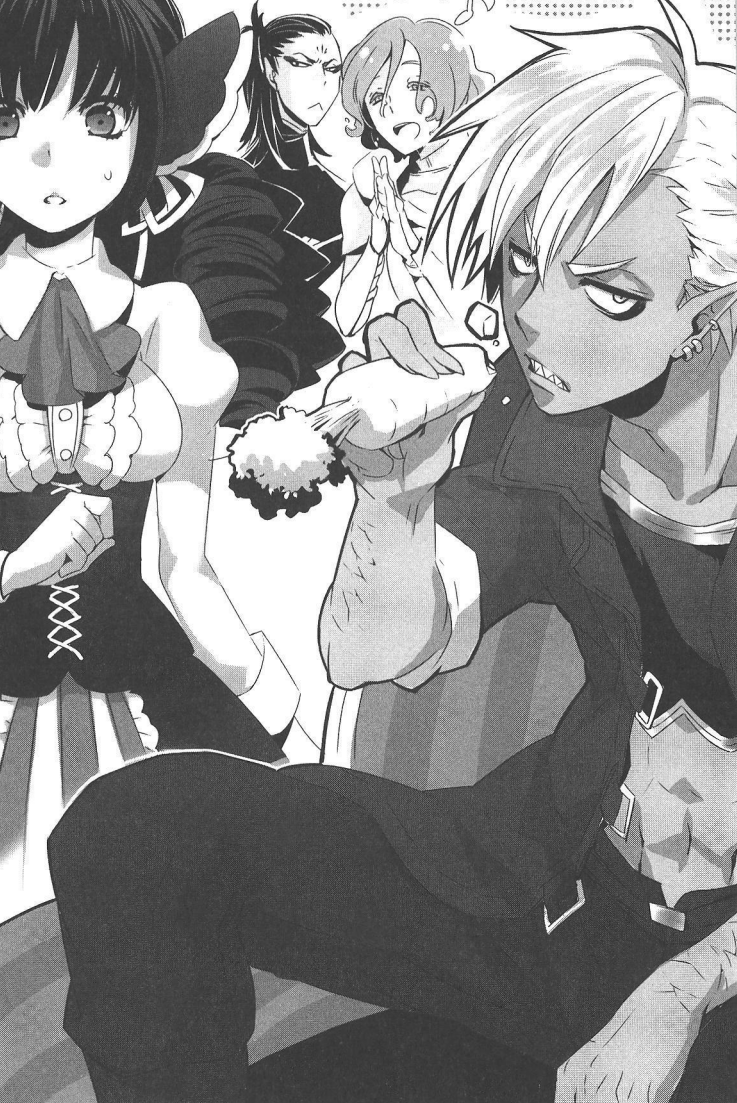
胸元にいつも下げている、青銅製の十字架を強く握り――彼は再び息を吐いた。
（落ち着け、バスティアン。『先のことを思い煩うな』と聖典にもある。まずは、眼前の問題を片づけることが重要だな）
気を取り直し、ペンを手にしたところで、彼の思考は横に逸れた。
（そうだ、眼前の問題といえば、兄上の言っていた……テロ、の可能性か。穏やかではないな。……もしや）
なんとなく、彼は考える。
（その物盗り、ベルナデットと四天王たちが関わっているのでは――）
バスティアンの脳内で、こそこそ金目のものを運び出すベルナの姿が浮かんで、消えた。
「まさかな。いくら奴らでも、そんな狡い真似はしないだろう」
自分の考えをふっと笑い飛ばすと、彼はコーヒーのカップを口に運ぶのだった。

「う、ううう……」
同時刻、シャルトリューズ邸。
かつての白亜の御殿、現在の『幽霊屋敷』のエントランスにて、ベルナは呻いていた。

「あ、あのう、ウシュクさん」
彼女は後ろを振り返り、四天王を呼ぶ。
「本当に応接間に、ギンレーさんがいらっしゃるのですか」
「ええ、そうですよ陛下！　ギンレー殿が、陛下のおいでを今か今かとお待ちです」
「おい貴様、さっさと行け。急ぎ帰って来たというのに、ここで立ち往生では意味がない」
「は、はい、すみません。……そうなのですが……」
彼女は応接間のドアノブを、握っては離しを繰り返している。
ウシュクの知らせを受けてすぐに家に戻って来たはいいものの、いよいよ噂の配下に対面するとなると、どうしても緊張してしまう。
（四天王の中で最も獰猛だという、ギンレーさん……どのようなお方なのかしら……）
自分にうまく制御ができるのかと考えると、途端に彼女のお腹はきりきり痛みだす。
（とっ、とにかくお会いしてからだわ！　それに、その方は魔王の配下で……つまり、魔王である私にしか、どうにもできないことなのだから！）
深呼吸をしてから、ベルナは、ドアノブをしっかと握った。
そして震える手で、ゆっくりとそれを回し開ける――――と。
「……あっ……」
思わず声が漏れた。

視線の先、応接間のテーブルの上に、見知らぬ男が一人座っている。
見た目は、二十代半ばといったところか。
何よりも目を惹く明るいオレンジ色の長髪を、後ろで一本に結わえたその男は、赤く派手な革製の外套の下に、わざわざ丈の短いシャツを着て、へそを出していた。
顔立ちは、かなり整っていると言っていいが、金色に光る目は刃物のように鋭く、その下には不健康な隈が浮いていた。
そしてその手にはなぜか、一本の長いニンジンを持っている。
（こっ……怖そうな、方……）
ベルナはびくつき、固まったまま、何も言えない。
「……」
一方男は無言でベルナを睨み据え、生のニンジンを口に運び、ぽりぽりと咀嚼する。
飲み込み、次いで、おもむろに彼は口を開いた。
「――何見てんだべ、スケベ!!」
「えっ……え!?」
戸惑うベルナに構わずに、男はゆっくりテーブルから降りると、彼女の頭から爪先までをじろじろと眺め倒す。男はかなりの長身だ。
「はん！『初対面の相手には、まず挨拶』って、そったらことも親御に習っとらんのか？」

「え、いえ、あの……」
「はー！　そーけそーけ。人類っつーのは相変わらずの無礼三昧だべな。いいご身分だべ」
明るい声音で突然詰め寄られ、ベルナは答えることができない。
彼女が口ごもっているのを見て取ると、男は彼女の後ろに控えていた、ネメシロに視線を送る。
「おうネメシロ、久しぶりだべ。こいつが例の魔王サマか？」
「久しいなギンレー。そうだ。こいつが魔王様だ」
「えっ……！」
ベルナは驚き、男を見やる。
「あっ、あのう……あ、あなたがギンレーさん……ですか？」
「そーだべ。このオレが他ならぬ火のギンレーこと、ギンレー・アワズゥだべ」
男……ギンレーは鼻息荒く言い放つと、続けて述べた。
「お前さ、オレがギンレーでなかったら誰だってんだべ。言って寄越せ」
「あ、いえ、その……ごめんなさい」
「……はーっ」
呆れ顔でため息をつくと、ギンレーはひょいとぞんざいにベルナを指さす。
「おいおい、これが本当に魔王サマだべか？　千年待たされたと思ったら、えらく弱々しいべ。



覇気がないよ、覇気が」

「諦めろ、ギンレー。それは既に我らが通った道だ」

ネメシロが同調すると、ウシュクがむっとした表情で口を出す。

「ギンレー殿、ネメシロ殿、失礼ですよ！　陛下は確かに見た目は弱そうですし実際普段は弱々しいですが、いざとなれば千年前と変わらぬ強さですし、それにほら！　今も恐ろしい顔で、こちらを見ておられるではないですか！」

「ウシュク、お前さ、これは怖がっとるだけだべ」

（あっ。この方は、私の表情を読みとってくださったわ……）

今までさんざん誤解されてきたベルナは、ついそれを嬉しいと感じ――――

（っ……、いけない。この方の仰る通り……私からきちんとご挨拶していないなんて、無礼そのものだわ）

思い直し、慌ててギンレーに向かって深々と頭を下げる。

「あの、ギンレーさん。さ、先ほどはご無礼をいたしまして、申し訳ありません。私はベルナデット・ド・シャルトリューズと申します……よっ、よろしくお願いします」

「ふーん」

ベルナの挨拶に、しかし、ギンレーは微妙な唸り声をあげる。

「よろしくされんのはいいけどもよ。言っとくが、オレはお前さに従うつもりはないべ」

「え……」
「なっ」
ベルナの、そしてネメシロの漏らした驚愕の声が、重なる。
「え、えええぇえっ!?」
そして今日二度目のベルナの叫びが、応接間を揺らすのだった。

第二章　不信と不審、そして

「おいギンレー。貴様、どういうつもりだ？」
「そうですよぉ！　先ほどまではそんな素振り見せなかったのに、どうしたんですかぁ」
「どうしたもこうしたも、何言われてもオレの気持ちは変わらんったら変わらんべな」
応接間のテーブルの上に胡坐をかき、今度はラディッシュを齧りながらギンレーは言う。
「いきなり魔王の転生体ですと言われたからつって、はいそーですかとホイホイ人類なんかに従えるほど、オレは『お人好し』じゃあねえべ」
「うう……」
じろりと彼に睨まれ、近場の椅子に腰かけているベルナは口ごもる。
そんな彼女の隣で、納得できなさそうにむくれながら、ウシュクは抗弁した。
「ですが、この陛下も千年前と同じ魔王陛下であることは確かなのですよ！　ギンレー殿は陛下がアマトル殿を討つ様をご覧になっていないから、そんなことが言えるんですよう」
「はん。そりゃわかっとるべ、ウシュク。ここに着いてすぐ、お前さから話は聞いたべな」

葉だけになったラディッシュをぽいと口に放り込んでから、彼は続けた。
「このお嬢が普段は魔王としての記憶も力も失くしてるってのも、覚醒してアマトルを討ったってのも……アマトルがトチ狂って暴走したってのも、今度の聖女サマはこの国の王子だってえのも、一通りのことは聞いたから知っとるべ」
「そうですよねえ、わたくし説明しましたから！　それでしたら、なぜ陛下を認めないのですか？　わけがわかりませんよっ」
ぷくうと（至って機械的に）ウシュクが頬を膨らませると、その傍らで眉根を寄せ、しばし黙っていたネメシロが、口を開いた。
「フン。そういえば、それがお前の……いや、お前たち一族の性だったな。ギンレー」
「覚えててくれて嬉しいべ」
ふふんと笑ったギンレーは、妖しくも、どこか誇らしげに見える。
「い、一族の性……ですか？」
恐る恐るベルナが問うと、それに答えたのはネメシロだった。
「そうだ。言っただろう、此奴は自尊心が高く、馴れ合いを嫌うと。それは此奴ら一族の――ドラゴンという種族に共通の特徴だ」
（ドラゴン……!?）
ベルナははっと息を呑んでギンレーに視線を送った。

ドラゴンといえば、彼女が読んできた物語にもよく登場する魔物である。
鱗に覆われた巨体に大きな翼を生やし、鋭い爪と牙、強力な炎を武器とする伝説の存在。
（ギンレーさんは、ほ、本物のドラゴンなのね……）
物語で慣れ親しんできた存在が目の前にいるということで、ベルナはつい、不思議な感動を覚えてしまう。よく見れば、ギンレーの手の甲の一部には、赤い鱗が生えていた。
「ドラゴンどもは誇り高い。どれだけ強大な相手であろうと、死に瀕することがあろうと、自らが認めた者でなければ、決して従うことはない。たとえ魔王であろうとも、な」
そう口にしながら、ネメシロはゆっくりと瞼を閉じ――――
「……しかし！」
やおら、カッと見開いた。
「いいかギンレー。警告するが、いくら貴様にこの腑抜け魔王に従うつもりがなかろうと、我らの行動の障害となる行為は慎んでもらうぞ」
「はぁん？」
小首を傾げ、気の抜けた返事をするギンレーに、ネメシロはずいっと近づいた。
「独断での行動は許さぬ、ということだ」
「ほぉー。さすが魔神サマは、なかなか手厳しいことを仰るもんだべな」
「黙れ。この我が、四天王筆頭であることを忘れたか」

顔を近づけたまま、魔神とドラゴンはしばし睨み合う。
至って不機嫌そうなネメシロに対して、ギンレーは小馬鹿にしたような態度を崩さない。
「……ふふっ」
ややあってから、睨み合いを続けたままに、ギンレーが口を開く。
「そーいやぁ、その『四天王筆頭』てのは、一体誰が決めたことだったべかなぁ？」
「何っ？」
「確かにネメシロ、お前さは偉いし賢いし強い。それは千年前から認めとる。けども、さ」
ドラゴンは、にやりと口の端を吊り上げた。
「オレは別に、お前さに従うつもりは端から、これっぽっちもないんだべ。千年前からな」
「なっ……!!」
ネメシロの頬に、怒りの朱が滲む。ベルナが驚きの声をあげる間もなく――
「貴様ッ!!」
怒気を露わにしたまま、ネメシロはふわりと宙に浮かんだ。
「ギンレー。どうやら貴様、仕置きをされたいようだな……！」
「はん。仕置きってのは、親が悪ガキにやるもんだ。知り合いにやることじゃねえべなあ」
テーブルの上に座ったまま、ギンレーはまったく悪びれない。
彼らのやり取りをしげしげと見つめていたウシュクは、しばらくしてポンと手を叩いた。

「ああっ、もしかして喧嘩!?　喧嘩ですかぁ？　じゃ、わたくしも混ぜてくださいよう」
「いいだろうウシュク、加勢しろ。この不良ドラゴンに、我らの恐ろしさを教育してやれ！」
びしっとギンレーを指さすネメシロのもう片方の手中には、圧搾された黒い大気の塊がとぐろを巻いていた。完全に臨戦態勢だ。
「あわわわわわ」
突然の展開に、ベルナは言葉にならない呻きを漏らしながらおろおろしている。
「あっ、あのう！　皆さんどうか落ち着いてください！」
「魔王、貴様は黙っていろ」
「落ち着いてないのは、どっかの誰かさんだけだべ。なぁネメシロ？」
「止めないでください陛下！　これはいわば、喧嘩という名の粛清なのです！」
ネメシロに続き、ウシュクもまた身体の表面をどろどろと水に変え始めている。
「そっ、そんな……！」
ベルナは頭を抱えた。
（こ、ここで皆さんを仲間割れさせるわけにはいかない……アマトルさんのような事件は、もう二度と起こしてはならないのに！）
どうすれば彼らを止められるか、必死に考えを巡らせるベルナ。
しかし事態は、彼女に思考を纏める時間を与えてはくれなかった。

「――喰らえッ!!」

ネメシロが腕を振り下ろし、腐敗を纏った颶風が、ギンレー目がけて殺到する！

だがギンレーはそれが届くよりも早くに身を翻し、テーブルの上から姿を消した。

「はっ、驚いた。やれやれ、魔神サマのお怒りは強烈だべ」

素早く跳び退り、床に降り立ったギンレーがうそぶく間にも、ネメシロの風の直撃を受けたテーブルは、みるみるうちに腐った木の塊へと転じていく。

（あああ……母様のお気に入りだった、大切なテーブルが……！）

去年、殿下の襲撃を受けてから、地道な修理でなんとかそれらしい姿に戻ってきた応接間が、また見るも無残な姿になっていくのを見て、彼女はぐすんと鼻を鳴らす。

「うりゃー！」

間を置かず、ウシュクが抑揚のない掛け声で叫ぶ。

それと共に、彼が身体に纏った水が槍の穂先の形に変じ、一斉にギンレーに迫った。

が――――

「はん！」

ベルナの目に、動じずに笑うギンレーが映る。彼は大きく息を吸い――

「……っがあ！」

気を吐いたと同時に、その口から激しい炎が放たれた！

その猛烈な熱はウシュクの水の『槍』にぶつかり、威力を相殺し、蒸発させる。
ベルナは思わず口元を手で覆った。
「ありゃー。やっぱ人間界は結界のせいで調子出ないべ。ホントの姿に戻れてたなら、今のでこの家吹き飛んどったのになぁ」
首をこきこき回しつつ、平然とギンレーは言いのける。
(あ、ありがとうございます、神様、聖女様……)
聖女の『結界』がある幸福を、ベルナは神に感謝せざるを得なかった。
「うわっち！　……あーびっくりしたぁ」
一方でウシュクは水を慌てて身体に引っ込め、ふうふうと指先を吹く。
「ちょっとー、ギンレー殿！　蒸発させるのとかやめてくださいよ！　こういう時は、空気を読んでぶっ刺されておくのが、世間の常識なんですよ！」
「そりゃ知らんかった。忘れんようにメモっとくから、紙とペンでも持って寄越……せ！」
対するギンレーは、再び炎を吐く。
屋敷を貫く激しい衝撃の後、橙に揺らめく焔が壁を伝い、調度品に燃え移る！
「あああ、お、お家がぁあ！」
このままでは邸宅が燃え落ちてしまう！　頭を抱えたベルナは――
「このたわけ者が……！」

低く呻吟するようなネメシロの声に、はっと視線を上げた。
見れば、彼の掌中に、これまでにないほど巨大な風の塊が現れ、さらに膨らんでいく。
「減らず口を……」
腕を振り上げ、振り下ろし、ネメシロは力を――――
「叩くなッ！」
解き放った！
「ぬっ」
ギンレーの目に警戒の色が浮かび、すっと鋭く尖る。
（いけない……！）
それを見た途端、ベルナは、勝手に身体が動くのを感じた。
魔神が渾身の力を籠めた黒い腐敗の大気が、唸りをあげて迫る中を――――
「やっ――――！」
彼女は両腕を広げ、ギンレーの前に立ち塞がった。
「やめてくださー……ごふっ」
刹那、風の塊が顔面を直撃する！
「なっ」
「あっ、陛下！」

げほげほと咳き込むベルナの姿に、ネメシロもウシュクも動きを止めた。
ギンレーはというと、ただ何も言わずにぱちんと指を鳴らす。
その瞬間、椅子や戸棚を焦がしていた炎は、何事もなかったかのように消えた。
ベルナはそれを見てほっとしながらも、んんと咳払いをする。
「うう、だ、大丈夫です」
(この風、とても気持ちの悪い匂いで、少し苦手だわ)
と、彼女は自分にじっと視線を注ぐギンレーに気付いた。
鼻をぽりぽりと掻いたまま、彼は黄金色の瞳をただ、ベルナに向けていた。
至近距離で見てみれば、彼の瞳孔は縦に細長い。
「う……」
ただ無言の彼を、ベルナはやはり怖いと思いながらも――――
(……し、仕草のせいかしら。この方どことなく、兄様に似ているわ)
ギンレーに、家族の面影を見るのだった。
そう思うと、ベルナは不思議と、彼を怖いとは考えたくなくなる。――それに。
(そうだわ……見た目や表向きの態度で、その方の内面まで測るのは、よくないことだわ)
そうされる悲しみを、彼女はよく知っている。
(と、とにかくこの方が無事でよかった……)

「おう、お前さ」
「はっ、はい！」
突然ギンレーに話しかけられ、ベルナは居住まいを正して返事する。
「お前さ、ネメシロの風を喰らっても、腐らんのけ？」
「そ、それは……」
「そうですよ、ギンレー殿！　申し上げたでしょう!?　陛下はやはり陛下なのだと！」
――魔物の力は、より強い力を持つ同族には通じない。
「ほー……普段はまるきり力がない、というわけではないんだべな」
ギンレーは感嘆ともとれる声を漏らした。
一人で胸を張っているウシュクを置いて、彼はまたしばしベルナを見つめる。
「それでお前さ……さっきのは、オレを庇ったつもりけ？」
「え、あ、そっ、その……」
（……咄嗟に身体が動いてしまったのだけれど……）
なんと答えればよいか、と窮するベルナに、ギンレーはうわっと身をのけ反らせる。
「そんなすごい顔せんでもええべ！　ちょっと聞いてみただけだんべから」
「え！　あ、す、すみません……」
落ち込むベルナを置いて、ギンレーはネメシロに視線を向けた。

「おうネメシロ。なるほど、お前さがこのお嬢さに従う理由、少しわかったかもしれん」
「フン。我の場合は従っているのではなく、あくまで導いてやっているだけなのだがな」
「なんだべ、オレには従えっつっといてそれはないべ！　どんだけ二重基準なんだべ」
どうやら気を静めたらしく、軽やかに床に降りたネメシロにそう言いつつも、ギンレーは少し柔らかな態度になっていた。
「……なあ、お嬢さ」
「は、はい」
「やっぱり、お前さに従うってえことは、まだできんべ。――だって、お前さがそれに『足る』かどうか、まだもうちょっとわからんのでなあ」
「ええーっ。こんだけやったんだからもういいじゃないですかぁ」
「黙れ、ウシュク」
ネメシロがウシュクの後頭部をひっぱたくのを見やってから、ギンレーは続けた。
「だども、ま、だからっつってこのまま魔界に戻るほど、オレもガキじゃあないべ。一つ、ヒントを出したる」
「ヒント……？」
「ああ。もしもお前さが、千年前と同じく、オレを配下にしたいってえんなら……」
ドラゴンの目が、細められる。

「お前さ……オレを『納得』させて寄越せ」
彼は静かに、そう言った。
「な、納得……？」
「そーだべ。ただお前さが千年前と同じように、オレを納得させてくれりゃあそれでいい。そうすりゃ従ってやるべ。……あ、『素手でオレを倒す』とか、そーいう話じゃあないべ？」
ギンレーはぐっとベルナに顔を近づける。
「お前さが魔王の生まれ変わりとして、そんでこれからも魔王として生きるつもりだってんなら……それくらい簡単なはずだべ？　前と同じことをすればいいだけだんべな」
念を押すようにベルナの目を覗き込むドラゴンの瞳には、敵意はないものの、妥協はしないという強い意志が籠められていた。
「やれやれ、やはりこうなるか！　貴様が惰弱な魔王だから、このようなことになるのだ」
「すっ、すみません……」
ギンレーに詰め寄られたまま、ネメシロの呆れ声に謝るベルナ。
「『納得』って……千年前の陛下はギンレー殿に何してましたっけ？　ねえ、ネメシロ殿」
「フン。さあな」
「ははん、そこいら辺は教えないべ。ご自分で考えて寄越せ」
ウシュクの問いにも冗談めかして、ギンレーは肩を竦める。

「……ま、後は」
と、彼はベルナから身を離した。
「しばらく好きにさせてもらうべ。人間界でちょっくら、やりたい『用事』があるんでな」
「『用事』だと？」
ネメシロが眉を吊り上げた。
「何をするつもりだ」
「ふふん。そいつばっかりは内緒だべ。邪魔はせんで寄越せよ。でないと――また火ぃ吹いちまうかも？」
物騒なことを言うギンレーの前で、ベルナは首を傾げる。
（な、内緒の用事……？）
一体なんなのだろう。そう思う彼女に念を押すように、ギンレーは言う。
「……ってことで、いいべか？　お嬢さ」
「わ、わかり……ました」
膝の上でぎゅっと拳を握りつつ、ベルナは必死に返答した。
（ど、どうしましょう）
ベルナは、ごくりと喉を鳴らした。
（千年前と同じように、ギンレーさんを納得させなければ……そうでなければ、穏便な解決策

を探すどころか、話を聞いていただくことも……いえ！　この前のような事件を起こさないようにすることも、できないわ）

ぐるぐると思考を巡らせながら唸るベルナの前で、ギンレーは『にしてもすごい面構えだべ』などと言っている。

「ところでギンレー。魔界の様子はどうなっている」

「あー、あそこはいつも通りの不景気ぶりだべ。ま、姉貴は『四千歳になる前に結婚できてよかった』とか景気いいこと言うとったが……どーせ結婚なんて人生の墓場だべ」

「ふーん、そうですかぁ。ところで『結婚』とはなんですか？」

一向に噛み合わない、魔物たちの会話。

そんな中、ギンレーは外套の懐に手を突っ込み、おもむろに小さなキャベツを取り出す。

（す、すごい）

先ほどのラディッシュに続き、次々と野菜を取り出す彼の姿に、貧乏なベルナはつい見惚れてしまった。

（美味しそうだわ……）

「やんねーべ!!　そんなスケベェな目で見ても」

「えっ!?　あ、ち、違います！　ごめんなさい」

慌てて手をぱたぱたと振るベルナだが、ギンレーは不審の眼差しを向けている。

「まったく油断も隙もねえべ。これだから人類は……」
「違いますよぅ、ギンレー殿。陛下は野菜より、動物の死肉の方がお好みなのですから」
「オエッ、肉ぅ？　あんな生臭いもん、よく食うべな。オレは野菜しか食う気にならんべ」
（ベジタリアンな方なのね……）
そんなに物欲しそうな顔をしていたかしら――と俯きながら、ベルナは思う。
ドラゴンというと、牛一頭や乙女一人を丸呑みにするようなイメージがあったのだが、どうやら好みはそれぞれのようだ。
ギンレーはばりっとキャベツを丸齧りにすると、満足そうな声を漏らす。
「ふふん、やっぱあれだべ。オレは人類は好かんが、千年経った人類は、なかなか美味い野菜を作るよーになってるべ。その点においては高く評価してやんべ」
「それではギンレー、お前やはり、その食物はここに来てから手に入れたものか。どうやって手に入れた？　……奪ったのではあるまいな？」
（はっ……！）
ネメシロの鋭い問いかけに、ベルナは弾かれたように顔を上げた。
（もしギンレーさんが、皆さんにご迷惑をおかけしていたら……！）
ベルナは固唾を呑んで彼の返答を待つ。しかし。
「何言ってんだべネメシロ。もちろんコレを使ったに決まっとるべ」

そう言って、ギンレーが取り出したのは――――

「あっ！」

ベルナは目を疑った。

彼が外套のポケットから引き出した手の中に、紛れもないこの国の金貨が、燦然と輝いているではないか。

（じゅっ、十リヴル……いえ、少なくとも二十リヴル以上はあるわ！）

記憶のかなたでしか見たことのない高額貨幣に、ベルナはつい身を乗り出してしまう。

なにせ貧乏になって以来、手にする機会のある通貨といえば、小さな銅貨や、せいぜい銀貨くらいなのだ。

（本物のリヴル……本物の金貨……す、すごい……どんな匂いがするのかしら……！）

「うぐぐ……うぐぐぐ……」

思わず声が漏れてしまう。

「うおぅ。またこのお嬢さ、すごい食いつきっぷりだべ！　だから絶対やんねーって」

「それをどうやって手に入れた、と聞いている」

ネメシロはなおも鋭く問う。

「はん。怖い言い方するもんだべ、魔神サマは」

しかしギンレーは、その口元に不敵な笑みを浮かべるだけだ。

「……心配せんでも、オレにはこいつがあるんでなあ」
彼はぱちんと指を鳴らした。瞬間、中空に小さな炎の球が現れ、弾ける。
そこからぽとりと落ちてきたのは——大粒のダイヤモンド。
「うぐぅっ！」
再び興奮し、あげそうになる声をベルナは慌てて自分で抑えた。
「ほれ。やっぱり魔界でもこっちでも、貴重なもんと言ったら宝石だべ？」
「……ほう。魔界で集めた宝石をこちらで換金した、ということか。お前の『収集癖』も、たまには役立つな」
「『収集癖』じゃあなくて、『貯蓄』と言って欲しいとこだべ。ま、野菜と宝石だけは何言われたってやめられん癖ではあんべけども、な」
クカカカと、竜は小さく笑い声をあげた。
（そ、そういえば……）
ダイヤの輝きに目をチカチカさせながら、ベルナは考えた。
（物語に出てくるドラゴンさんは、よく洞窟に宝石や宝物を貯め込んでいたわ）
ドラゴンを倒した勇者が、囚われのお姫様を助けると共に奪われていた宝を取り返し、国に富をもたらすというのが、よくある展開だ。
（ギンレーさんも、宝石がお好きということなのかしら……）

彼女は、そんなことを考え――

（あっ……宝石、といえば）

ふと、持っていた封筒――バスティアンに貰った、三日後の式典への招待状を見る。

（『ウェヌスの涙』……アマトルさんへのご挨拶……）

ベルナはそっと目を閉じる。

（そう、もうアマトルさんの時と同じ間違いはしない。ギンレーさんに『納得』していただく方法……きっと見つけ出して、そして、魔王として認めていただかなくては）

ギンレーは、どうやら見境なく暴れ回るタイプなどではないようだが、それでも彼自身が「好き勝手にやる」と言っている以上、一体何が起こるのかわかったものではない。

（アマトルさん……どうか、見ていてくださいね）

ベルナは決意を新たに、目を開いて――

「魔王陛下！」

「きゃっ！」

いつの間にか眼前に、ウシュクが立っていた。

彼はベルナが目を開けたのを確認すると、緩い笑顔を浮かべる。

「あ……あら」

辺りを見渡せば、いつの間にやらネメシロとギンレーがいない。

「あの、ウシュクさん。お二人は……？」
「ああ、二人なら、なんだかどこかへ行きました！　話し合いたいことがあるとかで……わたくしは除け者なんですよ！　ぷんぷん！」
ぷんぷんと口では言うが、彼の表情は相変わらずのんびりしたもののままだ。
「ところで陛下！　ギンレー殿のことですが」
「は、はい」
「どうです？　わたくしの申し上げた通りでしょう!?」
さらに口角を吊り上げて、ウシュクはびしっと親指を立てた。
「魔王陛下に対しても構わず振るわれる、その遠慮のなさ！　そして不遜にも陛下を試すかのような、その偉そうぶり！　ねっ、獰猛でしょう!?」
「え!?　え、ええ……そうですね」
（ウシュクさんの言う『獰猛』とは、そういう意味だったのね……）
ベルナが頷くと、ウシュクはうっとりと目を閉じた。
「ああ！　陛下は一体どのようにして、あのギンレー殿を屈服させるんでしょうねぇ！　火責めですか、それとも水責めですか!?　わたくし、今から楽しみにしていますね！」
「あ、あのうウシュクさん。その、屈服ではなくて、納得……」
訂正しようとするベルナだが、嬉しそうにくるくる回るウシュクには聞こえないようだ。

（わ、私……これからどうなるのかしら）

招待状を再び見つめてから、ベルナはかくりとうなだれたのだった。

――三日後。

「……こ、ここね」

馬車を降りたベルナは、眩しい日差しに目を細めた。

目の前にあるのは、王立博物館。

かつて離宮であった建物が、革命後に国民に解放されたことで生まれたこの博物館は、荘厳にして瀟洒な佇まいであり、この国の現在の安寧の象徴ともいえた。

晴れた空の下には似つかわしくない、漆黒のドレス――それしか持っていないのである――を着たベルナは、人目を気にしながらそそくさと入り口に向かう。

今ここにいるのは、彼女一人。

バスティアンからの指示通り、四天王たちは置いてきたのだ。

（お約束はお約束だし……それにもし、四天王の方々とバスティアン殿下がまたお会いしたら、今度こそよくないことが起こるかもしれないもの）

彼女は出掛ける前の彼らの様子を思い出す。

くれぐれも間抜けな行動はするなよ、と念を押すネメシロ。
連れて行ってくれと言いつつ、『博物館』という言葉の意味をわかっていないウシュク。
『好き勝手やる』の言葉通り、朝から姿を見せていないギンレー。
三者三様の姿を思い浮かべつつ、ベルナはついため息をついた。
（……結局まだ、ギンレーさんとはあまりお話しできていないわ……）
なんだかんだ言いながらもベルナを導いてくれるネメシロとは対照的に、ギンレーはどうやら興味のないことには一切動かない性質らしい。
たまに思い切ってベルナから話しかけても、のらりくらりと会話を打ち切り、すぐにどこかに行ってしまうのだ。
（やらなければならないことは多いわ……いえ。そういう時こそ、まずは目の前のことに集中しなければ）
ベルナは頑張って思考を前向きに切り替える。
（うう……とは言ったものの）
手にした招待状をそっと撫で、口から飛び出しそうな心臓を、なんとか宥める。
（き、緊張してきたわ。私、こんな場に一人でお邪魔するのは、生まれて初めてだもの）
たまに大きな舞踏会に出ることはあったが、こんな白昼堂々、しかも公的な場に出るというのは、まだ両親が生きていた頃を除けば、一度もない。

緊張している彼女の顔を見て、彼女以上に動揺している門衛に招待状を見せ、ベルナはついに博物館の中に入った。

やや奥にある、特別展示用の大きな部屋。

そこが、今日の式典――『ウェヌスの涙』の展示のための部屋だった。

「だっ、大丈夫」

あまり人のいない廊下を歩きながら、ベルナは必死に自分に言い聞かせる。

「緊張しなくても大丈夫。少し人の多いところに行くだけ。そして、アマトルさんにご挨拶するだけ。こ、こういう時こそ微笑みを忘れないようにしないと。えと、ク、ククク」

「何をやっているんだ、お前」

「きゃああっ!?」

背後から突然聞こえた声。

短く悲鳴をあげて振り返ると、そこに立っていたのは呆れ顔のバスティアン殿下だった。

今日も麗らかな陽光のような美しさの彼は、行啓のための正装を纏っていた。

「でっ……殿下」

間近で見る彼の眩しさに、改めてベルナは目をしばたたかせる。

「あっ、あ、あのう、ご、ごきげんよう」

この前ギンレーに言われたことを思い出して、慌てて挨拶をすると、バスティアンはふうと

息を吐いた。

「ええ、ごきげんよう。……そろそろお前が来る頃かと思って、控室から出てみれば……不気味な囁き声が聞こえてきたのでな。案の定、お前だった」

「ええっ……わ、私……口に出してしまっていました？　先ほど」

「思い切りぶつぶつ言っていたぞ。微笑みがどうとか――まったく。一つ言わせてもらえば、お前の場合笑うより、黙っている方が、まだ他人の寿命を縮めずに済むんじゃないか？」

「そ、そうですね……」

もっともな指摘だと、ベルナは肩を落とす。彼女の様子に、殿下はさらに呆れ顔だ。が、すぐに改まった様子になると、こう言った。

「まあいい。ともかく私の指示通り、お前だけでここに来ているようだしな。さ、行くぞ」

「えっ!?」

なんの気なしにベルナの手首を摑み、廊下の向こうへ進もうとするバスティアン。

ベルナは思わず声をあげる。

「あっ、あ、あああああのう殿下!?　な、なぜ私の、手を……」

「なぜって、決まっているだろう。今日、なんのためにお前を呼んだと思っている？」

眉をひそめながら、バスティアンは言う。

「お前を呼んだのは、お前を試すためだ。魔王として、よからぬことを考えていないかどう

か……今日一日の態度を見て、調べるために呼んだんだからな」
「えっ……そ、そ、そうなのですか？」
「当たり前だ、でなければどうしてお前を呼ぶものか。まあ……ついでにお前のかつての配下の弔いを、させてやってもいいとは思っているが」
ベルナの腕を引っ張りながらも、彼は小さく鼻をうごめかした。
「それとこれとは話が別だ。今日は私がお前を監視する。お前が大人しくしていれば、少しは疑いを解いてやってもいいが――もし何かあったら」
「きゃっ！」
手を襲った痛みに、ベルナは小さく声をあげた。
バスティアンが、彼女と繋いでいる手にほんの僅かな時間だけ『光』を出現させたのだ。
「こうするからな」
「わ、わかりました……」
怯えながらも頷くベルナに、バスティアンはにやりとした彼の本来の笑みで応える。
「なるほど、理解が早くて助かる」
そう言って、彼は足を止める。
手は繋いだまま振り返り、じっとベルナの目を覗き込んだ。
ターコイズブルーの瞳に射抜かれ、彼女の胸の中心がカッと熱くなる。

「いいな、ベルナデット……」
バスティアンは低く、静かに、ゆっくりと口にする。
「私の傍を離れることは許さない」
「っ……！」
言葉の意味を理解した瞬間――ベルナは自分の顔に、一気に血が上るのを感じた。
（あっ……わ、わた、私）
ぼうっと熱くなってしまった顔がなぜか恥ずかしく、彼女は目を伏せる。
（ど、どうしてこんな……ああっ、また『殺意』だわ。きっと私の中の魔王の意識が、殿下の言葉に反発しているんだわ！）
決して、かつて読んだ恋愛小説の一節を――冷酷な王が、初めて垣間見せた愛情を吐露した台詞を、思い出してしまったからではない。
（いけない！　もしここで私が魔王になってしまったなら、元も子もないわ！　静まって……静まってください、私の中の『魔王』さん!!）
「何を真っ赤な顔でグネグネしているんだ、お前は？」
内心苦闘するベルナに、一方でバスティアンは不審の眼差しを向けている。
「そんなに自由行動がしたかったのか？　わからん奴だな。とにかく今日一日は、我慢してもらうからな」

「あ、は……はい」
（ああ、また呆れられてしまったわ……）
少しだけ落ち着きを取り戻し、ベルナが返事をすると、バスティアンは念を押すように一度ふんと頷いてから、再び歩を進めた。彼女の手を取ったまま。
（今からこんな調子で、私、大丈夫かしら）
今日一日何も起こらなければ、殿下からの疑いや締め付けが少しでも緩くなるはずだ。そして四天王たちも動いていない今、おそらく本当に今日は、何も事件など起こらないはずだ。ベルナさえしっかり気を保っていれば。しかし――
（ううん……なんだかおかしいわ。私……胸騒ぎがするような……）
落ち着いて歩きだすと、ベルナの胸中は、先ほどの『殺意』とは別の感覚でざわめく。しかもそのざわめきは、歩みだすごとに大きくなっていくような気さえ、するのだった。

「ここに我らは、改めてこの宝玉『ウェヌスの涙』を国王陛下より賜った国宝と定め！　古の遺跡よりこの地に宝玉をもたらしたアルベール殿下の栄光を――」
式典は、会というよりは、むしろ厳かな儀式だった。
宝玉『ウェヌスの涙』は、透明なガラス製の箱に入れられ、台座の上に置かれている。

紫色のその輝きは、かつて見た時と変わらぬ美しさを放っていた。
台座の前で熱弁をふるうのは文化相だ。その隣の上座には、バスティアンが座っている。
本来ならこの宝玉を発見した一番の功労者であるアルベールが参席するはずだったのだが、彼は今軍務により首都を離れているため、欠席している。
ベルナは、他に列席している貴族たちと同じ、宝玉から少し離れた場所にいた。
さすがに式の間も手を繋いで監視するわけにはいかないので、一時的に離れているのだ。
彼女が会場にバスティアンと共に現れた当初は、動揺する者も多かった。
だがそこは高位の貴族、こうして式典が始まってみれば、あからさまな行動をする者はいない。時々、ちらちらとベルナを見る者がいるくらいだ。
そしてベルナ本人は――最初のうちは、緊張の極致にあったのだが――今はただじっと、『ウェヌスの涙』に視線を注いでいた。
（アマトルさん……）
彼女は心の中で、最後の祈りを捧げた。
（かつてアマトルさんだった欠片は、これからはずっとここにいることになりました。もしよかったら、これからも私のこと、見守っていてください。私……頑張りますから）
そっと、ベルナは自分の胸に手をやる。
（も、もっと私の家にお金があれば……そうすれば、何度もアマトルさんの欠片に会いに来ら

れるのですが……あいにく、ここの入館料はとても高くて――）

お金よりも貴族としての責務を果たすことを重要とするシャルトリューズ家の教育を受けてきたベルナだが、この時ばかりは自分の貧乏ぶりをもどかしく思うのだった。

（……ふむ。今のところは大人しくしているな）

他方でバスティアンは、「王子」らしい柔和な微笑みを崩さぬまま、ベルナデットのことを考えていた。

（やはりあいつのあの様子――自分から好きで魔王をやっているのでもないし、どうやら意図的に他人を怖がらせているわけでもないというのは、確かなことのようだ）

今までのことを思い返しながら、バスティアンは考える。

（そうすると、あの四天王……今は三天王のようだが、あいつらさえなんとか抑えてしまえばほとんどの問題はなくなる、ということか？　そしてベルナデットの中の魔王の意識さえ、二度と目覚めなければ――）

しかし、と彼は気付く。

（あの事件の時……かつての魔王の意識は、一体どういうきっかけで目覚めたんだ？　アマト

ルの暴走がきっかけだというなら、もっと早くに覚醒していてもよかったはずだ）

傍から見ればすさまじい形相で、何やら物思いにふけっているらしいベルナの顔をちらりと見ながら、バスティアンは思った。

（覚醒のきっかけ……何か法則があるのなら、それを見つけることが肝要だ。そうすれば、もう奴を監視する必要もなくなる）

さて、どうやって調べればよいものか――

（この式典が終わり次第、探りを入れてみるか。とりあえず『光』で適当に襲いかかってみるとか……）

穏やかな表情の裏で、バスティアンが不穏な結論に達した――その時である。

「……ん？」

ぱらり……と、天井から細かい砂が落ちてきた。

「そしてフォルキデ王国の文化は、今日より永久の……んん？」

目の前にぱらぱら落ちる砂に気付き、文化相の演説は止まる。

「ふむ、なんですかなこの砂は？　この記念すべき日に、安普請でもあるまいに……」

口ひげを撫で、ぶつぶつ文句を言いつつ、彼は天井を見上げ――

「の、のわぁっ!?」

突如叫び、その場を飛び退いた！

不測の事態に、それまで一心に宝玉を見ていたベルナも、バスティアンも、並みいる貴族たちも、一斉にどよめく。

（なっ、何……!?）

ベルナが天井を見上げれば、そこには、大きな亀裂が走っていた。

石製の天井を割る亀裂はみるみるうちに大きくなり、その度に砂がぱらぱら落ちる。

「い、いかん！　どういうことだこれは！」

「ともかく、避難を……」

このままでは天井が崩れ落ちるかもしれないと、貴族たちは部屋から逃れようとする。

だが、しかし――

「うっ……!?」

どたり。ベルナの真横にいた初老の貴族が、糸が切れた操り人形のように、倒れる。

「えっ……」

驚く間もなく次々と、叫び声もなく貴族たちは倒れていく。

演説の原稿を握ったままの文化相も、床に伏し、気を失ってしまった。

その場に無事に立っているのは、ベルナと――

「こ、これは……!?」

立ち上がり息を呑む、バスティアンの二人だけ。

（一体、どうして――）

そう思い、ベルナは目を凝らし、はっと気付く。

よく見れば、床の上を低くたなびくように、白い霧が立ち込めている。

臭いもなく、なんの違和感も覚えないそれは、しかし、天井に亀裂が入るまでは当然その部屋にないものだった。

「まさか、この霧を吸って……!?」

『光』の加護により、あらゆる危害から身を守られるバスティアンはともかく、なぜベルナにこの霧が効かないのか、それはわからない。だが状況から、原因はこの霧しかない。

結論に至ったベルナが、それをバスティアンに伝えようと、口を開いた刹那。

「――なんだっ!?」

バスティアンが大きく後ろに跳んだ。

瞬間、ついに天井が崩れ落ち、そこからどやどやと何かが降りてきた。

そう、それは――

「……」

（ど、どなた……？）

顔を白い奇怪な仮面で覆った、男たちだった。

目の部分にのみ最低限の穴が開けられている、その仮面のつるりとした表面には、牙をむいた口のようにも思わせる幾何学的模様が彫られている。

上階から垂らしたロープを伝い降りてきた彼らは、ベルナとバスティアンに一瞥をくれると、無言のまま動きだした。歩みだす先には、宝玉――『ウェヌスの涙』がある。

「っ、待て、お前たち！」

腕を広げ、立ち塞がるのはバスティアンだ。

「何者だ！　皆に何をしたっ!?」

彼らは答えず、ただじりじりと近づいてくる。

「くっ……！」

その場から動かないまま、バスティアンはちらりと部屋の戸口を見る。

部屋の近辺にいる人間は全員気絶させられているらしく、どうやら助けは期待できない。

（ど、どうしましょう、私……）

バスティアンと男たちが対峙しているその横で、ベルナは気が動転していた。

倒れてしまった人々を助け起こそうとするが、いくら揺らしても彼らは目覚めない。

かといって、彼女の細腕では、バスティアンに加勢できそうもない。

「……宝玉が狙いか。お前たち――近頃噂のテロ集団か!?」
動揺を誘うかのように、バスティアンが口にする。
次の瞬間、男の一人が、抜き身の短剣を構えて突進した！
「あっ、危な……！」
反射的に叫ぶベルナ。しかし。
「……無駄だ！」
刃が届きそうになったその時、清らかな『光』がバスティアンを包み込み、剣を弾く。
（聖女様の光だわ！）
ベルナがほっとしたのも束の間。
「ッ……!?」
稲光のような音と共に、『光』はそのまま、男の手を灼いた！
「なっ……！」
バスティアンの目が、驚きで大きく見開かれる。
仮面の男は一瞬、忌々しげに首を振るが、すぐに体勢を立て直す。
「『光』が効くのか――？　お前たちは、まさかっ……！」
バスティアンは歯噛みしながらも、その手に『光』を集中させた。
だが、彼がそれを放つよりも早く。

「殿下、う、後ろ！」
ベルナが叫ぶ。
バスティアンが振り返れば、いつの間にやら背後に回っていたらしい別の仮面の男が、箱ごと『ウェヌスの涙』を取り上げていた。
「させるかっ！」
『光』を纏わせた手で、素早く手刀を繰り出すバスティアン。
宝玉を持った男は後退しそれを避けると、仲間に合図するかのように、くいと首を縦に振った。その直後。
「うわっ!?」
ロープの傍に控えていた男が床に何かを叩きつけ、部屋は煙幕に満たされる。
咄嗟のことに対応できず、バスティアンはから足を踏み――
「……くそっ……」
煙が晴れた時には、部屋から仮面の男たちの姿は消えていた。『ウェヌスの涙』と共に。
「あ……あ」
空っぽになった台座を見て、ベルナは愕然とした。
「アマトルさんの欠片――！」
奪われてしまった。あっという間に。目の前で。何もできずに――

（私……また、何もできなかった……）

徐々に白い霧が晴れていく中で、がくりと膝をつく。

そんな彼女に、それまで苦々しげな表情で天井の穴を睨んでいたバスティアンが、かつかつと近づいてきた。

「……ベルナデット」

「……！」

彼の目に怒りの色が燃えているのを見て取って、ベルナは小さく息を呑んだ。

「ベルナデット……お前っ……！」

バスティアンはしゃがみ込み、へたり込んだままのベルナの肩を摑み、揺さぶった。

「よくも……よくもやってくれたな!!」

「えっ――!?」

「とぼけるなッ！　さっきの男たち――お前の配下だろう！」

これまでにないほどのバスティアンの剣幕に、ベルナはたじろぐ。

「いいえ……ちっ、違います！　私は……」

「ではなぜ！　あの仮面の男に、私の『光』が効いたんだ!?　私の『光』は、魔物にしか効かない……そのことは、お前が一番よく知っているはずだ!!」

「あっ……」

（そうだわ……確かに！）

バスティアンの言う通り、彼の『光』は魔物のみを灼き、人間には一切危害を加えない。

ということは、あの仮面の男たちは――――

（魔物……!?　でも、どうして！）

魔王である自分と、四天王たち以外に、この人間界に魔物はいないはず。

事態を理解できず、ベルナは戸惑う。

だがしかし、そんな彼女の表情を黙秘と捉えたらしいバスティアンは、ますます激しい怒りを露わにした。

「そうかっ……そういえば、四天王のギンレーとかいう奴が来る、と言っていたな。ついに四天王が揃って、いよいよ人間界への侵攻を始めたのか！」

「違います！　私は何も……！」

「まだ言うかっ、魔王!!」

ベルナを突き飛ばすように手を離すと、バスティアンはその諸手に『光』を集中させた。

（裏切られた）

バスティアンの脳内を占めるのは、ただ、その一言だった。
（嘲笑っていたのか、私を――無力な、無害なふりをして、裏では……騙していたのか！）
執務室での彼の苦悩は、まるで無意味なものだったのか？
それをベルナに冷静に問いかけることができるほど、彼はまだ、大人ではなかった。

バスティアンの目の前で、ベルナの瞳はただ恐れに震えている。
腕を振り上げ、彼は『光』を『魔王』に放とうとして――
「……くっ！」
手を下ろす。顔に、今度は苦渋の色を滲ませて。
「くそっ！」
彼は吐き捨てた後、低く呟くように言う。
「一瞬でも、お前に気を許した私が――馬鹿だった」
「っ……！」
その言葉を聞いた瞬間、ベルナの胸はこれ以上ないほどに痛んだ。
氷でできたナイフで、心臓を貫かれたかのようだ。

背筋が凍り、腹の中に、何かどろどろした嫌なものが渦巻く。
「殿下……」
頭を振りながら、ベルナはやっとのことで声を絞り出した。
「殿下、わ、私……！」
「もういい」
そう口にしながら、バスティアンはベルナに背を向けた。
「もういい。何も言うな！」
「……」
黙りこくるベルナ。ややあってから、バスティアンは言った。
「……お前たち以外に、魔物などいない。だが――だが、お前には、私と兄上の命を救われた借りがある」
ちらりと、視線だけでバスティアンはこちらを向いた。
「――一週間だ。一週間だけ待ってやる。お前が、自分たちのことを無関係だと言うなら……自分たちで真犯人を探して、証明してみせろ」
「えっ！」
「できなければ、私がお前たちを討つ。この『光』の力で、お前たちを今度こそ、灰塵に帰してやる」

『聖女』の目には、決意を籠めた恐ろしい光がぎらりと宿っていた。
「いいな。わかったら、お前の配下たちにもそう伝えろ。そして、すぐにここから立ち去れ」
ベルナがおずおずと立ち上がると、バスティアンは再び叫んだ。
「立ち去れ！　どうせお前がいると妙な噂ばかり立って、この場の検証も進まない。もうすぐ皆の意識も回復する、官憲も来る。その前に、さっさとここから出て行け！」
突き放すような彼の言葉。
「……！」
ベルナは何も言えず、バスティアンの言う通りに部屋から駆け出した。
倒れていた貴族たちが起き上がる気配を感じたが、構っている心の余裕はなかった。
（私、私……！）
情けないと思いながらも、目からぽろぽろと涙が零れる。
（馬鹿だわ、私、泣いている場合なんかじゃないのに。私、何が――何が悲しいの？）
アマトルの欠片を奪われてしまったことが悲しい。
何もできなかったことは悔しい。
けれど、一番悲しいのは――
（殿下に……）
信じてもらえなかったこと、なのだろうか。

「うっ……」
そのまま博物館から駆け出し、彼女は声をあげた。
「うわあああああん！」
恥も外聞もなく、ベルナは、泣いた。

「ああ、はいはい陛下、泣かないでください！　もう、体液を無駄にしちゃ駄目ですよう」
「うっ……ぐすっ……すみません、ウシュクさん……」
なんとか邸宅に帰ってきてからのこと。
ウシュクが変わらぬぼんやりした笑顔でベルナを宥めるその隣で、ネメシロは、眉間に刻んだ皺を深くしていた。
ちなみにギンレーは、未だ邸宅に戻っていない。
「ちっ……面倒なことになった。聖女め、自らの失態を我らに押しつけおって」
「本当ですよう」
苦虫を噛み潰したような顔で言うネメシロに、ウシュクが同調する。
「なんなんですかぁ、まったく！　自分に都合の悪いことは全部わたくしたちのせいだなんて、千年前のニンゲンじゃあるまいに」

「同意する。……宿敵ながら、もう少しはやる奴かと思っていたのだがな」
そう語る彼は、どことなく、バスティアンに幻滅しているようにも見えた。
「どうします、ネメシロ殿？　いい機会ですし、疑われついでに、聖女めをぶち殺しに行きますか？」
「ええっ!?」
「急くな、ウシュク。そうしてやってもいいが、聖女の結界がある以上、我らの力では奴は倒せぬ。それに――『聖女は自らの手で討つ』というのが、此奴からの厳命であるしな」
（……！）
ネメシロの言葉に、ベルナは目を擦る手を止め、ぐっと唇を噛んだ。
「ところで、魔王」
エントランスに座り込むベルナを見下ろし、魔神は問う。
「その仮面の男……本当に、聖女の『光』で灼かれたのだな？」
「あっ、は、はい。少なくとも、殿下に襲いかかった方は、灼かれていました」
「ふむ――当然、ただの人間にあの『光』は効かぬ。ということはその男が魔物であるか、それとも……魔物と契約した人間なのか」
「あ……あのう、ネメシロさん」
涙を拭いてから、ベルナは尋ねた。

「その、四天王の方々以外の魔物が、結界を越えてきたということは、ないのでしょうか？もしかしたら、私や皆さんが知らない間に……」

「それはないと思いますよぅ」

答えたのはウシュクだ。

「わたくしどもほどの力を持った魔物は、千年前にはいませんでしたし、当然今もおりません。弱い魔物なら、あの結界に触れただけで灰になってしまいますしねぇ」

「――可能性は三つある」

ネメシロは述べる。

「一つ目は、魔王、貴様の言う通り、我ら以外の魔物が結界を越えてきたという可能性だ。どんなちんけな魔物が、どんな抜け道を使ったかは知らんが、可能性自体は存在している」

「は、はい」

「二つ目は、仮面の男が魔物ではなく単なる人間で、魔界とはまったく無関係の事件という可能性だ。その場合、なぜ『光』で灼かれたのかという疑問が残るが。そして三つ目は」

ネメシロはきっとベルナとウシュクを見据えて言う。

「我らのうちの誰かの仕業――という可能性だ」

「ええっ」

ベルナとウシュクは、思わず顔を見合わせた。

「そんな……どなたかが、独断で動かれた、と……!?」
「えぇーっ、わたくしじゃありませんよ！　わたくしだったらわざわざ、そんな元・アマトル殿の石など狙いませんもの。あっ、じゃあネメシロ殿がやったんですか？」
「違うわ、たわけ者。そのようなことをすればどれだけ面倒か、我がわからぬと思うか」
言ってから、ネメシロはふむと唸る。
「いや、そうだ。その連中、なぜ宝玉を強奪した？　確かにあの宝玉は、優れた魔術の媒介にはなるが、どのみち強力な魔力を行使できる者がいなければ、単なる石に過ぎん」
彼は腕を組んだ。
「――近頃、人間の貴族階級の連中を狙った、盗みや放火が増えているという情報ならあるが。金が目当てか……宝玉に思い入れのある者でもいるのか……？」
ネメシロの、その言葉に――
（あっ……！）
ベルナの脳裏に、ふとよぎるものがあった。
（ギンレーさん……？）
魔物。そして、宝石好き。
さらに、『勝手にやらせてもらう』、『用事がある』という彼の言葉。
事件の犯人として符合しそうなその要素に気付き、ベルナはうっすらと汗をかいた。

「ありゃ、陛下？　どうなさいました？」
「い、いえ……」
ウシュクに向かって頭を振るが、しかし、胸中に生まれた疑いは消えることがなかった。
（まさか、ギンレーさんが――!?）
口の中にせり上がる苦い味を、ベルナは、ぐっと嚥下するのだった。

第三章　仮面の策動

「陛下、お喜びください！　今日は大きな死肉を、二つも手に入れましたよ！」
「ほっ、本当ですか!?　うわあ、すごい……」
――式典から、五日後の朝。
食堂のテーブルについたベルナは、今日も今日とて近所の主婦からウシュクが貰ったハムを目の当たりにし、嬉しそうに（にたりと）微笑む。だがすぐにその表情は暗くなった。
「あれぇ陛下、どうなさったのです？　いつもなら今頃、高笑いなさっているはずなのに」
「は、はい……いえ、ありがとうございます、ウシュクさん。でも……」
「フン。魔王、さすがの貴様も事態の深刻さは理解できているようだな」
窓辺のネメシロが声をかけてくる。指に止まった小鳥を空に帰しつつも、彼は不機嫌だ。
「よもや、五日経ってもなんの情報も手に入らぬとはな……」
状況はベルナたちに不利だ。ネメシロの小鳥たちを使っても、情報が手に入らないのだ。
それまで街のどんな細かな会話も聞き分け、魔神の元へと運んでいた彼らでも、式典を襲っ

た謎の集団についての情報は、一切手に入れられなかった。
（あのネメシロさんにも、まったくわからないなんて）
ハムを切り分けながらも、ベルナは苦い表情だ。
「人間の捜査ではわからぬことであろうと、我が力を用いれば、容易に明かされるはずなのだが……くっ、忌々しい。この魔神ネメシロを愚弄しおって!!」
苛立った様子で、ネメシロは窓枠に腰かけたまま鉤爪で壁をガンと蹴った。
「どんな人間だ、どんな魔物だ!?　其奴さえいなければ、我らが聖女めに睨まれることもなかったものを。ええい憎らしい、いっそこの街ごと我の術で腐り落としてやろうか!!」
「ネっ、ネメシロさん落ち着いてください！」
「そうですようネメシロ殿。第一、今のネメシロ殿の力では、この街全部を一気に腐らせるのは無理なんじゃないですか？」
「わかっておるわ、その程度！」
魔神はウシュクに食ってかかり、それから問うた。
「……ウシュク、貴様はどうなのだ。何かわかったのか」
「はい、それがですね、さっぱりわかりません！」
ウシュクはなぜか胸を張り、きっぱりと言い放った。
「わたくしもガンバって、この身を街の下水道に潜ませて、ニンゲンの家を調べてみたりした

んですがね。怪しい家が、そもそも見つからないんですよ」
「くっ……そうか」
悔しげに歯ぎしりし、ネメシロは呟く。
「人間の世がどうなろうと、それは関知するところではない。だが、我らの身に危険が及ぶとなれば話は別だ。このまま聖女めに、我らを討つ機会を与えるわけには――」
「ネメシロさん……」
ベルナは俯く。
（私、一体どうすれば……）
この五日間、ベルナも、ただネメシロたちに任せていたというわけではない。
内職の合間に、できる限り出歩き、博物館の周りで聞き込み調査をしたりもしたのだ。
ほとんどの人はベルナの顔を見るなり逃げ出すので、成果ははかばかしくなかったが。
「ギンレーも……彼奴も、あの事件の朝以来、めったに姿を見せぬしな。何やら屋敷でごそごそやっては、すぐにいずこへか姿を消してしまう」
「あれ？　ギンレー殿の行方、わからないのですか？」
「彼奴め、我が気付かぬうちに飛び立つのが得意なようだ。本来のドラゴンの姿ではないとはいえ、奴の速さに鳥どもは追いつけぬからな。まったく、なんの『用事』というのだ」
魔物たちの会話に、ベルナはびくりと身を正した。

（ギンレーさんの『用事』とは……一体何をなさっているのかしら。屋敷で何かされているというのも、気になるし……）

ベルナは口元を手で覆った。

（……やはり……ギンレーさんが、あの事件を……!?）

彼が一連の事件の黒幕だとすれば、つじつまが合う。あまりにも合ってしまう。

だがベルナはそのことを、どうしてもネメシロとウシュクには伝えられずにいた。

（もし事件を起こしたのが、ギンレーさんだと決まったならば……話は別だけれど）

ベルナは努めて冷静に考える。

（けれど私は……ギンレーさんのことを……できるなら、信じたいわ）

それは魔王としての意識か、それとも彼に兄の面影を見たからか。

しかし、彼の潔白を証明する情報すら手に入らない今では、八方塞がりに変わりはない。

「このまま手をこまねいているわけにはいかぬが――」

珍しく、ネメシロが言葉を濁した。――と、その時。

「あはは、ネメシロ殿、何を困っておいでなのですか？　馬鹿だなぁ」

ウシュクがあっけらかんと言い放つ。

ベルナが驚く横で、ネメシロもまたぽかんと口を開け、次いで顔を真っ赤に染めた。

「なっ……きっ、貴様、誰が馬鹿だ、誰がッ！」

「えっ、ネメシロ殿のことですけど？」
「二度言うなっ、何食わぬ顔で!!」
ネメシロはふわりと宙を跳び、一瞬でウシュクの眼前に迫る。
「貴様、どういうつもりだ!?　今すぐその口を腐らせてやろうか……！」
「もうネメシロ殿ったら、馬鹿って言われ慣れてないからってそんなに驚かないでくださいよ。わたくしは、困る必要はないと申し上げたのですよう」
「何？」
自信ありげなウシュクの言葉に、ネメシロの怒りが収まる。
（ど、どういうことかしら……？）
ベルナが彼の顔をじっと見上げると、ウシュクは堂々とこう答えた。
「いいですか？　どんなに困難な状況になろうと、わたくしたちは心配などする必要はないのですよ。なぜなら」
彼はベルナに向かって手を差し出し、宣言した。
「わたくしたちには、魔王陛下がいらっしゃるのですから!!」
「……へ？」
魔物たちの視線が自分に集まり、ベルナは思わず間抜けな声を漏らした。
「あ、あの、それはどういう……」

「思い出してください。かつて魔王陛下は、聖女に討たれるまで、無敵の強さを誇っておいでした。そして今の陛下も、アマトル殿の事件の際には覚醒されましたよね」

ウシュクは目を閉じた。

「……その時から、わたくしは気持ちを新たにしたのです。ああ、やはり陛下はわたくしがお仕えすべき唯一のお方。陛下さえいらっしゃれば、万事はうまくいく、と――」

「ウシュクさん……」

魔王に全幅の信頼を寄せる、ウシュクの言葉。

（う、嬉しいような、恥ずかしいような、責任から逃げ出したいような……）

なんだかこそばゆくなって、ベルナは少し頬を赤らめる。

一方でウシュクはぱっと目を開けると、ネメシロに向かってさらに続けた。

「それに……陛下は聖女を自らの手で討つと！　そう仰っていましたよね？」

「そ、それは私の命令ではなくて……」

弁明するベルナを置いて、ウシュクは芝居がかった身ぶりで言った。

「つまり！　たとえあと二日のうちに不届き者を発見できず、聖女が我らに襲いかかってきたとしても！　それはそれ、陛下にお任せすれば大丈夫なのですよ！」

「ふむ。此奴にすべての責任を押し付けて、我らは知らぬ存ぜぬを貫くのもよいな」

「え、えええっ!?　そ、そんな！」

「安心しろ魔王。それは最後の手段に取っておいてやる」
「最後にはそうなさるかもしれないんですか!?」
涙目で抗議するベルナを見て、ウシュクはにへらと笑った。
「陛下が嬉し泣きを……！　やはりわたくし、間違っていなかったのですね！」
「していません、こればかりはぁ～……！」
「ねっ、ネメシロ殿。わたくしの申し上げたことは正しかったでしょう？」
「……ふむ。そうだな」
と、それまで冗談めかした態度だったネメシロが、何か思いついた表情でベルナを見る。
そんな彼の横で、ウシュクはえへんと胸を反らした。
「まったく、わたくしにもわかることがわからなかったなんて！　本当にネメシロ殿は馬鹿だなぁ。ばーか！」
「調子に乗るな」
ガツン！　とネメシロの拳が振り下ろされ、ウシュクは頭を抱えて無言になる。
「――さて、魔王」
「はっ、はい！」
射抜くような魔神の視線に、ベルナは姿勢を正して返事した。
「ウシュクの発言で……一つ思いついたことがある。貴様、これを持って街に出てみろ」

そう言って、ネメシロはすっとベルナに手を差し出した。

「え……？」

ベルナは覗き込む。彼の手の上に乗っているのは、紫色の小さな宝石。縦に細長い形のそれは、まるで何かが砕かれた破片のようで――――

「っ、これは、まさか……」

「そうだ。アマトルの欠片だ」

千年前に失われた巨大な欠片、『ウェヌスの涙』の方ではなく、先日覚醒した魔王が砕いた方の、アマトルの欠片。

「どうしてネメシロさんが、これを……？」

「以前も言っただろう、これは魔術において、優れた媒介になるとな。万が一、何かの役に立つ日が来るやもしれぬと思い、密かに回収していたものだが――これを貴様に預ける」

「わ、私に？」

「そうだ。元はと言えばアマトルは、千年前の貴様が創り出したもの」

ネメシロは冷静に言う。

「いかに今の貴様が腑抜けで無力であろうと、魔王には変わりない。つまり、貴様ならこの欠片を使って、もう片方の欠片――宝玉の在り処を探り当てることができるかもしれぬ」

彼はひょいと欠片を摘むと、その一端に細い糸を括りつけた。

「ほれ、持て」
言われるがままにベルナはその糸を摘み持つ。
ちょうど欠片は振り子のように、ぶらぶらと揺れる形になった。
「そのまま街をうろつけ。そして振り子が反応したと感じたら、その揺れる方に向かえ」
「そ、そうすれば、宝玉のある場所がわかるのですか……？」
「可能性は大いにある。これは『ダウジング』と呼ばれる、古式ゆかしき占術法ゆえな」
ふんと鼻を鳴らし、ネメシロは言った。
「まあ、宝玉がどこか遠方に運び込まれていたり、あるいは既に処分された後だった場合は、探り当てることも叶わぬかもしれぬが。何もしないというのよりはましだろう」
「そ、そうですね」
ベルナは戸惑いながらも、強く頷いた。
（今の私には魔術は使えないし、この振り子を使っても、何もわからないかもしれないけれど……何もしないうちから諦めるべきではないってことは、この前学んだことだもの）
「わかりました……私、やってみます！」
「うむ、せいぜい励め。我はウシュクと共に、もう少し遠方まで範囲を拡大して調査する」
未だうずくまったままのウシュクの首根を摑みながら、ネメシロは言った。
「何かわかるまで、この邸宅に帰って来るなよ」

「ええっ!?」

「その程度の労がなければ割に合わぬ。もし成果もなくのこのこ帰って来たなら――対価として、貴様の心臓を即座にいただくからな！」

言うなり、彼はウシュクをぶら下げたまま、姿を掻き消した。

彼の身体は無数のカラスに変化し、遠くへと飛び去っていく――

「あうう……そ、そんなぁ……」

振り子を持ったまま、ベルナはがくりと肩を落とす。

「と、とりあえず……お肉を食べてから出かけましょう……」

今朝のハムは、ちょっと塩辛かった。

「ううん……こ、これは反応している……のかしら……？」

一時間後。

とりあえず言われるがままに振り子を持って外に出たベルナは、当て所なく近所を歩いていた。今は大通りから横道に逸れた、細い住宅街の道を歩いている。

時々振り子が不自然に揺れるような気がするのだが、果たしてそれがネメシロの言う「反応」なのか、それとも単に風か何かで揺れているだけなのか、よくわからない。

（……魔王の意識のない私では、無駄なことなのかしら）

そんな気弱な考えも頭をもたげてくる。
（どうしましょう。もっと遠くに行ってみようかしら……）
動きやすい服装なので、遠くまで歩くのは問題ない。
問題は、いつまでも何も反応しなかったら、ということなのだが――
「……ううん。そうね、ではあちらに行ってみようかしら」
ベルナは道のさらに向こうに目を向けた。その方角には大きな河川、エニエ川がある。
エニエ川は、ここ首都・リテティア市の中央を分断するように流れている川で、この地区の河畔には、多くのワイン倉庫があることで知られていた。
（あまり私も足を運んだことはないけれど、倉庫なら、他の荷物に紛れてものを隠すのにも適している……かもしれないわ）
昔読んだ推理小説を思い出しながら、ベルナは考えた。
（そういったいかにも怪しい場所は、既にお役所の方々が調べておいでかもしれないけれど。一応、できる限りのことはやってみなければ）
方針を固め、彼女が歩みだした、その時。
「えっと、ええと川は……こっち……かなあ」
どこかで聞いたような声が、後ろから迫ってきた。
「どわぁっ！」

「きゃっ」
悲鳴と共に鈍い衝撃が背中に走り、ベルナは驚いて後ろを振り返った。
そこにひっくり返っていたのは――
「あ痛た……すっ、すみません、悪いのは全部僕なので殴らないで……ぴゃあぁっ!?」
「あ、あなたは……」
老人のような灰色の髪。目立つ黒縁の眼鏡。
ベルナを見るなり甲高い悲鳴をあげている、頼りない雰囲気の青年。
「ええと、ジャンさん……でしたね」
「はっ、はいぃそうです！　僕はジャンですすみませんっ！　どうか命だけは……って」
通りを行く人が立ち止まるほど怖がっていたジャンは、はっと息を呑む。
「あっ……！　あなたは、え、ええと、この前、僕を助けてくださった」
「はっ、はい。ベルナデットと申します」
「ベルナデットさん……あぁあっ、ももも申し訳ありません！　ぼぼ僕、またご無礼な真似をっ！　どどどーか、どーか平に、平にご容赦をッ！」
「ああ、そ、そんなに驚かないで……お、落ち着いてください！」
顔面を叩きつけんばかりの勢いでばたんばたんと土下座しまくるジャンを、なんとかベルナは押しとどめた。



「あのう、今日も……その、記事の取材でいらしたのですか？」
「ヒィッ!?　なぜわかるんです!?　せ、千里眼!?　ああっ、テ、テレパシーで僕の心を読んだのですか!?」
「い、いいえ違います！」
この方にも誤解されている……いつものことながらそう思いつつ、精一杯自分なりに明るい表情を作りながら、ベルナは答えた。
「あの、この前お会いした時も、そう仰っていたと思って」
「あ、ああそうでした……」
と、ジャンはふいに動きを止めた。
「そうだ……僕、自分で言ってましたね。すみません」
彼はどこか呆然とした顔でそう述べると、ゆっくり立ち上がり、自分のこめかみを叩く。
「たはは……自分の肝の小ささと無礼さに、自分でも呆れますよ……ほ、本当すみません」
「いえ、お気になさらないでください。クックック……」
「ぴゃああっ!?」
にっこりと微笑んだつもりだったのだが、やはり逆効果だったようだ。
「ご、ごめんなさい。私、その、笑うのが苦手で……」
ベルナは居たたまれなくなり、視線をさまよわせ——

「あら？」
ジャンの手元に、何やら紙きれがあるのを発見した。
「あの、それは……ええと、この前の地図をお持ち、なのですか？」
「びくうっ！」
彼は自分の口で言うのと同じくらい身をびくつかせた。
「はう、あのっ、その、そ、そうです……」
言いながら彼は地図を後ろ手に隠した。
（もしかして……）
ベルナは思案してから、再び問う。
「あの、迷っておいでだったのですか？」
「はううっ！　ははは、はい、そ、そうですっ！　そうなんです、迷ってました！」
彼女の軽い疑問の表情を怒りと勘違いしたか、彼は涙で目をいっぱいにし、がくがく震える。
「じじ実は、この前お会いした時からずーっと迷っちゃってるんですっ！　僕方向音痴で……お陰で仕事は終わらないし、お腹は減るし、靴底は減るし……でも帰れないしっ……」
「そ……それは大変でしたね……」
ジャンの言が本当なら、彼は相当前からずっと街をうろついていることになる。
ベルナは心から彼を労わりつつ言った。

「それで、どちらに向かわれているのですか？　もしかしたら、私でも道がわか……」
「うわあああ！」
「……えっ？」
唐突にジャンは叫んだ。
声をかける暇もなく、彼はばっと頭を抱えた後、素早く地面に跪き、こちらを見上げる。
「ベベベベベ、ベルナデットさぁん！」
彼は祈るように両手を組む。
「はっ、はい!?」
「ごめんなさい！　堪忍してください！　僕っ、僕、黙っていないといけなかったんです！　上司の命令だったんです、誰にも喋るなって！　だ、だからベルナデットさんに言わなかっただけで、悪気はなかったんですう！」
「な、なんの話ですか？」
「とぼけないでくださいようぅ！　倉庫のアジトのことですう!!」
今や彼は目から滂沱たる涙を流し、自棄になったかのように口走っている。
「ささ最近この辺りを荒らしている盗賊団のアジトがっ！　エニエ川のワイン倉庫街の一角にあるかもしれないって話ですよう！」
（盗賊団……？）

早口な彼の言葉を、なんとかベルナは聞き取る。
「それをご存じで、裏を取るため僕を詰問……あいや！　質問なさってるのでしょお!?」
「ち、違いま……」
「もうこうなったら、全部喋ります！　喋りますからぁっ！　だから質問するのをやめてくださいよぉ！　怖すぎるからぁあああっ!!」
「わっ、わかりました！　もう質問しません！」
宣誓するようにベルナが手を挙げて言えば、ジャンはぐすんと鼻を鳴らし、目を擦った。
「この辺りを荒らしている盗賊団は、奇妙な仮面を被っている……と、いう噂があるんですけれど……ぐすっ……連中が、倉庫街の隅にある、一際古びた小屋に集まってるとかいないとか……ひっく……それで下っ端の僕が、とりあえずその近くを調べることになって」
「な、なるほど」
（ネメシロさんたちでも摑めなかった情報を手に入れるなんて。やはり、新聞社とはすごいところなのね）
ベルナは素直に感心した。
「ああ……全部喋ってしまった……」
かたや、ジャンはがっくりと頭を抱えている。
お前が勝手に喋ったんだろうが、と言いたくなるところだが、ベルナはそうは思わない。

彼女はゆっくりと、これまでの話を脳内で整理した。
（つまり……エニエ川の倉庫街の小屋が怪しいと。仮面を被った方々が……）
そうまで考え、はたと気付く。
（仮面……！　そうだわ！　あの時宝玉を盗んだ方々だって、仮面を被っていた……もしかしたらその盗賊団は、あの方々と、何か関係があるかもしれないわ！）
これは、その小屋を調べてみるしかない――と、彼女は決意した。
（ギンレーさんと関係があるのかないのかも……そこできっと明らかになるはず）
ベルナはぐっと口元を引き締め、胸の前で拳を握った。
「あの、ジャンさん」
「はっ、はいいっ！」
「貴重なお話をたくさんお教えくださり、ありがとうございました。私も、その……倉庫街に、行ってみようと思います」
「ええっ!?」
驚くジャンに、彼女はこう付け足した。
「いえ、行かないといけないのです。ど……どうしても自分の手で探さなければならない、どなたかに盗まれてしまった大切なものが、あるので」
そう言うベルナの顔は、知らず知らず、険しくもどこか凛々しさを感じさせるものだった。

「大切な、もの……？」
きょとんとした顔で、ジャンは問い返す。
「そっ、それはもしかして、呪術に使う水晶玉的な何か、みたいな……？」
「え？」
「いいいいいえっ！　なんでもありませんっ！　あのっ、ベルナデットさん」
彼はおずおずと面を上げ、言った。
「よよよ、よろしければ僕も、その、ついて行っても、いいですか……？」
小さな鞄を落ち着かない様子で擦りながら、ジャンは続ける。
「僕、きっと一人のままだと、絶対に倉庫街に辿り着けないと、思って……それでその、ベルナデットさんの後を追わせてもらえれば……と。ああっ、も、もちろんお手は煩わせません！　僕のことはっ、どうか街路樹か地べたの虫みたいに思ってくださいっ!!」
「そ、そんな。あの……」
ベルナはしばし思案してから、返答する。
「はい、もちろんです！　ご一緒しましょう」
「でっ、ですよねごめんなさ……ええっ!?　い、いいんですか!?」
断られると思っていたらしいジャンの顔が、ぱあっと明るくなる。
彼の視線は、その時初めて、ベルナとまっすぐ合わさった。

（あっ……）

はたと、ベルナは彼の瞳の色に気付く。

（この方の目、青いのね）

黒縁眼鏡の奥に潜んでいる、どこまでも澄んだ、ターコイズブルー。

（……バスティアン殿下の瞳の色と、そっくりだわ）

そのことがなぜか、この時のベルナにとっては、とても不思議なことのように思えた。

「はうう……あ、ありがとう……ありがとうございます！　これで調査ができる……家に帰って寝ることができるというものですぅ！」

「いえ、私もお役に立てるなら幸いですわ、ククク……」

「ぴゃぁあああまた笑ったぁあああ！」

彼はそう叫び、大きく身をのけ反らせ、そのまま数秒停止し、元に戻る。

「ああ……すみません。また取り乱してしまった……」

ジャンはがくりと肩を落とし、そのままぽつぽつと口にした。

「はあ……羨ましい。あなたは勇気のある方ですね。盗まれたものを、自分で取り返しに行かれるだけの勇気がある。僕は駄目です。駄目なんです、いつまで経っても――」

「……ジャンさん？」

「あああっ、ももも申し訳ありません！　要らないですよね！　僕の自分語りとか要らないで

すよねっ！　ささ、どうぞ、どぉーぞお先に行ってください！」

「いえ、あの……わ、わかりました。それでは……」

丁重にお辞儀しながら手を前に差し伸べるジャンに申し訳なく思いつつ、ベルナはぺこりと彼に返礼し、倉庫街へと向かう。

（倉庫街を調べれば、手がかりがあるかもしれない。――アマトルさん、どうか待っていてください！）

そう思うと、なぜか、振り子の先のアマトルの欠片が輝いたように見えた。

（えっ……!?）

ベルナは驚き、アマトルの欠片を直接手に乗せた。

だが、それに目を凝らすのよりも早く――

「あ痛っ！」

どたりという音と悲鳴が聞こえた。振り返れば、ジャンが何もないところで転んでいる。

「あううう……自分の足に躓いた……」

眼鏡をずらしたままで言う彼の姿は、わざとらしいまでに情けないものだった。

「……この道を行けば、後はすぐに倉庫街があるはずです」

渡された地図の一か所、印のつけられている場所を指しながら、ベルナは言う。

あれから、しばらく歩いた後。彼女らは、住宅街を抜け、河畔に近づいていた。
もうすぐ件のアジトと目される場所ということもあり、ベルナの表情も、自然と強張る。
そしてジャンはと言えば――――
「そ、そうだったんですね……いやぁ、僕、どうして気付かなかったのかなぁ……」
彼女から数歩遅れる形で、とぼとぼと歩いている。
「僕時々、右と左がわからなくなることがあるんですよ。どっちの手がフォーク？　とかそういうのもあるんですけど、気がついたらぐるぐる同じところを回っていたり、一本道を歩いていたはずなのに、全然別のところにいたり……いつの間にか、川に落ちてたり……」
方向音痴も極めるとこうなってしまうらしい。
「そ、それは大変ですね」
「あっ、いえ……僕の場合はもう、そういう運命の下に生まれちゃったのかなぁ、って諦めることにしてるんですよ、なんて……あはは」
ジャンは力なく笑った。
「運命――」
（……私の運命は、どんなものなのかしら）
そう考え、ベルナは不意に、バスティアンのことを思い出した。
（魔王として生まれ……それで、聖女である殿下とは、やはり、敵対する運命なのかしら）

彼女の心中に、あの時、博物館でバスティアンに言い放たれた言葉が蘇る。
――一瞬でもお前に気を許した、私が馬鹿だった――
「……っ！」
ベルナは胸を押さえた。
「あれっ!?　べ、ベルナデットさん!?　どうされました？」
「い、いえ……」
（どうしてかしら。あのことを思い出すと、胸が、すごく、痛い……）
胸を押さえたまま、突然歩みを止めたベルナに、さすがのジャンも駆け寄ってくる。
（これも『殺意』なのかしら……でも、いつものとは違うわ。いつものはもっと……もっと、どこか、嬉しくなるような気持ちだもの）
誤解されることは、いつだって悲しい。
でも、それは生まれてからずっとのことだし、ある意味慣れっこだ。
それなのに、バスティアンに疑われ続けていることは、何日も経った今でも、鮮烈な痛みを伴って彼女の胸を抉る。ベルナは、そんな鋭い痛みに、ただ戸惑うしかなかった。
一方そんな彼女の様子を誤解したらしく、ジャンは必死に声をかけてくる。
「ごごごめんなさい！　痛かったですか？　僕の発言が痛かったですか!?」
「え？　いえ、違いま……」

「そそそうですよね！　僕も自分で言ってて痛かったですもん！　運命とか、お前が言うなって話ですよね～あははは～って、あれ」

困り顔（傍から見れば睨み顔）で自分を見るベルナに気付き、彼は口を閉ざした。

「あ……ごめんなさい。もう黙ります。殺さないでください」

「えっ!?　あ、お、お気になさらず……」

（うう……とりあえずのところ、誤解されるというのが私の運命なのかもしれないわ……）

そんなことを思いながら、気を取り直して彼女は歩みだし――

（あら……？）

その時彼女は、手の中に握ったままになっていたアマトルの欠片が、少し熱くなったような気がしたのだった。

「あっ……あ、あ、あの建物ですよ、ベルナデットさん」

倉庫街の片隅に、大きな木箱が乱雑に積み上げられた一角がある。

その木箱の陰から頭だけ出して、ベルナとジャンは、古びた倉庫を見ていた。

「あ、あそこをですね、おっ、おかしな男たちが出入りしているという話……です」

「そっ、そうなのですか」

小声で話すジャンに、ベルナは絞り出すような声で答える。

今さら緊張で高ぶってきた胸を押さえながら、彼女は考えた。
（小さな建物だわ。それに、とてもぼろぼろね……わ、私のお家ほどではないけれど）
遠目からでも、窓ガラスの一部が割れ、屋根が風雨で劣化しているのがわかるほどだ。
（おかしいわ。こんなにいかにも怪しい場所なのに、どうしてネメシロさんたちも……いえ、どなたも今まで探していないのかしら……）
ベルナは内心首を傾げる。――と、その時だ。
「あっ……！　ひ、人が来ましたっ。かかか隠れないと！」
「はい！」
ジャンの言葉通り、向こうからばらばらと男たちが数名現れ、建物の中に入っていく。
いかにも港の作業者といったふうの外見だが、どことなく堅気の人間ではないような雰囲気はベルナにも感じ取れた。それだけでなく――
（……やはり、そうだわ）
木箱の陰に身を潜めつつ、ベルナはそっと手の中の欠片を見た。
（ここに来てからずっと……あの方たちがやって来てから特に、欠片が熱くなっている気がする。ネメシロさんの仰っていた反応とは、これのことかしら）
そうすると、ますますあの男たちは怪しい。
「ううん……ここからだと、あまりよく見えませんねえ……」

「ジャンさん……あのっ、もっ、もっと近くに寄ってみませんか」
「ええっ!?」
「い、いえ……提案、なのですけれど」
彼女はそっと、建物の窓の下の、茂みを指さした。
「あの茂みに隠れれば、あまり目立たずに、中を覗き見られるのではないでしょうか……」
「お、おおうっ！　なるほど……」
本気で感心している様子で、ジャンはうんうんと首肯した。
「す、すごいです。僕なんか、あ、足が竦んじゃって！　全然思いつきませんでした」
「い、いえ。それほどのことは……ま、前にも似たようなことを、やったので」
去年の暮れ、王宮の舞踏会に勝手に侵入した時のことを思い出し、ベルナは赤面した。

そろりそろりと、ベルナたちは木箱の陰から建物の窓の下に近づく。
怯えながらも確かな足取りのベルナに比べて、ジャンはあたかも千鳥足だ。
そして、建物まであと十数歩といったところで――
「……！」
ベルナは気付いた。足元ほどの高さに、白い霧がたなびいている。
（この建物の周りだけ……？）

先ほど木箱から見た時には、一切気付かなかったのに。
（もしかして、博物館での事件の時に現れていたのと、同じ霧かしら……？　でも、ジャンさんはご無事のようだし……）
とにかく、中を見てみなければ何もわからない。
ベルナは心臓の鼓動を一生懸命に抑えつつ、ようやく窓の下に辿り着いた。
そっと中を見てみれば――
（……はっ！　あれは！）
建物の中――がらんと広く、ところどころにクモの巣が張った、いかにも整備などされていないその空間の床の上で、男たちが車座になっている。
ベルナがまず驚いたのは、その中の一人の傍らに、仮面が落ちていたことだ。
白く、のっぺりとしていて、奇怪な模様が刻まれた、あの仮面だ。
（間違いないわ！　この方々、博物館を襲ったのと同じ……！）
喉を鳴らし、そして次にベルナが気付いたのは。
（あっ！　あそこ……！）
男たちの輪の中央に、半分布に包まれて置かれているのは、紛れもなく『ウェヌスの涙』。
アマトルの欠片だ。
（あんなところに、アマトルさんが――！）

本来なら今頃博物館に展示されていたはずのそれは、今はぞんざいに床に転がっている。
（なんてこと……）
ベルナの胸の中に、ちらりと怒りの炎が燃えた。
――割れた窓から、男たちの会話が漏れ聞こえてくる。
「……はどうだ？」
「馬鹿、そんなんじゃすぐ……」
「切り分けるにしても、どうやって……」
「……に逃げる手配を……」
（切り分ける、ですって？）
「あわわわ」
ベルナが首を傾げる横で、震える手でメモを取りながら、ジャンは呟いた。
「たたた多分、あの人たち、宝玉を切り分けてしまうつもりみたいですよ」
「えっ」
囁くような声の低さで、二人は会話する。
「宝玉を切り分けて、ど、どうするのですか？」
「う、う、売り飛ばして、それでお金を稼ぐんですよっ！　宝玉そのものを売りさばくより足がつかないですから……そ、それで得たお金で、遠くに逃げるつもりなんでしょう」

「……！」

売りさばく、という言葉に、ベルナはまたあのドラゴンの姿を思い出した。

（ギンレーさんは……宝石を売ってお金にしたと、よく仰っていたけれど……）

まさか……と、胸の中に膨らむ疑念。しかし、ベルナは頭を振った。

（まだだわ。まだ決まったわけじゃない。そ、それに、この後どうするのか考えなければ）

そうこうするうちに男たちは話を終えたらしく、宝玉を持ち、おもむろに立ち上がる。

そして、奥の壁にぽつんとある、入り口とは違うもう一つのドアに向かって歩いていった。

「と、隣の部屋に入るつもりでしょうか……」

むむむと唸りながら、ジャンは中をじっと睨んだ。

「ううう……でも、と、とりあえずこれで……ここが盗賊団のアジトであることも、盗品の在り処も、はっきりしましたね」

「そうですね……」

頷きつつも、ベルナはどこか不安だった。

（確かにここに宝玉があるのははっきりしたわ。後は役所の方々にお教えするなり、ネメシロさんたちにお話しするなり、いくらでも方法はあるはず。でも……）

それだけでは、自分たちの、さらにはギンレーの潔白を、バスティアンに証明することはできないかもしれない。

苦悩する彼女の横で、しかし対照的にジャンは、晴れ晴れとした気持ちのようだ。
「ああ、これで仕事が終わりましたよ～！　ベルナデットさん、ありがとうございました！　さあ、では帰りましょう！」
ふんふんと鼻歌まで交えて、珍しく軽い足取りで、彼は一足先に茂みから歩みだす。
（そうね。今はとにかく、ここから離れましょう――）
ベルナがそう思った、その時だ。
（……えっ!?）
彼女は目を疑った。
なんと、いつの間にか男が一人、倉庫の戸口に向かって来ているではないか！
進行方向には、ちょうどジャンがいる。
「あっ……！」
声をあげ、ジャンに知らせようとしたベルナ。だが、時は既に遅かった。
「なっ、なんだてめぇ!?」
「ひっ、ヒイィイイ!!」
ジャンの情けない悲鳴が木霊し、ベルナは手で顔を覆う。
彼はあっという間に倉庫の中に引きずり込まれてしまった。
「おいっ、お前ら！　ネズミが入り込んでるぞ！」

「てめえ、どうやってここまで……どこの回しモンだ！」
「とりあえず奥に連れてけ!!」
苛立った様子の男が一人、ジャンの腹を思い切り蹴り上げた。
「げほっ！」
ジャンの口から漏れた鈍い呻き声が、ベルナの耳に確かに届いた。
（うぅっ……！）
いても立ってもいられず、けれど飛び出していったところで、どうしようもない。
「いいいい嫌だぁああ助けてぇえ神様ぁあああああ！」
ばたん。彼の叫びを残して、無情にも倉庫は再び静かになった。
「……ああ……！」
ベルナは震える手を自分で押さえながら、窓の中を見て声を漏らした。
「ど、どうしましょう……」
手の中のアマトルの欠片を、ぎゅっと握りしめる。
「こっ、このままでは、ジャンさんが」
殺されてしまう！　ベルナは恐怖でぐらぐらする頭を必死に落ち着かせ、考えた。
（ああ……そうだわ。まずは人を呼ばなくては。私一人ではどうしようもないけれど、どなたかに来ていただければ――！）

そう結論はつくのだが、足が動かない。
（っ、こんな時に……怖がっている場合ではないわ！　私がしっかりしなければ……）
ベルナは悔しさと情けなさに歯噛みした。
（ああ――）
彼女はぎゅっと目を閉じた。
（こういう時にこそ、私の中の魔王の力を使えればいいのに――！）
ベルナは、痛みを感じるほどに強く、手の中の欠片を握りしめ――
「……え？」
その時気付く。彼女の周りに立ち込める霧が、先ほどよりずっと濃くなっていることに。
「こ、これは……？」
ベルナ自身には、なんの影響もない。
けれどもその霧はまるで倉庫全体を包み込むかのようにぐるぐると渦を巻き始め、先ほどまで見えていた川岸に立ち並ぶ他の倉庫の群れは、もはや視界から掻き消えていた。
どこか遠くから獣の遠吠えのような声まで聞こえ始め、あたかもこの周辺だけ周囲から切り離されたかのように、彼女は感じた。
（なっ、何かしらこれは……怖い！）
ベルナは大きな瞳に涙を滲ませ、きょろきょろと辺りを見回す。すると――

「あっ……!?」

彼女は窓の向こうを見て、凍りつく。

もはや倉庫の中にまで立ち込めている霧の中に、先ほどの男たちとは違う、あの白い仮面を被った人々が、何人も立っていたのである。彼らはベルナには気付いていないようだ。

（いつの間に、中に……？）

ベルナが戸惑う間もなく、白仮面たちは引き絞られた矢のような勢いで奥の部屋に殺到すると、中に飛び込んでいった。

しばらく奥から、何かがぶつかり合う鈍い音が聞こえる。

ややあって、白仮面たちはぞろぞろと奥から戻って来た。

先ほどジャンを連れて行った男たちを、荷物か何かのように抱えながら……。

男たちは皆あちこちに痣を作り、ぐったりとしている。完全に無力化されている。

「ど、どういうこと……？」

ベルナはつい口に出して呟いてしまう。

「あの方たちが、白仮面の人々なのでは……『ウェヌスの涙』を盗んだ犯人ではないの？」

「――いや、その通りだ」

「はっ……！」

遙か上方――屋根の上から聞こえた見知らぬ男の低い声に、ベルナの心臓は口から飛び出し

そうになる。
慌てて上空を見上げるが、しかし、彼女の立っているところからは、声の主が見えない。
よろめき転びそうになりながらもなんとか後ずさった、ベルナの視界に映ったのは――
「やあ。こんにちは、お嬢さん」
真紅の仮面を被った、一人の男だった。
白仮面と同じ材質、同じ模様を持つ仮面の下に全身を覆う漆黒のマントを纏ったその姿は、ともすると舞台役者のようでもある。
だがこの白い霧の中では、その格好は目立つと共にひどく不気味で、恐怖を煽った。
「あっ、あなたは――」
ベルナはぱりぱりに乾いていた唇を濡らしてから、口を開いた。
「あなたは……どっ、どなたなのですか？　あの白仮面の方々とは、どんな――」
「ふふっ。震えておいでかな？」
問いには答えず、赤仮面は首を傾げる。
次いで彼は予備動作もなく屋根から飛び降りると、危なげなく地面に降り立った。
そして、ベルナに向かってはっきりと言い放つ。
「――魔王ともあろう方が、ずいぶんと小心なものだ」
「なっ……」

言われた瞬間、ベルナは全身が粟立つような感覚に襲われた。
「ど、どうして、私が魔王だと……？」
「ふふふ……あなたを有名ではないと考えているのは、あなただけだ、魔王」
言いつつ、赤仮面はじりじりとこちらに近づいてくる。
「あなたこそ、魔を統べる真の王。そして我らが敬愛する、伝説の体現者」
「……？」
戸惑うベルナを置いて、赤仮面はマントの下に隠していた腕を、大きく広げる。
「ああ！　……あなたに名乗るのが遅れていた。我らの名は『白竜の顎門』。我らは群れをなし、そしてこの国を再革命する者！」
非常に芝居がかった抑揚で、赤仮面は宣言した。
（『白竜の顎門』？　それが、仮面の方々の組織の……名前？）
彼の雰囲気に半ば呑まれかけながらも、そう考えたベルナはなんとか問いかける。
「あっ、あの！　さ、再革命とは……？」
「無論！　この国の正統なる王位を簒奪し、流された血を啜り生きている悪鬼――アンリ９世をはじめとする王族に。そしてそれを支持する民草に、正しき裁きを下すことだ」
目的を語る仮面は、それまでと異なり、どこか底冷えのする声音だった。
「だ……！」

その言葉を聞き、ベルナはいてもたってもいられずに叫ぶ。
「駄目です！　そんなことをすれば、せっかく平和になったこの国が、混乱して――！」
常人なら途端に逃げ出すか、少なくともたじろぎそうなほど強張った表情で言うベルナ。
傍から見れば今の彼女は、地獄の門で吼えたてる冥界の番犬のようだろう。
だが赤仮面はそんな彼女の表情を見ても、まったく動じない。
それどころか、仮面の奥から笑い声が聞こえた。
「ふふっ。平和？　平和など、血塗られた刃を握った勝者が、自らを正しい者とするため放言した空事にすぎないのだよ」
しかし、と彼は続ける。
「そうか魔王よ、あなたは……あなたの肉の父は、そう、シャルトリューズ伯爵。革命の折に現王族を支持した貴族の一人だったな」
「っ……！」
身構えるベルナに、しかし、赤仮面は諭すように言う。
「だが、我らはあなたの父には裁きを下さない。そして、あなたにもだ。あなたの父は既にこの世におらず、あなたは革命の折には幼すぎた。我らが裁きを下すは、今ものうのうと利権と惰眠を貪る亡者ども。そのために」
彼はマントの中から、薄い布で包まれた、大きく丸い何かを取り出した。

「そのために我らは、この宝玉を手にしたのだから」
「そっ、それは……『ウェヌスの涙』……!?」
「そう、麗しき女神の名に相応しい、美しき石だ」
うっとりと撫でるように、赤仮面は布を剝ぐ。果たして現れたのは、紫色に光る宝玉。
ベルナの手の中の欠片が、ちりちりとひりつくほどに熱くなる。
「この石を魔術の媒介として、我らは再革命を果たす。そのためにこそ我らは危険を冒し、この宝玉を手に入れたのだ――」
そこで赤仮面はゆっくりと頭を振る。
「それなのに、かの男たちは崇高なる使命を忘れ、私利私欲に走った。彼らは我らの目を逃れようと力を悪用し、逃亡を図った。じきに裁きを受け、己の愚を知るだろう」
「そ、それでは！　あなた方と先ほど倉庫にいた方々は、やはり同じ組織の――」
「かつて同じ組織の一員だった、と申し上げた方がより的確だろう。いずれにせよ、我らは計画の遂行のために邁進するまで」
赤仮面は再びマントの中に宝玉を隠し、ベルナに向き直る。
「魔王よ！　……古き時代の魔王よ。我らはあなたに、我らの次なる目的をお教えしよう。ああ、なんとなればそれは我らがあなたを敬慕するからであり、いずれ我らの復讐に加わっていただくあなたに、選択の時間を献上せんがためだ」

「えっ……」

ベルナは――赤仮面の言葉の多くに愕然としながらも――問い返した。

「つ、次の目的……なっ、なんなのです、それは……？」

「我らは明日の夜、ロートシルト侯爵家を襲撃する」

きっぱりと、仮面は言う。

「かの侯爵家は、前王家を裏切り、現王家にすり寄ることで権勢を永らえた、いわば我らの敵の首魁の一人。明日はその令嬢、カロリーヌの誕生の日だという」

（カ……カロリーヌさんの……!?）

ベルナの脳裏に、見知った影が浮かぶ。

陽光を紡いだような豪華な金髪と、険のある美貌を合わせ持ち、出自に似合った、やや横柄な――ベルナに言わせると誇り高い性格の令嬢。

「聞けばロートシルト侯爵家では、カロリーヌと第二王子バスティアンとを娶せようと画策しているとか。我らは次代の希望を、その誕生の日を命日とすることで閉ざすものだ」

「なっ……！」

ベルナは心臓が止まるかと思った。

赤仮面の口から語られたのは、暗殺予告。このままでは、カロリーヌが殺されてしまう！

「我らは魔の力を借り、魔の名において人界の悪鬼を討つ。我らこそ『白竜の顎門』、我らこ

そ裁きの天雷！　――魔王よ、我らを止めるも、止めぬも、あなたの決めることだ。どうあろうと、いずれ我らは伝説を再現するのだから」

「あっ、あなたは――」

怯まず、ベルナは食い下がる。

「あなたは、一体誰からその力を得たのですか!?　あなたが人間ならば、あなたは魔界のどなたかと契約を結んでいるはず――それとも、あなた自身が魔物の方なのですか!?」

「……ふふ」

と、それまで饒舌だった仮面は、ふいに口を閉ざす。

「魔王よ、先ほどの発言を訂正させていただこう。あなたは小心かもしれない、だが愚かではない。それどころか、とても怜悧なお方だ」

「っ、あのっ、し、質問に答えていただけるとありがたいのですが――」

はぐらかすような誉め言葉に当惑しながらもベルナは言う。

なぜなら彼女の中には、渦巻く疑問があるからだ。

（『白竜の顎門』……ギンレーさんも、ドラゴン……！）

「もしや、あっ、あなたは……ギっ、ギンレーさんと、関係が……！」

最も忌むべき想像をしながら、ベルナはゆっくり言葉を紡ぎ出し――

「おや。惜しいものだが、もう別れの時間のようだ」

赤仮面はそう言うと、ぱちんと指を鳴らした。瞬間、ふわりと彼の身体が宙に浮く。
「魔王よ――いずれまた会おう。その時には、あなたの意志と力とが、我らと合一していることを望みたい」
「まっ……待ってください！　まだお尋ねしたいことが――！」
「っ、はっはっはっは！」
赤仮面の高笑いだけが木霊し、それと同時に、白い霧が徐々に消えていく。
「はははははは――――」
笑い声だけを残して――赤仮面は、溶け込むように姿を消した。

「っ……！」
霧が完全に晴れてからも、ベルナはただ呆然とそこに立ち尽くしているだけだった。
（また宝玉を奪われてしまった――それに、恐ろしい計画を聞いてしまったわ……）
事態のめまぐるしい展開に、ベルナの頭はパンク寸前だ。
（結局ギンレーさんが関わっているのかどうかも、わからないままだし……私……！）
どうすればいいのかわからない。
（このままではいけないのはわかるけれど、でも）
世界で自分がたった一人になってしまったような気がして、ベルナはにわかに背筋が凍るよ

うな寒気を覚え、しゃがみ込む。
「く……！」
ベルナの目に、再び涙がじわりと滲み――
（！）
それを拭おうとして、彼女は、自分の手の中のアマトルの欠片に気付く。
（アマトルさん……）
咄嗟に彼女は思い出した。
かつてアマトルが、一心に自分を慕い、励ましてくれたこと。
そして自分の不甲斐なさが、彼を狂わせてしまったこと――
（……そうだわ）
ぐいっと涙を拭い、彼女はすっくと立ち上がった。
（泣いている暇などないわ。私には、やらなければならないことがあるもの……）
二度と、魔界の力で人々を傷つけることがないようにしたい、ということ――
聖女と魔王の戦いに、平和的な終止符を打ちたいということ。
それこそがベルナの、いや、現・魔王としての願いではなかったのか。
（アマトルさん、見ていてください）
欠片を握りしめ、きっと空を見上げた彼女の眼には、もはや涙はなかった。

晴れ渡った青空は、どこまでも澄んでいた。
「私、やります。なぜなら、私が……私が、魔王なんですから！」
想いを言葉にすると、不思議と今までにない勇気が湧いてくるように、ベルナは思った。
（さ、最初にすべきことは……）
彼女はしばらく思案し――――
「はっ……そうだわ、まずはジャンさんを助けなければ！」
ベルナはジャンの存在を思い出し、慌てて倉庫へ駆け戻った。

そして結局のところ――――
ジャンは大きな怪我もなく、無事だった。
倉庫の奥の部屋の床に、ぞんざいに転がされ、気絶していたが……。

その日の夜、王宮にて。
「――結局この五日間、何も進展なし、か」
執務室に残り、一人で報告書を眺めていたバスティアンは、ふと呟く。

椅子に腰かけた彼は、手にしていた書類をぱさりと机の上に放ると、ため息をついた。
（官憲だけでなく、軍部まで動員しての捜査でも、一向に進展が見られないとは……いや）
カップに新しいコーヒーを注ぎながら、彼は表情を歪めた。
（当然だ。あの事件は確実に魔界がらみだ。人間の力では、どうすることもできない）
そして――――と、彼はベルナデットの姿を思い出す。
（ベルナデット……いや、魔王。何も言ってこないということは、やはり、お前の仕業か？）
バスティアンはカップを手に取る。その手に僅かな震えを自覚し、彼はくっと唇を噛む。
（神よ――私は、一体どうすれば）
カップの内側で揺れる褐色を見据えながら、彼が神への祈りを捧げ始めた――その時。
「……ん？」
コーヒーに、ぽこぽこと泡が立ち始めた。
「これは……」
戸惑い、彼ははっと息を呑んだ。
「まさか！」
咄嗟にバスティアンはカップを机の上に戻す。
その瞬間。
下水に水を流したような音と共にコーヒーが噴き出し、中から何かを吐き出した！

ごちゃっ。吐き出された人物は、勢いよく床に転がされる。
バスティアンは眉をぴくぴくさせながら、引きつった顔でその人物を呼んだ。
「お……お前、ベルナデット……!!」
「ううん……」
ベルナは一瞬頭を振った後、バスティアンを見て慌てた様子で立ち上がる。
「ごっ、ご、ご、ご」
彼女は恭しくお辞儀した。
「ご……ごきげんよう、バスティアン殿下」
「お前……」
虚を衝かれた様子だったバスティアンは、きっと鋭い目つきに戻る。
「お前っ、何をしに来た!? ——この前の約定、忘れたわけではないだろう」
「はい。もちろんです、殿下」
突然ベルナがにたりと唇の端を吊り上げ、バスティアンは思わずごくりと喉を鳴らす。
(お、落ち着いて話さなければ。やっと手がかりが摑めたのだから)
ベルナはゆっくりと深呼吸し、それからおもむろに口を開いた。

「――ロートシルト侯爵家。どうか、ご注意ください」
「なっ!?」
「でなければ明日、大変なことが起こりますよ」
ベルナは静かに腕を広げた。
その瞬間、天候が悪化し、突然激しい雷が鳴り始める。
稲光が刹那に照らす彼女の顔は、おぞましい笑みを浮かべている――かのように見えた。
「ベルナデット、お前！」
たまらずバスティアンは叫ぶ。
「それはつまり――お前が明日、ロートシルト侯爵家を襲う、ということか!?」
「え!?」
「そうか……確か、明日はカロリーヌ嬢の誕生会が開かれるのだったな。博物館だけでは飽き足らず、次は侯爵家を狙うということか！」
（い、いけない！）
ベルナは顔面を硬直させたまま焦った。
（落ち着いて喋るために、まず一番大切なことから話そうと思ったのだけど――それが仇になってしまうだなんて）

バスティアンの問いかけに、ベルナはぱしぱしと何度か己の頬を叩いてから言った。
「……違います、殿下」
震えそうになる声を絞り出しながら、彼女は続けた。
「私ではなく、魔物たちが襲う――そういうことです」
「なっ……」
――バスティアンは口を閉ざし、しばし静寂がその場を支配する。
(よし……これで私がやるのではない、ということが伝わったはずだわ)
ベルナはほっと安堵した。
(これで殿下の誤解も解けたはず――)
「……そうか」
顔を俯けてから、静かにバスティアンは言った。
「お前の考えは、よくわかった。要するに」
彼は面を上げる。その両手に――激しい『光』が宿る。
「要するに、今すぐここで、私に討たれたいというわけだな！」
ばちばちと『光』が煌めき、『聖女』の青い目は、爛々と怒りに燃えている！

「えっ……」
　ベルナは一瞬言葉を失った。
「……ええ、えっ、ちっ、違います殿下！　つまり私はそのっ、魔界の力を借りた組織にカロリーヌさんが――――」
「ええい、『配下に襲わせる』と犯行予告をしておいて、今さら何を言い訳している!?　そこになおれ、一発で消し炭にしてやるっ!!」
「そっ、そんなぁああ！」
　魔王の口下手が、聖女の疑念に火をつけてしまったようだ。
「お、落ち着いてください殿下！　話し合えばわかりますっ！」
「何をどう落ち着けと言うんだ、お前はぁあ！」
「――陛下！」
　と、今度は執務室の花瓶から、にゅるりとウシュクが顔を出す。
「陛下、こちらです！　さあ、手を！」
「あっ、ウシュクさん！」
「待てお前たち！　逃がすか……」
　ベルナがウシュクの伸ばした手を取った――その瞬間。
「ちっ……」

花瓶の中にベルナの姿は消え、バスティアンの放った『光』は、空を切ったのだった。
「――逃したか」
彼は歯噛みする。
「くそっ、ベルナデットの奴……！」
呟きを漏らしたバスティアンの表情は、どこか、煮え切らない様子だった。

「あわわわわ」
一方、ウシュクの力で瞬時に邸宅の台所に戻って来たベルナは、頭を抱えていた。
「ど、どどどうしましょう。殿下にお願いして、カロリーヌさんを守っていただくつもりだったのに、こんなことになるなんて」
ぐすっと鼻を鳴らしてベルナが言うと、ウシュクが彼女を取りなすように明るく言った。
「でも陛下、ご立派でしたよぉ！　落雷の効果もあって、陛下のお顔、これまでにないほどに恐ろしげで威厳たっぷりでした」
「そのせいで余計に誤解されてしまったのではないですかぁ～」
「――なんにせよ」

深いため息をついた後、ベルナの傍らに立つ魔神・ネメシロは口を開く。
「魔王。貴様の言が確かなら、今回の事件、やはり結界を越えて人間界へ来た魔物が、人間に力を与えることによって起こっているようだな」
魔神の言葉に、ベルナは再び緊張の面持ちになった。

あの後――倉庫街から帰ってきたベルナは、ネメシロとウシュクにすべてを話した。
最初は訝しげだったネメシロたちも、ベルナの説明が進むにつれ、顔色を変えた。
（それですぐに殿下にご連絡を、と私が言って……ウシュクさんにお願いしたのだけれどうまくいかなかった。
ちなみにジャンは意識が戻った後、大泣きしながらも「とにかく上司に報告します」と慌ててベルナと別れたのだった。

ネメシロの発言を受けて、ウシュクは首を傾げる。
「むむむ。ですがその仮面の連中、どうして今まで隠れおおせていたのでしょう？　ニンゲンの隠れ家の一つや二つ、わたくしやネメシロ殿に見つけられないはずありませんのに」
「おそらく――幻覚・幻惑の類の術が使われているのだろう」
「幻覚……ですか？」

ベルナの問いに、ネメシロは頷いた。
「精神に作用し、昏倒させる類のな。ただの人間や動物なら、近くにいただけで気絶するだろう。貴様が博物館で見た霧の正体も、これと同じものだ。博物館を襲った連中に聖女の『光』が効いたのは、奴ら自身に、幻惑の霧に抗する魔術がかけられていたゆえだ」
魔神は眉間に皺を寄せる。
「そして我とウシュク……さらに人間どもがどれだけ手を尽くしても、奴らの潜んでいた場所がわからなかったのもそのせいだ。人間も小鳥どもも、その近場に寄るだけで意識をねじ曲げられ……気絶から目覚めても、何が起こったのか覚えていないのだろう」
「な、なるほど……」
ベルナは自分には効かなかった、あの「霧」のことを思い出す。
ネメシロの風が効かないのと同様、潜在的に最強の魔力を持つ彼女に、魔術は通じない。
（あの博物館で、私が気を失わないでいられたのは、あれが魔術だったからなのね）
そうまで考えて、ベルナは一瞬、ぐっと険しい表情を浮かべた後――
「ネメシロさん、ウシュクさん」
配下の魔物たちに尋ねた。
「あの……ギンレーさんの力は、その幻惑とは関係がないのですか？」
「え？」

「魔王！　――貴様っ」
ぽかんとしたウシュクの横で、ネメシロは声を荒げた。
「貴様、よもや！　ギンレーを主犯とし、聖女めに突き出すつもりではないだろうな!?」
「ち、違います！」
危うくネメシロに気圧されそうになりながらも、ベルナは、きっぱりと言った。
「そうではありません。……ギンレーさんを信じるために、私、お尋ねしたのです」
「……」
いつになく強い力を帯びる彼女の瞳を、ネメシロは珍しく驚いた様子で見つめる。
「……フン」
しばらくしてから、彼は鼻で笑った。ただそれは、どこか温かいものを含んでいた。
「フン、言うようになった。貴様も少しは成長したようだな、認めてやる」
「ネメシロさん……！」
僅かに微笑みを浮かべたネメシロに、ベルナもむずがゆい気持ちになり、（にたりと）笑い返す。途端に魔神は顔を背けた。
「っ！　だ……だが慢心はするな。力と意識が覚醒するまで、あくまで貴様は半端者――この魔神ネメシロの導きを受ける立場の者だと、せいぜいその頭に刻み込んでおけ！」
「うう……」

一方、ウシュクはぐすんと鼻を鳴らした。
「嬉しいですよ、魔王陛下。陛下はこの瞬間にも、どんどん魔王として成長していらっしゃるのですね。ウシュクめはどこまでもついて行くばかりでございますよ。ぐすんぐすん」
言いつつ彼はとめどなく溢れる涎を拭っている。
「あ、ありがとうございます。でもあの、ウシュクさん。それ涙ではなくて涎ですよ……」
「え？　あー、また間違えましたか。てへっ」
「……話を戻すぞ」
こほん、と咳払いをしてからネメシロが続ける。
「魔王、貴様の問いに答えよう。ギンレーの持ち味は、あくまで破壊と機動力だ。強烈な炎と、猛き翼こそがその力――千年前も今も、幻惑の力など持っていまい」
「まあ、普通に考えればそうですよねぇ。それにギンレー殿の性格上、ニンゲンとつるむなんて嫌がりそうですし。あー、でもあれですよう、ネメシロ殿」
口の端をすっかり拭き終えてから、ウシュクが口を開く。
「もしギンレー殿が、今まで我らを騙していたとしたらどうでしょう？　結局、『用事』というのがなんなのか、わからないままですしねえ」
「ギンレーさんの『用事』……」
（そうだわ。逆に言えば、それさえわかれば）

ベルナは思案し――そして、はたと思い出した。
「そうだ！　ネメシロさん、前にギンレーさんは、時々屋敷に戻ってきては、何かやっていると仰っていましたよね？」
「うむ、言ったな」
「そ、それは……屋敷の、どこです？」
「ふむ……そうだな」
ネメシロは顎に手をやり、もう片方の手を台所の隅に動かす。
「あそこにうずくまっているのを、確認したことがある」
「何をしているのか聞いても、『お前さらにはわかんねえことだべ～』とか言って教えてくれませんでしたけどねっ」
（あの隅……）
あの台所の隅には、何かあったはず。ベルナは古い記憶を呼び覚まし、そして――
「あっ！」
脳裏に幼い日の記憶がよぎり、声をあげた。
（そうだわ。思い出した、あの時――）
確かあれはまだ、ベルナが幼い時。
革命が始まったばかりで、まだシャルトリューズ伯爵家も裕福だった時代。

（兄様とかくれんぼをして遊んでいた時、台所に来たことがあったわ）
彼女はゆっくりと隅に行き、床にしゃがみ込む。
（そして私は、ここで料理人の方が床を――――）
石床の僅かな隙間に、彼女は手をかける。
するとそこから、鉄でできた輪の形の取っ手が現れた。
（そう！　床を開けていたのを見て、ここに隠れようと思った。けれど、この中には……）
「陛下、なんですかこれは？　床に扉があるんですか？」
首をひねりながら問うウシュクに、ベルナは答える。
「ここは――貯蔵庫だったんです。野菜を入れるための」
（貧乏になってからほとんど使っていなかったから、すっかり忘れてしまっていたけれど）
彼女は、ゆっくりと腕に力を籠めた。
（この中には野菜がいっぱい入っていて、私はここには隠れられなくて……そう、私の考えが正しければ、きっとこの中には！）
ぎし、と軋んだ音を立て、貯蔵庫の戸が開く。
果たして、そこにぎっしりと詰め込まれていたのは――――
「……ジャガイモ？」
ずだ袋に詰まった、ジャガイモだった。

第四章　翔べよ赤竜

ベルナがバスティアンの元を訪れた、翌日の夜。

ロートシルト侯爵家の一人娘であるカロリーヌは、この世の贅を極めたかのような邸宅の大ホールで、羨望と祝福の眼差しを一身に受けていた。

「お誕生日おめでとうございます、カロリーヌ様！」

「今夜はまた、特別に美しくていらっしゃいますな」

「そのお召し物、なんて綺麗な青色なんでしょう！　羨ましいですわー……」

「ほほほ！　皆様、本日は私のためにお越しくださり、ありがとうございますわ」

この日のためにと誂えられた流行最先端のドレスと、貴重な宝石をふんだんに使った装飾品とで、生来の美しさに磨きをかけた彼女にとり、この賞賛は受けて当然のものだった。

（おーっほほほ！　いいですわ！　気分いいですわ！　そもそも誕生日とは気分のよろしいものですけれど、今年はさらに格別ですわね）

扇で口元を隠し、来賓からの挨拶を受けつつ、カロリーヌは内心、ふふんとほくそ笑む。

（さて、今夜のもう一人の主役――バスティアン殿下は、一体いつおいでになるのかしら？遅れていらっしゃるようだけれど……こちらの準備は、もう既に整っていましてよ？）

貴族・国民ともに高い人気を誇るバスティアン殿下と、カロリーヌの婚姻――それは、その権勢をさらに確かなものとするための、ロートシルト侯爵家の最大の目標であった。

今日この日の誕生会を盛大に行っているのも、ひとえにバスティアン殿下の好意をカロリーヌに向けるためである。

（王妃様は既に私と殿下の婚姻にかなり前向きになっていらっしゃるとのことですし！　お父様のお力で、今夜の我が家は……王宮ほどとまでは申しませんけれど、最高の祝宴をお約束できるものとなっていますわ）

彼女は思い返す。

バスティアン殿下に近づくため、一族をあげて奮闘してきたこれまでの苦労と、努力を。

（ふふ……サロンでのお話に始まって、散策に舞踏会に、色々なことを重ねてきましたわね。――そう、舞踏会といえば）

そこで――カロリーヌは苦い思い出を想起し、ほんの僅かに眉をしかめた。

（昨年の暮れの舞踏会は、さんざんな目に遭わされましたわ！）

大舞踏会にて彼女は、バスティアン殿下の舞踏の最初の相手となる栄誉を手にした。

しかしそれに浸る余韻もなく、彼女はその時起こった「事故」に巻き込まれ、気がつけば、

わけがわからないうちに家にかつぎ込まれていたのである。

（あの時は……そう！　あの『呪殺令嬢』の幻覚まで見せられたのでしたわね）

窓の外に浮かぶベルナの顔――噂では生霊とされているが――を見て、衆人環視の中、思い切り転んでしまったあの屈辱を、彼女はまだ忘れていない。

（ふん！　そういえばあの時、なぜか殿下は私ではなく、あの陰鬱呪殺娘のことばかり気にしなさっていたようでしたわ。不愉快ですけれど……まあ、今宵の会では何も心配する必要などありませんわ。殿下をお呼びすることもあって、我が邸宅の警備は万全ですもの）

彼女は我知らず胸を張る。

（貴族の令嬢として生を受けたなら、己を磨き、相応しい殿方に嫁ぎ、生家と婚家の名声をさらに高めることこそが務め。そしてバスティアン殿下なら、私にも相応しいお方と言えますわ）

ともすれば不遜な考えだが、彼女にとっては当然のことなのだ。

（恋だの愛だのにうつつを抜かさず、ただ自らを磨いてきた日々……ふふっ、報われる日はもうすぐのようですわね！）

胸の内から込み上げてくるこの喜びの衝動を堪え切れず、ついつい浮かべてしまう笑みを、カロリーヌは扇で隠すのに必死だった。

「ふふん……」

「カロリーヌ嬢！」

その時、彼女に声をかける者があった。
心に沁み入るような麗しい声と、春の陽光のような美貌を合わせ持つ、その人物は――
「まあ、バスティアン殿下！」
カロリーヌはとびきりの笑顔で、彼を迎える。
「今宵は私のためにご足労いただき、誠に光栄に存じますわ！」
「いいえ。私こそ、あなたの誕生日という素晴らしい日に、ご招待いただき感謝します」
バスティアンもまた彼女に神々しい微笑みで応えた。
胸を突き上げる喜びを、カロリーヌは高笑いで解放する。
「おーっほほほ！　いいえ、殿下の忠臣として当然の礼を――っ、あら？」
そこで――彼女はバスティアンの背後に、もう一人の人影を見た。
「あっ、あ、あなたは……」
「こんばんは。マドモワゼル」
将官用の軍服を纏った、バスティアンを上回る背丈と、鐘のように低く響く声。何より、その傷だらけの顔。
「ア、アルベール殿下……！　お、おいでしたのね」
「ええ、実は……カロリーヌ嬢もご存じでしょう、巷を騒がせている事件の話を。せっかくの日にもしものことがあってはと、今日は兄に同行してもらったのです」



「軍部も動かし、この邸宅を警備させている。そして私は単なる同行者だ。気にするな、ロートシルトの……カ……カラ……カロ……」

「カロリーヌ嬢ですよ、兄上」

「……うむ。マドモワゼル・カロリーヌ・ド・ロートシルト」

「え、ああ、いいえ！　わかりましたわ。両殿下のお心遣い、痛み入ります」

カロリーヌは深くお辞儀しながら、心の中では戸惑っている。

（な……なんですのこの展開、思っていたことと違いますけれど……バスティアン殿下と「つぎはぎ」の兄殿下は、仲が悪くていらしたのでは……!?）

そんな彼女の様子に、バスティアンは何かを察知したのだろうか。

「カロリーヌ嬢、申し訳ありませんが、少し失礼します……」

兄を連れて、そそくさと彼女の傍を離れていった。

「……兄上、いい加減に他人の名前はすぐに覚える習慣をつけてください」

「できるものならな」

訝しげにこちらを見ているカロリーヌから少し離れた場所で、兄弟はこそこそ会話する。

「そもそも兄上は、ただでさえ社交の場に縁が遠いのです。警護を付けてくださったことは感謝しますが、その……」

「迷惑か？」
「いえ。……いえ、ただ、兄上が心配で」
社交界での兄の評判を知っているだけに、バスティアンは不安顔だ。……しかし。
「案ずるな」
その口の端をほんの僅かに吊り上げ、アルベールは笑う。
「社交の練習は既に終えたところだ。前に話しただろう」
「ああ……そうでしたね。茶会をなさってきたのだとか」
そこまで言って、バスティアンは浮かんだ疑問にふと首を傾げる。
「しかし貴族の誰からも、兄上が茶会を開かれたという話は聞きません。一体、どなたと？」
「チャッピーだ」
「……は？」
「クマを模したぬいぐるみだ」
「ええ!?」
思わず地が出てしまいそうになり、バスティアンは慌てて表情を「王子」のものに戻す。
「……そ、そうでしたか。ぬいぐるみ……ぬ、ぬいぐるみとお話しに」
「チャッピーは俺の唯一の友達だ。彼と共に人との触れ合いを練習してきたから大丈夫だ」
「……あの、いえ……わ、わかりました」

（まさか兄上にそんな趣味があったとは……）

一体そのチャッピーと、どんな茶会をしてきたのだろうと、バスティアンは自動的に想像しそうになって慌てて止める。

（駄目だ、集中しなくては……なんのためにここまで来たんだ）

「バスティアン」

気付けば、兄の顔は、またいつもの冷厳なものになっていた。

「ともかく。『人間相手の』警護は心配するな。お前はただ、務めを果たすことを考えろ」

「……はい、兄上。お任せいたします」

「任された。……しかし」

アルベールは口ごもったように言葉を止め、弟の瞳をじっと覗き込んでから、続ける。

「バスティアン。……鋭い目のマドモワゼルを、信じられるとよいな」

「えっ!?」

思いもよらぬ一言に、バスティアンは今度こそ驚きの声をあげる。

「兄上、それはどういう……」

「気にするな。……じゃあな」

軽く手を振ってから、アルベールはホールの向こうへ去って行った。

「兄上……」

「殿下！　アルベール殿下とのお話は、もう終えられましたの？」
「あっ……カロリーヌ嬢！」
いけない、と気を取り直し、バスティアンは彼女に一礼した。
「失礼しました。警護のことを話していたもので……物騒になり、申し訳ありません」
「いいえ――」
バスティアンの言葉に、カロリーヌは軽く首を振る。

ホール全体に、邸宅周辺に散らばっていく兵士たちの姿を見て、カロリーヌは考える。
（……そうでしたわね。なんでも行啓された博物館で襲撃があったとか）
それなら、バスティアンのこの警備体制も理解できるというものだ。
（まったく、どなたがそのような愚行に走ったか存じませんけど、迷惑極まりないですわ）
せっかく自前の警備で済ませようと思ったのに、美観が無骨な兵卒たちの姿で台無しになってしまうではないか――と、カロリーヌが憤った、その時だ。
「――きっ、きゃあああ！」
絹を裂くような女性の悲鳴が、ホールの隅からあがった。
その声にカロリーヌも、またバスティアンも飛び上がって驚く。
「っ、どうされました!?」

誰よりも早く駆け寄って問うバスティアンに、その女性、貴族の婦人はこう答える。
「ああ、で、殿下……申し訳ありません。ただ、今、お庭の外に、恐ろしい人影を見たような気がしましたので……」
「恐ろしい人影……ですって？」
同じくやって来て、怪訝な顔をするカロリーヌの隣で、殿下は慌てた口調で続けて問う。
「もっ、もしやその人影は――すさまじい三白眼で、冬の月よりも青白い肌で、見る者すべてを呪うような表情を浮かべた、ドス黒い雰囲気の少女だったのでは⁉」
「殿下……それ、ベルナデット嬢のことですの？」
ますます怪訝な顔で、じろりと睨むカロリーヌ嬢を置いて、バスティアンは固唾を呑んで婦人の答えを待つ。
「い、いいえ……こう、見たこともない派手な色の髪の男が……そのっ、窓の外からそこのテーブルの上の野菜をじいっと見つめていた……ような気がしましたの」
「な、なんだ……」
明らかに安堵した様子のバスティアン殿下を見て、彼の気持ちがわからずにカロリーヌは苦々しげな表情になる。
「……そうだ、カロリーヌ嬢」
バスティアンはくるりと傍らを見て、言った。

「今夜はどうか、私の傍を離れないでいてくださいね」
真摯な眼差しが、彼女を貫く。
「えっ!?　……ええ、わかりましたわ」
（なっ、なんですの。呪殺娘のことを気にしているのかと思えば、この言いよう……バスティアン殿下のお心はよくわかりませんわね）
思わず扇の下に隠した頬をやや赤らめつつも、カロリーヌは再び満足な気持ちになった。

――一方、同時刻、ロートシルト侯爵家の屋根の上。
魔王ベルナと風・水の四天王たちは、ウシュクの力で侯爵家の庭の人工池から潜入すると、すぐさまこの場所に上っていた。
無論――仮面の集団、『白竜の顎門』の企みを阻止するためである。
高さと寒さにガチガチしているベルナの横で、ひょいと下を覗き込んだウシュクは言う。
「おや、なんだか下でニンゲンが騒いでいたような気がしますけど、なんでしょうねえ？」
「さてな、人間どももおおかた気が立っているのだろう。結局この館にも、聖女めが配置したらしい兵士どもが大勢いるからな……フン、聖女め。魔王の言を信じたのか、信じておらぬの

か、わからん奴だな」

最後は呟くように言ってから、ネメシロはベルナに向き直った。

「いいか、魔王」

「はっ、はい！」

「魔王、あの『白竜の顎門』とか名乗る連中の事件――この事件はもはや、ロートシルト家の人間の問題ではない。我らと貴様に対する宣戦布告だ」

ベルナの目をきっ、と見据えながら彼は言う。

「少なくとも、貴様はその挑戦に対し逃げ出す姿勢を見せなかった。その点については誉めてやる。ならば戦え！　この我も手助けしてやる」

「は……はい！」

ベルナは力強く頷いた。

「私、やります！　これ以上魔界に関する事件で、人々を傷つけないためにも……」

「そして誰が人間界の真の支配者なのか思い知らせてやるためにも」

「ウシュクさん、勝手に付け足さないでくださいっ！」

「黙れ、貴様ら」

ネメシロはぴしゃりと言い放つ。

「貴様らが騒いでいては、僅かな予兆も見逃してしまう。今回の相手――幻惑の霧を用いる相

手は、小鳥に監視させるわけにはいかないのだからな」
「そ……そうでしたね。私や、ネメシロさんたちの目で、直接見ていませんと」
ベルナ――ネメシロに命じられ、一応正装している――は、やや青ざめながらも決意に満ちた表情で頷いた。
（今度こそ、事件を防ぐ……でなくば、どなたも傷つくことのないようにしなければ）
彼女はそっと、屋根の上から地上を見つめ――
「ううっ、や、やはり高いです」
「わざわざ下を見てから言うな、半端者め。……そうだ、貴様にこれを渡しておかねばな」
そう言って、ネメシロはベルナにアマトルの欠片――例の、ダウジング用に糸が結びつけられているものを手渡す。
「あっ……これがあれば、『ウェヌスの涙』が近づいてきたことがわかりますね」
落としたりしないよう、ベルナは急いでそれを手首に巻いた。
「うむ、珍しく理解が早いな」
「ですが、あの仮面の方々は、今日も宝玉を持って来られるのでしょうか……？」
「ええ、多分そうだと思いますよぉ」
答えたのはウシュクだ。
「相手の魔物が誰か知りませんが、きっとそいつは不遜にも自慢顔で、『ウェヌスの涙』に魔

力を注いでいるのでしょう。そして強化された力で、この家を襲うに違いありません」
「我らもあの宝玉は、手に入れられるものならそうしたかったほどだからな。あの聖女めが睨みを利かせているせいで、そうはいかなかったが」
「っ……そ、それでは」
ベルナの顔がさらに青ざめた。
「それでは今回、仮面の方々は、恐ろしい魔力を用いることができる、ということですか」
「臆するな、貴様にはいかなる魔術も通用せん。まあ、物理的な攻撃を受ければ別だがな」
「うーん。千年前の陛下なら、首を刎ねられたり、手足をもがれたりしても、数秒後には元に戻ってたんですけどねえ」
「そっ、そんな！」
前世の自分のつくづくの人外ぶりに、ベルナは今さら目まいのする思いだ。
「ううう……と、とにかく、気をつけます」
「うむ。気をつけて下に降りろよ」
「は、はい気をつけて――――え？」
ベルナははたと四天王たちを見渡した。
「えっ……私、ここから皆さんと一緒に、見張りをするのでは……」
「いえ、そうではないです」

「貴様には重要な任がある。下の宴会場に紛れ込み、直接カロリーヌを監視する役だ」
「そっ……そんなぁ！」
びっくりしたベルナは、懸命に抗弁する。
「で、でもそんなことをしたら、目立つというか……きっと殿下に見つかって、攻撃を」
「大丈夫ですよぉ。さすがの聖女も、これだけのニンゲンが蠢いている中で陛下を攻撃すれば、自分がどのような目で見られることになるか、わかってるはずですって」
「……ということだ。さあ行け」
「ううう……だから私に、正装するように仰ったのですね」
彼女の一張羅――母の形見の漆黒のドレスが、夜闇に溶け込みながらも風に踊る。
「異常があれば、我らも気付くはずだ。が、くれぐれも気を抜くな」
「ぬ、抜けないと思います……」
「ウシュク、貴様は手筈通り排水管に潜め。我は上空の視察にあたる。……ギンレーの奴がいれば、奴にも監視をさせたのだがな……仕方がない」
「そうですね……」
ネメシロの言葉に、ベルナは頷く。
（ギンレーさんの『納得』……結局、わからずじまいでここまで来てしまったわ）
そう考えると気持ちが沈むが、しかし、いつまでもこうしているわけにはいかない。

（……そうだわ。行かないと！）

ベルナは再び、くっと地上を見下ろした。

「我が援助する。ここからなら、護衛の兵士どもの目にも入るまい。降りた後はわかるな」

「はっ、はい！」

頷き、ベルナは一気呵成に下に飛び降りた。

「行ってらっしゃ～い」

ウシュクの能天気な声が、どんどん上に遠ざかっていく。風の唸りが耳に痛い。

しかし、危ないと思うよりも早くに、彼女の降下速度はがくんと下がる。

ネメシロが操る風の渦が、彼女の周りを取り囲み、守っているのだ。

（ようし……後は）

羽根のようにふわりと庭に立ち、ベルナはすぐさま賑やかなホールに目を向けた。

（私が、しっかりする時だわ！）

父様、母様、神様、見ていてください――そう祈りつつ、彼女はしっかりとした足取りで、庭に通じる入り口から、ホールに入っていったのだった。

「あ、あのう、殿下。これは一体、どういうことですの……？」
「申し訳ありません、カロリーヌ嬢。ですがどうか今しばらく、ご辛抱ください」
その頃ホールでは、バスティアンが苦労の真っ最中だった。
（くそっ、そんな目で見ないでくれ、カロリーヌ嬢。私だって、好きでこんなことをしているわけではないんだ！）
彼が内心舌打ちしている理由、それは――――
「どっ、どのような事情か存じませんけれど、こ、これは少し……」
――彼がカロリーヌと繋ぎっぱなしにしている、手にあった。

バスティアンは、カロリーヌの警護を直接行うことに決めていた。
（今夜、もし本当に襲撃があるなら――それはおそらく、魔の力によるものになるはずだ）
彼はそう推理していた。
（単純な人間の力では、魔の力に対抗できない――しかし）
カロリーヌと繋いでいる右手に纏わせた、微弱な『光』を消さないようにしつつ、バスティ

アンは虚空を見据える。

（私がこうして、カロリーヌ嬢に『光』を放ち続けていれば……少なくともそうしている間は、彼女に魔の力による危害は加わらないはずだ）

ずっとこうして集中し続けるというのはいささか骨が折れるが、神託を受けた『聖女』として、何よりこの国の王子として、臣民を危険にさらすわけにはいかない。

バスティアンは何がなんでも、今回の事件を解決するつもりでいた。

（ベルナデット……来るなら来い。いつでも相手になってやる）

そう思う彼の心に去来するのは、幻視した聖女の言葉と、ほんの僅かな胸の痛み。

（くそ……あんな幻視をしたせいで……）

『許さないで』――そう訴える聖女の姿が、魔王ベルナデットを完全に敵視することから、彼を遠ざけていた。

（なぜ私は、こういつもいつも、あいつのことばかり考えさせられて……）

「でっ、殿下！」

やや苛立ったカロリーヌの声で、バスティアンは現実に引き戻される。

「っ、すみません、カロリーヌ嬢」

「もうっ……もしや殿下は、こうした大きな会がお嫌いですの？　年の暮れの大舞踏会でも、

心ここにあらずでいらっしゃいましたわよね」
カロリーヌは探るように首を傾げ、目を細めながらバスティアンに問う。
「心を繋ぎとめるために、こうして手を繋いでおいでなのかしら？」
「ふふっ、お気になさらないでください！」
殿下はにこりと、万人の心を奪うような爽やかな笑みを浮かべた。
（あっ……はぐらかそうとなさってますわね）
思わずどきりとしながらも、気丈なカロリーヌはそう察知する。
「まっ……まったく殿下ったら、普段はもっとウイットに富んだ会話をなさる方ですのに。今夜は私の誕生会ともあって緊張しておいでなのかしら!?　おっほほほほ！」
「あはははは……」
（くそっ……はぐらかしがバレているな、これは）
王子らしい柔和な笑みを固定したまま、バスティアンは己の失策ぶりに腹を立てていた。
しかしカロリーヌもまた、やや微妙な空気になっている会を盛り上げるべく声をあげる。
「……そ、それではそろそろ、よい頃合いですし！　皆様、あちらをご覧くださいませ！」
バスティアンと繋いだ左手は離さぬままに、彼女は右手を軽やかにホールの隅に向けた。
そこには、大人の身長の二倍はあろうかという巨大な箱が、リボン付きで置かれている。

それまでバスティアンとカロリーヌのやり取りを興味深げに見守っていた人々の視線は皆、そちらに集中した。

「それはこの私のために、この国一番の職人集団が腕によりをかけて作り上げたプレゼントが入っているそうですわ。一体どのようなものですかしらね？」

まあ中身は知っているのですけど――と思いつつ、カロリーヌはうふふと微笑む。

「さあ、開けてくださいな！　この私への贈り物を！」

彼女の命を受け、召使いたちが厳かに箱に近づき、しずしずとリボンを解く。

すると内部のカラクリが作動し、箱は自動でぱかりと二つに割れ、開いていく。

「おおっ！」

見たこともない珍しいその仕掛けに、並みいる貴族たちは驚きと好奇で包まれた。

その様子を、嬉しそうにカロリーヌは観察している。そして――

「まあ、これは……！」

箱の中に収められた、大理石製の聖女の像が現れるのと同時に――

「っ、あ、あれ!?　あれは!!」

人々の驚きと好奇は――

「ぎゃっ、ぎゃあああ！」

――恐怖に変わった。

「あっえ、ええっ!?　こ、この箱、割れるのですか……!?」
「っ……！」
おぞましく陰気な雰囲気を纏った、今にも呪いの術を使いそうな令嬢。
聖女像の後ろで何事か呟きながらこちらを見据えている、令嬢が一人。すなわち。
「ベルナデットぉお!!」
「あっ、あらちょっと、殿下!?」
見るなり叫び、バスティアンは——カロリーヌの手を繋いだまま、天敵のもとへ向かう。

「どういうことだ、ベルナデット！　よくもぬけぬけと姿を現したな！」
「あ、あのっ、ち、違うんです殿下、これは……」
ホールのすぐ外の庭にて。
普段の「王子」としての顔も忘れて詰め寄るバスティアンから、必死に逸らしたベルナの視線は、顔を怒りで真っ赤に染めたカロリーヌのそれとかちりと合ってしまう。
（ああ……カロリーヌさん、怒ってらっしゃるわ）
無理もない、自身の大切な誕生会の目玉シーンを、無茶苦茶にされてしまったのだから。

（カロリーヌさん、ごめんなさい。大きなものの陰なら、隠れやすいと思ったのです。まさかあそこがあれほど目立つ場所だなんて、気付けなかったのです……）

ベルナは考え――そしてバスティアンの手が、カロリーヌの手を握っているのに気付く。

（あ……！）

また胸の中に、『あの感覚』が湧き上がる。――ベルナは思い出す。

（そういえば、あの赤仮面の方は、仰っていたわ。お二人は、婚姻に向けて動いていると）

カロリーヌ嬢なら婚約者になって当然だ。

そう思うのに、なぜかたまらなく苦しくなる。

心臓を握られている時にも似た、どうしようもなく切なくなるような、この感覚――

（ああっ……私、こんな時にまた『殺意』が込み上げてきてしまうなんて）

ベルナは面を伏せた。

（これはどうして……私の中の魔王が、バスティアン殿下を見て興奮しているのかしら？　でも、今は私、カロリーヌさんを見て）

「おいっ、下を向くな！　こっちを見ろ！」

「あっ……」

ぐいっ、と顎を無理やり手で動かされ、ベルナはか細い悲鳴をあげた。

「ベルナデット、王宮でのことを忘れたわけではあるまい？　私のもとから逃げ出して、ただ

で済むと思っていたのか!?　甘い奴だ！」
「で、殿下……」
「私が簡単に諦めると思うなよ！」
相当頭に来ているらしいバスティアンは、カロリーヌから向けられる視線に気付かない。
「どこに逃げようと、どこまでも追いかけてやるからな！　そして必ずお前の……」
「違います、殿下！」
たまらず、大声をあげたベルナ。
「何が違う！」
「私はっ……私は、何も企んでなどいません!!　もうこれ以上、誰かが傷つくところを見たくないだけなのです！」
ベルナの訴えを聞き――バスティアンの表情に、僅かな驚きが浮かぶ。
「確かに……確かに、私は魔王で、四天王の皆さんと共に生活していて――普通でもないし、殿下の敵であることも、わかっています。けれど」
ベルナはその三白眼でじっとバスティアンを見つめながら続けた。
「けれど、信じてください！　私は、誰も傷つけたくないし、魔物の皆さんにだって、誰も傷つけて欲しくないんです。そしていつか、平和な解決ができると思っているのです」
「信用できるか、相手は魔物だ！　……神の摂理に逆らう、悪魔じゃないか」

「た、たとえそうでも！」
拳の中のアマトルの欠片を握りしめ、ベルナは声を張り上げた。
「人間と同じです！　生きているんです。考え方は、だいぶ違う……とは思いますけれど」
きっぱりと、彼女は言う。
「だから！　せめて一度くらい、その心を信じても、いい……のでは、ないかと……」
「ベルナデット……」
語尾はかなり消え入りそうだったが、それでもベルナの言葉は、バスティアンの語気を弱めるのには十分だった。
「私は、魔王です。だから『配下』の皆さんを信じます。信じられる理由があるから、信じます。今回のことは……私たち以外の魔物の方のせいなんです。だから、私が止めます」
魔王としての責任。それが、確かにベルナの胸に宿った瞬間だった。
そのまま彼女らは見つめ合う。

二人は気付かない。
「……へぇ。あのお嬢さ――」
屋根の上からベルナの言葉を聞いていたギンレーが、驚きの声をあげていることも――
「う、ぬぬぬぬう……」

――カロリーヌ嬢の限界が近づいていたことも。

「っ、もううんざりですわっ!!」

ぶん！　と、カロリーヌが繋いでいた手を振りほどいた！

ベルナもバスティアンも、驚愕の表情で彼女を見る。

二人の視線を受けたカロリーヌは、怒り心頭の様子でありつつも、どこか涙目だった。

「殿下……そんなにベルナデットさんのことがお気に入りですのっ!?」

「えっ……」

バスティアンは慌てて首を振る。

「なっ、ち、違いますカロリーヌ嬢！　ははっ、何を仰います。私は……」

「とぼけないでくださいましっ！『こっちを見ろ』だの、『どこまでも追いかける』だの……魔物だなんだと、隠語まで使って！　この私の前でそのような痴話喧嘩をなさっておいて、今さら何もないだなんて仰って、信じられると思って!?」

（あ、ああ……誤解されているわ！）

ベルナはおたとうろたえるばかりだ。

（た、確かに事情を知らない方から見れば、とても紛らわしいやり取りだったかもしれないけれど。わ、私と殿下には――）

――愛情なんて、何もないのに。

そう思うと、またベルナの胸の中は、切ない『殺意』でいっぱいになった。

「カロリーヌ嬢！　待ってください！」

そんなベルナを置いて、バスティアンは去ろうとするカロリーヌを懸命に追いかける。

「わっ、私の傍を離れられては困ります！」

「またそんなことを仰って！　……私、バスティアン殿下の恋愛関係に清らかなところ、けっこう買っておりましたのだけれど！　どーやら、間違いだったようですわね！」

ぷりぷりした様子で言い、振り返りもせずにカロリーヌはホールに戻ろうとしている。

「駄目ですっ……止まれ、カロリーヌ嬢！　あなたは……」

バスティアンがカロリーヌの手を取ろうとした――刹那。

「――残念だったな、バスティアン。時間切れだ」

「なっ……!?」

突然カロリーヌの足元の地面が割れ――男の声と共に、ぼこりと手が現れる。

その男の声を聞いて、ベルナの心臓は途端に早鐘のように鳴り始めた。

手首に巻いたアマトルの欠片が、また熱されたかのように熱くなる。

（この声は！）

ベルナが驚く間にも、地面から現れた手はカロリーヌの足を摑んだ。

「あっ……！」
それと同時に白い霧が、割れた地面から噴出し、彼女は意識を失う。
がくりと膝を折った後、令嬢の身体は力なく地面に伏した。
「くそっ！」
バスティアンがカロリーヌの身体を支えようとするが、その歩みは妨げられる。
手に続き、頭、肩と、せり上がるように地面から現れた――赤い仮面を被った男によって。
「やあ、古の魔王よ。そして久しぶりだな。簒奪者の子にして『聖女』、バスティアンよ」
「っ……!?」
突然現れた異様な風体の男を前に、バスティアンは言葉を失う。
ベルナは、そんな彼の背後から叫んだ。
「殿下！　この方が、事件の犯人……『白竜の顎門』の一員です！」
「何っ!?」
「ほう……魔王よ。あなたは、簒奪者の側に協力するおつもりか。いやいや、それも一興」
言うなり赤仮面は、カロリーヌを軽々と肩に担いだ。
「しかし記憶と力を失っている今、どこまで我らに手向かうことができるかな？」
「くっ、ふざけるなっ！」
バスティアンの『光』の一撃が、赤仮面を襲う！

しかし仮面はするりと、まるで拳法か何かのようなステップでそれを避けると、ぱちんと指を鳴らした。その瞬間。

「うわっ……!?」

「きゃあっ！」

バスティアンもベルナも、同時にぐらりとよろめいた。

すさまじい地の揺れと轟音が、辺りを包む。

見れば、地面を割って、何本もの緑色の「柱」が伸びていく。

（これは、「柱」……？）

まるで吸い上げているかのように、地の隙間から白い霧を吐き出しながら、柱はみるみる邸宅を取り囲んでいく。

向こうから、何人もの人間が倒れるような、鈍い音が連続して聞こえる。

夜空に浮かぶ月が完全に隠れてしまったところで、ベルナは気付いた。

（いえ、この見た目……これは、植物!?　とても大きな植物、だわ！）

「ふふっ……これでカロリーヌ嬢は我らの手の中だ」

植物が辺りを覆う様子を満足げに見つめ、赤仮面はカロリーヌを担いだまま言った。

「この令嬢には、愚かなるロートシルト侯爵家への裁きの象徴として、恐るべき死が与えられることだろう。そう、彼女の亡骸を見ただけで、臓物が凍りつくほどの凄惨なる死が」

「そんなっ……！」
ベルナは頭を振った。
「バスティアン。お前は『聖女』でありながら人を守れなかったことを悔い、生きろ」
「くそっ！」
バスティアンが、指先に集中させた『光』を放つ。
目にも留まらぬ速さのそれを、だが、赤仮面は再びかわす。
「ふふ……そう、バスティアン。今はお前を殺さない。お前を殺すのは、もっと後――我らが伝説を再現し、お前が用済みとなった、その時だ」
「伝説だと……!?」
「さらばだ、バスティアン」
ゆらり、と赤仮面の姿が消える。
「我らを追えるものなら、追うがいい。それもまた一興――」
声だけを、残して。
「……ちっ！」
バスティアンは吐き捨て、半ば呆然としてしまっているベルナを一瞥した。
「ベルナデット……お前、を……」
彼の目が、一瞬、何か言いたげに揺らめき――

「っ！」

すぐさま怒りの色に戻ると、バスティアンは庭の向こうへ駆け出そうとした。

「まっ、待ってください殿下！」

ベルナはその背に叫ぶ。

「殿下、どこへ行かれるのですか！」

「馬だ！」

彼は振り返らず、短く叫んだ。

「馬を探す。ここから外に出れば、気絶していない馬がいるはずだ。それを探す！　それに乗って、あいつを追う！」

バスティアンは駆け出す。——彼は気付いていた。

もし赤仮面に遠距離を渡る力があるなら、わざわざバスティアンたちの前に姿を現さずとも、カロリーヌを攫えたはずだということに。

つまり彼らは、幻覚と短距離を渡る力は持っているかもしれないが、場所から場所への移動自体は、通常の手段を用いているはずだということに。

（あるいは宣戦布告のつもりで現れたのか……いや、いずれにせよ、まだ間に合うはず！）

バスティアンはそう考えた。しかし——

「……ついて来るな！」

「あっ……」
それを説明せずに、バスティアンは、ベルナに見えない向こうまで走り去ってしまった。

「殿下……」
ぽつりと取り残され、ベルナの口から声が漏れた。
「わっ、私、私……どうすればっ……！」
胸に手をやり、今にも泣きだしそうになる理性を必死に宥めながら、彼女は考える。
（落ちつかなくては。まずは、四天王の皆さんを呼んで……）
「――まーったく。あの聖女サマも、まだまだお子ちゃまだべ」
と、その時。ふわりとベルナの傍らに降り立ったのは、ギンレーだった。
「っ、ギンレー、さん……!?」
いつの間に……と驚くベルナを置いて、彼はふうと息を吐いた。
「しっかしやられたべ。まさか奴が、地面の中からやって来るなんてなぁ……ネメシロもウシュクも、今頃焦ってるだろーべ」
「ぎっ、ギンレーさん！」
頭をぽりぽり掻きながら言うギンレーに、ベルナは、決死の思いで頭を下げた。
「おっ……お願いします！　どうか、私に力を貸してください。私だけでは、どうしようもな

いんです。だから、ネメシロさんたちとも協力して、どうか……」
「なーに言ってんだべ、お嬢さ」
ふと――頭を上げたベルナに見えたのは。
にかっ！　と口の端を吊り上げ、不敵な笑みを浮かべる、ギンレーの姿だった。
「いやさ魔王サマ。そのことなら、もうオレは『納得』済みだべ」
「え――!?」
（ど、どうして……？）
思いもよらぬ展開に、目を白黒させるベルナ。
ギンレーはそんな彼女に目を細めると、ゆっくりと懐を探った。
「ああ……そうだべな。ちょっと、昔話に付き合ってもらおうか。ゾルスキア名物のジャガイモもあることだし……」
ジャガイモを取り出し、彼は言う。
「こいつを手に入れる『用事』には苦労したべ。お陰であっちゃこっちゃ飛び回ってよぉ。なかなか帰れんかったが」
（！　やっぱり……！）
ギンレーの用事とは、隣国のジャガイモを手に入れること……それだけだったのだ。
「……あ、あの……！」

「っと、話題がずれたべな。大丈夫、だーいじょうぶだべ。追いかける前に、今から聞いて聞いて聞に合う話だんべから」

がりっ！　と生のままのそれを齧り、ギンレーは語り始めた。

「あのよぉ。お前さ、『ドラゴン退治』の話って、聞いたことあるけ？」

「……は、はい」

ベルナは少し考えてから、こくこくと頷いた。

「だろべ。『悪い奴を倒して、一攫千金』ってのあ、人類なら誰でも好きな話だろからな」

けどよ、とギンレーは続ける。

「それがな。物語と違って、現実ってのはそう簡単に善悪分かれてるもんでもない。千年前――魔王、お前さが魔物を纏めるまで、オレらドラゴンは皆、人類に虐げられとった」

「え!?」

「いやまあ、ちょいっと語弊があるな。人類の側から見て、オレらは『殺してもいい相手』だった……てぇことだ」

彼は再びイモを齧った。

「『ドラゴンは財宝を洞窟に集めている』、『奴らの鱗や牙は、いい武具の材料になる』――そう聞いたら人類の欲ってのは止まらんもんだ。たとえオレらの守る宝が人類から奪ったものでなくとも、たとえ相手が生まれたばかりの子竜でも、殺して奪うのが当然てな」

「そんな……！」

「『竜は悪モン。だから殺していい』って、これ世間の常識だったわけよ。で、オレの集落にも人類が押し寄せてきた。困るのは、同じドラゴンでも、オレと違って戦うのが嫌いだったり、殺すのが嫌いだったりする奴がおるわけで、そいつらはどうするのか、って話だ」

（……知らなかったわ）

ベルナは目の覚める思いだった。

（てっきり、魔物の方というのは、みんな人間のことが嫌いで、戦うのが好きなのだと思っていたけれど）

戦いや殺しを嫌う魔物だって、いるのだ。

理解し、やや悄然とするベルナをちらりと見てから、ギンレーは続けた。

「オレらドラゴンは、寿命が長い代わりに、数は人類よりずっと少ない。人類が大量に押し寄せたら、いつか全滅するかもしれん――それこそ、ねじ曲げられぬ誇りというもののせいでな。そう思ってた時だべ。前世のお前さが、ネメシロと一緒にやって来たのは」

「え？　……ネメシロさんと、一緒に？」

「ネメシロは最初にお前さに力を貸した魔物。で、オレは二番目。お前さが『願い』を叶えて死んだら、オレは右目をいただくことになっとるが、ま、それは契約上そうなっとるだけだ。オレが本当に欲しかったのは――うちの集落が人類に襲われないこと、これだべ」

そこで竜の目は、遙か昔を懐かしむようにちらりと輝いた。
「そしたらあいつは、お前さは言ったんだべ。『竜も人も変わりはない。同じ生き物だ』ってな。そう、さっきのお前さと同じこと、言ったのさ」
「……！」
「しかもあいつは、『自分が竜も守ってやる』なんて言い放った。甘っちょろいと思ったが、まあオレは、そんな甘いこと言う割に妙にタフだった、お前さが気に入ったんだべ」
「わ、私は……千年前の魔王は、そんな方だったのですね」
「ん？　なんだべ、そんな意外そうな顔して」
「いえ……」
そういえば、ネメシロが前に、「契約したばかりの頃の魔王は、今のベルナに少し似ていた」と言っていたような気がするが。
「魔王とはもっと、恐ろしい人だと思っていました……一体なぜそんな方が、世界の破壊や、支配など……もしかして、魔物の方々を守ろうと!?」
「いや、それは違う違う」
ギンレーはぱたぱた手を振った。
「そーいうんじゃなく……ああ、まあ、あれだ。オトナには色々あるっつーことだべや」
「は、はあ……」

はぐらかすような言葉に、曖昧にベルナが頷く前で、ギンレーは残りのジャガイモをぽいと口に放り込んだ。

「……ま、そういうわけで……昔のお前さの志が、今のお前さにもある以上。オレが力を貸したるに、足るだけの存在っつーことで、『納得』する他ないべ？」

ジャガイモを食べきり、ぺろりと舌で唇を舐めると――ギンレーは、そのまま口元に持っていった己の左手の親指の皮を――ぶちっ！　と牙で噛み切った！

鮮血が滴り、ベルナは思わず顔を手で覆う。

しかしギンレーはにやりと笑うと、その親指を彼女の額にすっと押しつけた。

ちょうど、その血を擦りつけるように。

「――この火の四天王、ギンレー・アワズゥ」

彼はゆっくりと、宣言する。

「この命続く限り、そしてお前さが今の志を忘れない限り、誠心誠意全身全霊の力を以って、お前さの忠臣になったるべ。ベルナデット・ド・シャルトリューズ」

「ギンレーさん……！」

ベルナの表情が（にたりと）輝く。

「あ……ありがとうございます！　あの、こ、これからよろしくお願いします！」

「ああ、よろしくするべ」

「ところで、あの……」
彼女は自分の額にそっと手を近づけた。
「これ、あの、一体……」
「お前さ、これはドラゴンの血判だべ。なんか誓いを立てる時はこうせえって、オレの婆ちゃの頃からの決まりごとだべ」
「は、はあ……」
「ついでにドラゴンの血には、不老不死になる効果が――」
「えっ……!?」
「ないべ！　んなモン人類の迷信だべ。何期待してんだべスケベ！」
「そっ、そんなぁ」
ベルナが困り顔になると、ギンレーはにっと笑う。
どうやらからかわれているらしいとわかると、ベルナは少しまごつくが――
（……よかった）
四天王と築いた信頼を、彼女は、神に感謝するのだった。
「――ギンレー、魔王。話は済んだか」
とそこへ、黒い着物を翻したネメシロと、相変わらずの能天気顔のウシュクが現れた。
「あっ……ネメシロさん、ウシュクさん！」

「やー、陛下もギンレー殿も、無事で何より。ですけど、これは驚きましたねえ」
「結局、聖女の奴めも我らも、連中にしてやられたな。まさか地中からやって来るとは」
そう言うネメシロは——言葉とは裏腹に、かなり余裕の表情だった。
「だが、ギンレー。奴らの誤算はただ一つ——貴様が土壇場のところで魔王に忠誠心を示したということだ。違うか？」
「違わないべ。ククッ、こちとら野菜をたっぷり食ったお陰で、かなり元気はよろしいべ。第一、あの仮面の連中だっけ？『白竜の顎門』なんて、竜でもないのに勝手に名前使ってんじゃあねーべ。ナメとんのかっつー話だべや。なぁ」
「なーんだ！　それでしたら、やはり何も心配は要りませんね。ねえ、陛下！」
「え、え……？」
戸惑うベルナ。
だがネメシロは構わず、彼女が手首に巻いていたアマトルの欠片を、すっと取り上げる。
「ふむ、いくら魔力が魂の底に眠っていようと……長い時間持たせていれば、少しは魔力が籠められるもののようだな。ギンレー、これで間に合うか」
「十分だべ」
「あ、あの、皆さん」
魔王はおずおずと問う。

「これから、何をなさるのですか……？　仮面の方たちを追う、のですよね？」
「はい、陛下！」
ウシュクが元気よく答える。
「陛下がギンレー殿を見事調伏した、その甲斐あって！　ギンレー殿の力を使って、不届き者を始末できることになったのですよ！」
「ええっ!?」
それは一体――と、ベルナが重ねて問おうと思ったのも、束の間。
「んじゃあ一発、景気よく派手にやってみんべ！」
ネメシロから受け取った欠片を、彼は静かに眉間の位置まで持っていき――
次の瞬間。
「きゃあっ！」
目が眩むほどの輝きに、ベルナは思わず目を瞑る。
そして彼女が、瞼を開けた時には――
『ほれ！　したら、さっさとドラゴン乗りと洒落込むべ、お嬢さ！』
「あっ……！」
眼前に、ベルナの三倍はあろうかというほど巨大な、真紅のドラゴンが立っていた。
鱗に覆われた力強い身体、コウモリのような翼、鋭い爪、毒針のついた長い尾。

人の姿の時と同じ黄金色の瞳に、額から天に向かって伸びる、二本のねじれた角。
よく見れば眉間に、先ほどまでベルナが持っていた、アマトルの欠片がくっついている。
（すごい……これがギンレーさんの、本当の姿）
かつてアマトルの張った結界は、聖女の結界の影響を受けたこの人間界において、魔物に本来の姿と力を取り戻させる能力を持っていた。
今、魔王の力の籠もった欠片が、僅かな間ながらギンレーの能力を復活させているのだ。
ベルナは息を呑み、彼の威厳ある姿を見上げた。
『ほれ、乗って寄越せ。空からなら、あいつらだってすぐ追えるべ。あー、伏せないと乗れないのけ？』
「っ、だ、大丈夫です、乗ります！」
懸命に答えると、彼が低く伏せるように伸ばした首を伝い、ベルナは上る。
ちょうど摑みやすいような形に出っ張っている鱗を見つけると、彼女はそこを手綱のように持った。それと同時にギンレーが、ぐっと首を元に戻す。
みるみるうちに視界が高くなり、ベルナはお腹の中がひゅっと冷たくなるのを感じるが、必死に堪えた。
（う、うわあ……た、高いっ……！）
「ネッ……ネメシロさんとウシュクさんは、どうなさるのですか？」



「心配なさらずとも大丈夫です、陛下！　わたくしたちも、すぐに後を追いますので」
「そういうことだ。――くれぐれも手を離して死ぬなよ、魔王」
「はっ、はい！」
『ほんじゃあ、ちゃっちゃと終わらせるべ！』
声と共に――ギンレーはその両翼を広げ、ばさりと羽ばたかせる。
その巨体は、なんの抵抗もなく宙に浮いた。
「っ、と、飛んでる……！」
（今までにネメシロさんの力で、何度か飛んだことはあるけれど……！）
その時とは少し違う、どこか懐かしくすら思える感覚に、ベルナの心は我知らず躍った。
『っとお。そーいや、邪魔な「木」が生えとったんだべな』
行く手を遮る緑に、ドラゴンは目を細めた。
次いで彼は、深呼吸のようにすぅうと細く息を吸い――
「きゃあっ！」
吐いたのは、強烈な炎。その威力は、屋敷で見せたものの数十倍だ。
一瞬昼になったかと錯覚させるほどの明るさで、竜の炎は夜を照らす。
幻惑の木は瞬時に黒い炭へと転じ、地に倒れる前に燃え尽きて、散った。
恐ろしい破壊力を前に、ベルナは驚いて声も出ない。

『……さて、怪しい馬車はあっちか？』

しかしギンレーはそれを当然のように受け流すと、彼にしか見えないほどの遠方に、目標を見つけたらしい。

『行くべ、お嬢さ！』

「はっ、はい！　お願いします！」

魔王と火の四天王は、風を裂くように、夜空を疾駆した。

第五章　その祈りは誰のため

その頃バスティアンは、馬を全速力で駆り、道を進んでいた。
首都を離れ、海辺へと続く道の周りには、僅かな畑しかない。
闇の向こう、かすかな月光に照らされている、遙か前方を行く馬車から発せられる濃い瘴気――白い霧が、彼を孤独にしている。
冬の大気が冷たい刃となって、彼の頬を凍りつかせんばかりに撫でる。
邸宅からかなり離れ、馬は疲労し、馬車との距離は徐々に開いていくばかりだ。
バスティアンはどこか、それを自らへの罰のように感じていた。
相手が何者で、どれほどの規模なのか、まったくわからない今、一人で突入することは無謀以外の何ものでもない。
（……それでも。私が奴らを止めなければ）
冷気が彼の心までもしんと静めていく――その時。
（……！　なんだ!?）

道を照らしていた月光が突然ふっと消え、驚いたバスティアンは馬を止める。
彼が上空を見上げると――――
「でっ、殿下ー！」
「なっ!?」
見えたのは、月を背に滑空しているドラゴン――の首の部分にしがみついている、ベルナデットの姿だった。
ドラゴンが降下し、ゆっくりと着地すると、魔王ベルナは落ち着かない様子ながらなんとか地面に這い降りてきた。
「はあ……ふう、こ、怖かった……」
「ベルナデット！」
馬から降り、バスティアンはベルナのもとに駆け寄る。
「お前、この……このドラゴンは一体……」
『ドラゴンじゃねぇ、ギンレーだべ』
真紅の竜、ギンレーが訂正する。
「ギンレー？　こ、こいつが四天王の……」
「はい、火の四天王の方です。あっ……あの、殿下！」
ベルナは精一杯の勇気と共に言った。

「そっ、その、よろしければ！　私とギンレーさんと一緒に、あの馬車を追いませんか？」
「何っ」
『ハァ!?』
バスティアンとギンレーが同時に驚愕の声をあげるが、ベルナはくじけずに続けた。
「わ……私はこれから、カロリーヌさんを助けに行きます。殿下も一緒に来てくだされば、きっと心強いと思うのです」
「……必要ない。私は一人でなんとかできる。それに馬車を追うのなら、馬で十分だ」
そうだ、そうこうしているうちに馬車が見えなくなってしまう。
バスティアンはそう思い、急いで馬に戻ろうとする。
「い、いえ！　ギンレーさんは本当に速いんです！　私、カロリーヌさんのお家から、ここまで一分で来られたのですよ」
『あー、そーだっけか？　よく覚えとるな、暇人だべ』
あまり興味なさそうな様子のギンレーは、退屈そうにぽりぽりと脇腹を掻いている。
しかしバスティアンはちらりと彼を見上げていた。
（……聖女が魔物の背中に乗る、のか？）
この時のバスティアンが猜疑心の塊だったなら、ベルナの意図を疑ったかもしれない。
けれども彼は、この時――こちらをじっと見つめるベルナの、その常人ならば卒倒しかねな

いほどの強烈な鋭さを持つ三白眼の中に、なぜか、この上ない優しさを感じた。
「……言っておくが」
しばらく経ってから、彼は口を開く。
「上空から私を振り落とそうとしても、無駄だからな」
「はっ、はい！　決してそんなことはしませんとも」
『なんだべもう、そいつも乗せんのけ？』
「おっ、お願いしますギンレーさん。殿下がいれば、カロリーヌさんを安全に助け出せるかもしれないと思って……」
『はー、まあここで嫌だっつって暴れても、聖女の『光』相手じゃどーしよーもないべ。オレは無駄な抵抗はしない主義だからなぁ』
そう言いながら、ギンレーは再び首を低く下げ、ベルナたちが乗りやすい体勢をとった。
『だどもな聖女、一つ言っとくが、千年前にお前さにつけられた傷、未だに嵐の前とかになるとじくじく痛むんだべ』
そう言いながら指さす彼の下腹部には、一部だけ鱗がはげている箇所があった。
『この落とし前はいずれ必ずつけてもらうべ』
「……ああ、いいだろう。どのみち千年前と同じになると思うがな」
やや険呑なやり取りに、おどおどするベルナ。しかし。

「ベルナデット」
バスティアンはそんな彼女に言った。
「――今回ばかりは、感謝してやる」
それが彼の本心だった。



（……！　で、殿下）
一方ベルナは、それまでどこか力弱かったバスティアンの目が、普段彼女によく見せる、あの意地が悪そうな、しかし鋭く美しいものに戻るのを見て、胸がときめくのを感じた。
（こ、これ、また）
また『殺意』が――と彼女は思い、胸に手を重ねる。
（でも……でも、嬉しいわ）
バスティアンの力になることができた。
それが、たまらなく嬉しい。ベルナは、素直にそう思った。
『おいおい、早く乗って寄越せ。そんなじっと見つめ合って、何やってんだべ』
「っ……す、すみません！」

「誰が見つめ合ってるものか。おい、もっと低く首を下げろ。乗れないだろ」
文句を言うバスティアンに、ギンレーはフンと鼻息で返す。
鼻息にちらりと炎が混じっているのを、ベルナは少しだけ怖いと思ったが――
『乗った？　乗ったべな？　んじゃあ行くべ』
密着するほどの距離で、バスティアンと並んでいるという事実に気付くと、それどころではなくなってしまった。
ギンレーの鱗の出っ張りが一か所しかないので、しょうがないことなのだが。
（手、手が……）
「なんだベルナデット、いつにも増してすごい目つきだな。安心しろ、今は『光』は放たないでおいてやる」
「え、あ、はい……」
飛翔するギンレーの背の上で、傍らのバスティアンの温もりが、何にも代えがたいもののように思えてくる。
（……お、落ち着かなければ。カロリーヌさんを救い出すためにも）
伏し目になるベルナは、そんな自分をバスティアンもまたじっと見つめているという事実には、気付かないままだった。
『……やれやれ。何やらオレの背中がピンク色だべ。思春期まっさかりけ？　オエェー』

ギンレーが、よくわからないことをぼやいた。

「……！　あれが――」

数分後。

ギンレーは速く、すぐベルナたちは、肉眼で馬車の位置を確認できる距離に近づいた。

それは四頭立ての箱馬車で、黒い荷台が月光を鈍く照り返している。

あの中に仮面たちと、そして、カロリーヌがいることは間違いない。

「カ、カロリーヌさん、大丈夫でしょうか」

嫌な想像で頭がいっぱいになり、ベルナは震えた声を出す。

「そのことなら問題ない」

バスティアンはそんな彼女に断言する。

「確かに用が済めば、彼女がどうなるかはわからないが――今のカロリーヌ嬢はこうして、私たちを引き寄せる大切な人質だ。それに言葉通り彼女に『凄惨な死』を与えるつもりなら、それなりの時間と道具が必要だろうからな」

「そっ、そうですか……」

安堵と恐怖が中途半端になった状態で、ベルナはとりあえずごくりと喉を鳴らした。

『はあ、なあ、お嬢さ。やっぱ、そのカロリーヌてのは助けた方がいいのけ？』

「えっ！　は、はい、そうですよ」
『やっぱりそうなのけ。はー、面倒くせぇ。今ならあの馬車をオレが踏んづけるなり吹っ飛ばすなりすりゃ、すぐに解決すんのによう』
ギンレーの金色の瞳は、馬車が進む道の向こう、月光も照らさぬ暗闇の奥を向いた。
『このままだとあの馬車、多分あそこに逃げ込むべ』
「え……道の向こう、ですか？　何があるんです？」
『お前さんところの家と同じくらいボロっちいお屋敷があるよーだべ。またあの白い霧がかかっとるけど』
「あの霧がある限り、私やベルナデット以外の人間には決して見つからないというわけか」
「お、お屋敷ですか。中に隠れてしまわれたら、見つけるのが大変かもしれませんね」
『ま、そこいら辺は大丈夫だべ。あいつらがなんとかしてくれるだろ』
事もなげに言うギンレー。
あいつらとは……そうベルナが訝しく思う間もなく、ギンレーたちの真横を、無数のカラスが追い越していった。
『あー、ネメシロたら張り切って。さ、オレも負けんように飛ばすべ！』
「えっ、張り切っ、きゃあっ！」
『喋ると舌噛むべー』

もう目と鼻の先にあるその屋敷に突入すべく、ギンレーは速度を上げつつ降下する。
バスティアンはその青い瞳に覚悟を籠めて、ようやく見えるようになったその屋敷と、それを守る門番のように立ち込める白い霧を睨んだのだった。

――馬車から降りると、男たちは悪態をついた。
その表情は白い仮面に覆われてわからないが、彼らの苛立ちは、仕草が物語っていた。
「けっ、ちくしょうっ！」
荷台から引きずり降ろされた令嬢――カロリーヌは、そのまま床に投げ出される。
鈍い音を立ててその身体は床に転がり、彼女は低く呻き声をあげるも、決してその瞼は開かない。今も白い霧が屋敷の内外に立ち込め、人の意識を瞬時に奪っているからだ。
そして、その霧を吹き上げる、魔界の植物――白仮面たちもその原理をよくわかっていないそれの魔力から逃れるには、彼らと同じように、仮面を携えるより他ない。
同じ植物から削り出して作ったこの仮面の力で、白仮面たちは気を失わずに済んでいる。
「くそ、なんなんだ、あの化け物は！　あんなのがいるだなんて、ボスから聞いてねえぞ」
正体不明のドラゴンに追われてここまで来た彼らの心情は、とても穏やかではない。
なんなら別の場所に逃げ込みたい気分だったが、彼らは組織の末端構成員であり、ボスの命

令に従うしか――カロリーヌを連れ、海辺にあるこのアジトにやって来るしかなかった。
そうしなければ始末されてしまうのだ。
以前、宝玉を奪った仲間のように――
「けっ、にしてもこいつ――大貴族の娘だったか？　ツヤツヤしやがって。いいもん食ってんだろうなあ」
身動き一つせずに寝ているカロリーヌを見て、白仮面の一人が声をあげる。
荒れ果てた部屋、大柄な白仮面たちの中で眠る彼女の姿は、場違いな芸術品のようだ。
「ああそうさ。俺たちみたいな食いっぱぐれと違って、毎日美味いもの食って、いい服着て踊ってんだぜ」
「へえ……ああ、そうだろうなあ、いい匂いだ。なんの匂いだろうなあ、香水かなあ。それとも貴族の女ってのは肌の匂いまで違うもんなのか？」
下卑た視線がカロリーヌを舐める。
彼女がもし意識を取り戻していたなら絶叫していたことだろう、下賤な空気にその場が包まれかけたところで――
「そこまでにしておいてくれ給え」
「っ……ボ、ボス！」
ボス――赤仮面が姿を現す。

彼は誰にも気付かれぬまま、部屋の隅にあるテーブルの上に立っていた。
いつも蜃気楼のように現れては、煙のように去っていくこのボスを、白仮面たちは皆一様に恐れている。
カロリーヌを連れ去った後、赤仮面もまた、彼らと同時に、同じ馬車に乗り込んだはずだったのだ。それなのに馬車に乗った途端、ボスの姿は消えてしまった。
そして着いた今、またこうして彼は突然現れた――
元来のカリスマに加えた、この不可思議な能力が生む恐怖こそ、『白竜の顎門』を一つに纏める要因であった。
「カロリーヌ嬢は我らの大切な賓客。もうすぐ訪れる客人同様、丁重に扱ってくれ給えよ」
「はっ、はい。……ですが、『客人』とは……？」
「ふふっ。わからないかな？」
赤仮面はマントの中から腕を伸ばし、部屋の反対側にある窓の外を指した。
指されるがままに視線を向けた、白仮面たちは――
「見ってんじゃあねーべ、このスケベ！」
「うああっ!?」
仮面もなしにこの空間でピンピンしている、謎の男に睨まれて悲鳴をあげた！
「……ふふっ。おいでになったようだね」

赤仮面は腕をマントの中にしまう。
「それでは、私は『旧友』と会いに行こう。皆、後は頼んだぞ」
言うなり彼は、後ろへ身体ごと倒れ込む。
その先には、大きな窓があった。
「あっ、一匹向こうに逃げたべ」
「くそっ、赤仮面はあっちか！　私が追いかける。ベルナデット、お前も来い!!」
「はっ、はい！」
逃げたボスを、二人の人影が追いかけていく。
だが誰も、ボスとその二人を追いかけようとはしない。
なぜなら――
「ふむ、カロリーヌとかいうのは見つけたな。ではギンレー、貴様は外の魔界樹を燃やしてこい。後で人間どもが来た時、あれが生えたままだと面倒だ」
「えーっ、オレがぁ？　それこそメンドーくさいから嫌だべ」
「あっちの邸宅に生えてたものの始末は、わたくしたちがやったんですよぅ。だから今度はギンレー殿の番ですっ」
正体不明の三人組が、窓からこちらに侵入しようと、押し合い圧し合いしているからだ。

「待てっ！　どこまで行くつもりだ!!」
叫ぶバスティアンと共に、ベルナは赤仮面を追う。
屋敷から逃げ出した赤仮面は、まっすぐどこかへ向かっていた。
道もなく、木がまばらに生えているだけのこの場所からどこへ行くのかはわからないが、波の音がすぐ近くで聞こえることから、どんどん海の方へ近づいているのは確かだ。
「いいかベルナデット」
走りながら、ちらりとバスティアンがこちらを向いた。
「私から離れるなよ」
「……はい！」
頷くベルナは、その手にアマトルの欠片を握っている。
ギンレーが人間の姿になった時、零れ落ちたそれを、ベルナはまた持って来たのだ。
正確にはそうするように、追いついたネメシロに命じられたのだが――
（この欠片があっても、今の私では、魔術が効かないだけで、後は役に立てない――）
そんな自分になぜバスティアンは、傍を離れるなと言ってくれているのだろうか？
（いえ！　そんな余計なことを考えている暇はないわ。カロリーヌさんは、きっとネメシロさんたちが助け出してくださる……はず。私は足手まといにならないようにしなければ）

潮騒が近くなり、海風に吹かれながら、ベルナは必死に走っていた。
「――ふふ」
そんなベルナたちの様子を顧みて、赤仮面は人知れず、仮面の裏で笑みを浮かべる。

「ぐっ……く、くえっ。ちくしょう……」
その頃屋敷に残された白仮面たちは、苦痛にもがいていた。
床に転がり、四つん這いになり、ぜいぜい喘ぐ彼らを、漆黒の瞳が冷ややかに見下ろす。
「……フン。どうやら此奴ら、仮面で霧の効果を逃れているだけのようだな。せっかく色々試してやろうと思っていたのに、つまらん」
「ねーネメシロ殿ー、次はわたくしの番ですよぅ！　早く代わってくださいよお」
「待てウシュク。あともう少し」
窓辺に腰かけた黒ずくめの男が、くいっと指を動かす。
「ぐえええっ！」
その度に、いくら息を吸っても空気が身体にほとんど入らなくなり、地獄のような苦しみが白仮面たちを襲う。
実際には黒ずくめ、ネメシロが彼らの周囲の大気を操作しているのだが、そんなことは彼ら

にわかるはずもない。

「ねーねーっ、早く代わってくださいよー！　代わってくださいったらー！」

しかも性質が悪いのは、黒ずくめの横に立っている時代錯誤な鎧姿の男が、まるでブランコの順番をねだる子どものように、彼らをいたぶる順番を待っていることだ。

「こっちに来てから、こんな機会ほとんどなかったんですからー！　わたくしにもニンゲンを譲ってくださいよお」

「くえええっ！」

「ウシュク、袖を引っ張るな！　危うく一人絞殺しそうになっただろうが」

「ええっ。やっぱりこいつらも、ぶち殺しては駄目なニンゲンなのですか？」

「当然だ。此奴らがいくら人間の倫理に照らしたところの『社会悪』であろうと、殺してしまえば後々面倒なことになるゆえな」

「ふぅん」

残念そうな声をあげる鎧男。彼らを見上げ、指さし、一人の仮面が声をあげた。

「お、お前ら……」

「ん？」

「お前ら、なっ、何者だ……卑怯だぞ、こんなっ……手品みたいな真似、しやがっ……」

「んん？　卑怯……？」

言われたネメシロの表情が、突如、歓喜に包まれる。
「卑怯？　卑怯だと？　カハハハ!!　何を言っているのだ、愚かなる人間どもめ！」
やおら彼は立ち上がり、ばっと腕を広げた。
「この我、鳥の王にして四天王、風のネメシロに対して、卑怯などとは！　己の惰弱さを知った凡夫の囀りか、心地よいわ！　カァーッカッカッカッカ！」
「ぐう……！」
背後からこちらに颶風まで吹かせて高笑いをする黒ずくめに、これ以上何も言えず、男はばたりと顔を伏せた。
「ネメシロ殿、嬉しそうですねえ。ああいう台詞言うのも、千年ぶりですもんねえ」
のほほんとした笑みで、ウシュクはしみじみと言った。
「さて、今のうちにわたくしは何をするか決めておきましょう。どうしようかなぁー。鼻水とか汗が、どばどばするのがいいかなぁ。それとも尿が止まらなくするのがいいかなあ」
夕飯の献立を考える主婦のように、首を傾げながら彼は考えていた。

「追いついたぞ！　もう逃げられまい」
バスティアンが高らかに声をあげる。

切り立った崖の上――そこが、赤仮面の辿り着いた場所だった。
（辺りには何もないし、真下には海、もう逃げ場はないはず――）
落ちれば、確実に命を失いそうなほどの高所だ。
バスティアンの背後に立つベルナは、ぎゅっと拳を固める。
手の中に収まった欠片は、熱くなっている。
一方で、彼女の頭の中には、ふと掠める疑問もあった。
（……どうしてわざわざ、このような逃げ場のないところに……？）
その問いに答えを出すより早く、赤仮面が口を開いた。
「とんでもない。聖女よ、君は追いついたのではない。私が追いつかせてあげたのだよ」
「なるほど、減らず口だけは得意のようだ。お前も私が受けている神のご加護のことは知っているのだろう。悪いがお前がいかに攻撃しようと、私には傷一つつかないぞ」
「ふっ……」
「何がおかしい」
「ふっ、ふふっ、いやね、聖女よ。確かに君の『光』は、魔の力を借りた私を灼くことができるだろう。だがね」
赤仮面はくいっ、と肩を竦める。
「果たして君は、私に触れることができるかな？　革命の折、兄を傷つけ……また先ほどはカ

ロリーヌ嬢を救えなかった、聖女様に」
「なっ……！」
仮面の挑発に、バスティアンの顔色が一気に怒りに染まる。
「……このっ！」
「あっ、ま、待ってください殿下！」
どうか落ち着いて！
そう願うベルナの声も聞かず、バスティアンは赤仮面に駆け寄り、一気に距離を詰めた！
「たあっ！」
「……遅い」
『光』を纏わせたバスティアンの手刀、しかし赤仮面はそれを瞬時に避ける。
その動きはあまりにも素早く、とても人間業ではない。
「ふふふバスティアン、遅い、あまりにも遅い！　君は聖女ではなく亀か、蛞蝓か？　たとえ君が人間であろうと、ふふっ、私にはそれくらいにしか見えぬのだよ！」
「っ、こいつ……！」
ぎりっ、と歯を食いしばったバスティアンは――心配そうな面持ちのベルナを見て、はっと冷静さを取り戻す。
彼は赤仮面をじっと睨んだまま、そっと胸元の、青銅製の十字架を手繰り寄せた。

そして彼はそれを、おもむろに両手で握りしめ、祈りの体勢をとる。
「ほう？」
「神よ！　……恵み深き神よ。この者を、魔の力を以って人を苦しめる者を討つ力を、どうか貸し与え給え！」
紡ぎ出される、祈りの言葉と共に――――
バスティアンの眼前に、清らかな『光』の球が出現した！
「っ……!?」
初めて赤仮面は、僅かに狼狽した様子を見せる。
（どうやら、殿下があのような技を使えることまでは、ご存じなかったようだわ。殿下のあの力なら、あの仮面の方を倒せるはず……わ、私まで少し気分が悪いもの）
離れた位置に立っている魔王ベルナまで不快にさせるほどの、その『光』の威力は――
「弾けろっ！」
「くあっ……!?」
赤仮面を傷つけるのに、十分だった。弾けた光球は、散弾銃のように『光』をばらまく。
いかに素早い動きができようと、そのすべてを避けるのは不可能だったのだ。
「ぐう……っ！」
片方の腕の半分を灼かれ、赤仮面は小さな呻き声をあげる。

「……これまでだな」
バスティアンが、その手に『光』を纏わせたまま、ゆっくりと近づいていく。
「これ以上、なんの抵抗もできまい。大人しくしていれば、このまま法の裁きを受けさせてやる。その前に」
バスティアンは叫んだ。
「その仮面を取れ！　……お前は、一体何者だ。観念して正体を現せ！」
「……ふふっ」
片方の腕は動かせぬまま、赤仮面はもう片方の手を仮面の前にやり、笑った。
「ふ、ふふふ、ふふふはははははっ！」
「……!?」
場に似つかわしくない赤仮面の笑いに、『聖女』の動きは凍りつく。
「ははは、ははっ。いいだろう、バスティアン。君に見せてあげよう」
赤仮面の手が、仮面にかかる。
ベルナの方からは、ちょうどバスティアンの背に隠れ、その姿はよく見えない。
「私が何者か」
仮面が、剝がれる。
「君なら、わかるだろう？　バスティアン……」

「なっ……！」
その時、ベルナに聞こえたのは——悲痛とも言える、バスティアンの驚愕の声だった。
「お、前」
彼の声が掠れる。
「お前はっ……お前は、あの時——」
バスティアンは、『光』を纏わせたまま、ゆっくりと手を赤仮面に伸ばす。
ベルナが、そんな彼に声をかけようとした——その時！
「ふっ！」
「あっ!?」
素早く仮面を被ってから、赤仮面が大きく手を下に振る！
振った手から一瞬、鞭のように伸びた緑色の蔦が、地面を大きく薙ぎ、割る。
バスティアンがそれに反応するのよりも早く——彼の足元の地面が抉られ、崩れた。
「さようなら、バスティアン」
無事な地面の方へ素早く跳び退った赤仮面は、勝利を宣言した。
「でっ、殿下ーっ！」

矢も楯もたまらず、ベルナは駆けだす。
そして手を伸ばし、今にも海に落ちそうになっているバスティアンの手を――摑んだ！
「ぐうっ！」
瞬間、ベルナの手を聖女の『光』が灼く。
纏わせたままになっていたそれが、魔王である彼女を攻撃したのだ。
しかし、地面に腹ばいになりながらも、ベルナは手を離しはしない。
「う、うう……」
「……ベルナデット」
急いで『光』を消したバスティアンは、そんな彼女を驚きの眼差しで見つめた。
「ベルナデット、手を離せ！　お前の腕では無理だ。これくらい、自分で……」
自力で登ろうと、彼の足はもがく。
だが鋭利に砕かれた崖は、彼の身をほぼすべて中空にぶら下げていて、どうあがいても彼は自分で地上に戻れそうにない。
「でっ、で、殿、下」
灼かれた傷から、煙が上がる。
そもそも彼女の細腕では、バスティアンを支えきることなどできない。
その身体はバスティアンごと、じりじりと崖の向こうに引っ張られていく。

けれども、ベルナは決して手を離さなかった。
（絶対に離せない）
そう思っていた。
（四天王の皆さんは……向こうの、お屋敷だから、助けていただくわけには、いかない。でもここで私が手を、離したら……）
ベルナの目の前にはバスティアン、そしてその下に広がる、漆黒の海原が見えた。
光り輝く『聖女』を呑み込もうとする獣のように、波濤が牙をむいている。
「ベルナデット、平気だ！　私には『光』がある、落ちても……」
「でもっ！　下は、海です。海に投げ出されれば、いくらなんでも、無事にここまで……上がって、おいでには……！」
渾身の力を、両手に籠めるベルナ。
赤仮面は、そんな彼女を妨害するでもなく、ただ腕を組んでこの光景を眺めていた。
――まるで何かを期待しているかのように。
「くっ、う……！」
（だ、駄目だわ……腕が、しびれてきた。もう、もたない……！）
下に落ちれば、少なくともベルナは確実に死ぬ。
バスティアンもただでは済まないだろう。

しかしそれが徐々に現実に近づきつつあるという絶望に、ベルナの心はぐらぐら揺れる。
（っ……！）
目をぎゅっと瞑り、我知らず、彼女は心中で呼びかけていた。
（魔王、さん……私の中に眠る、魔王さん！）
ずるずる、と身体が海に引っ張られる。
（魔王さん、どうか……どうか、私に力を貸してください！　このままでは……）
身体が、さらに引っ張られる。
（このままでは、私だけでなく、殿下が……殿下が、死んでしまいます！）
ベルナは必死に呼びかけ続けた。
（魔王さん、あなたは……あなたは、傷つけるだけなのですか!?　人を傷つけることだけしか、あなたにはできないのですか？　それとも……）
彼女の脳裏に、ギンレーとの会話がよぎった。
かつては優しさを持っていたという、魔王の話。
（それともあなたに、まだ優しさがあるなら！　どうか、どうかその力で、殿下を……）
（違うな）
「えっ？」
脳内で響いた、自分とはまったく異質な低い男の声。ベルナが思わず声をあげた、刹那。

（あ……！）

バスティアンを掴んだ手はそのままに、彼女の身体が、震えた。
全身の血が入れ替わろうとしているかのように、血の気がさっと引き、再びせり上がる。
徐々に激しくなる鼓動。
それと共に、得体の知れない黒い力が、身体中に満ち満ちていく。
恐怖と焦燥、負の感情が嵐のように過ぎ去っていく中で、ベルナは、魂の奥底から奇妙な歓喜が湧き上がってくるのを覚えていた。
（これは――この感覚は、あの時と）
アマトルの事件の時と。
（あの時と、同じ――――）
がくんとベルナは頭を垂れる。その瞬間。
彼女の中の、『ベルナデット』が消えた。



バスティアンは目を疑った。
俯き、一瞬震えたベルナは――面を上げたその途端に、顔つきが変わっていたからだ。
顔の造作はそのままに、目には活力が溢れ、身にはすさまじい殺気を纏い、そしてその全身には、古より受け継いだすさまじい魔力が満ちていた。
「まさか……！」
『魔王』が目覚めたのか――と、浮かんだ答えを口にするより先に。
「……」
彼女は、いや『魔王』は、大きく目を見開く。次いで魔王は、すっと身を動かすと――
「フン!!」
自分のみならず、バスティアンまでも、軽々と崖の上に引き上げていた！
「う、わっ……！」
地面に転がされる『聖女』。
それを見届けると、魔王は、おもむろに視線を赤仮面に向けた。
無表情だったその顔には、今度は、静かな怒りのみが浮かんでいる。

「……これは、これは、魔王陛下」
赤仮面は魔王に、恭しく頭を垂れた。
「お会いできて恐悦至極。この時がため、小細工を弄した非礼をお許しください。我らは」
語る言葉が終わるよりも早く。
「ぐはっ……!!」
赤仮面の身体は、宙に投げ出されていた！
懐から、それまでその身体を強化していた『ウェヌスの涙』が零れ、落ちる。
「げほっ、はっ……！」
吹き飛ばされ、倒れ伏すと、仮面は血を吐いた。
（いつの間に……！）
その胸元はぱっくりと斬られ、おびただしい量の出血が、彼のマントを濡らしていく。
見れば、魔王はその手に、巨大な漆黒の『剣』を握っていた。
破壊の力である闇を、剣の形に凝縮したそれは、それまでベルナが握りしめていたアマトルの欠片を依り代にして創られている。
魔王はそれを振るい、無言のままに赤仮面を斬り伏せたのだ。
「――騙るな、小僧」
魔王は、切っ先を「敵」に向ける。少女のままの声は、しかし、雷鳴のように轟いた。

「貴様は何を以っても償えぬ罪を犯した。聖女を討つのは、この私だ」
ぶん!!　と大きく振った魔王の『剣』に、魔力の黒い炎が揺らめく。
「嘆け。そして悔いるがいい。聖女を討ってよいのは――その眼前に立ってよいのは、私だ。私だけだ！」
「……っ」
バスティアンは地面に伏せたまま、身動きもせずに魔王の言葉を聞いていた。
「それを貴様のような痴れ者が――この私を、笑わせるつもりか？」
魔王は『剣』を振りかざす。
赤仮面はうずくまったまま動かない。
「――身の程を知れ、人間が!!」
『人間』という言葉にこの上ない憎しみを籠め、魔王は一気に漆黒の刃を振り下ろした！
――しかし。
「……！」
振り下ろされた刃の下に、赤仮面の姿はない。
目を見開いたまま、魔王はカッと真横に視線を動かす。果たして――
「っ、はあ、はあ……」
息を荒げながらも、赤仮面はそこに立っていた。

「……はあ、はは、なるほど、なるほど」
傷口を押さえながら、彼は笑う。
「古の魔王陛下――その力が、怒りが、まさかこれほどのものとは。その点は我らの――考え違いであったことを認めよう」
「……」
無言の魔王は眉一つ動かさない。それを見て、仮面はまた笑みを零した。
「ではいずれまた会おう――魔王、そして聖女よ!!」
「待てっ！　お前は……」
バスティアンが制止するよりも早く、赤仮面は崖の下に身を投げる。
その血が彼の落ち行くままに、赤い跡を残した。
夜の暗い海に、何かがぼしゃりと落ちるような音がした後――
残ったのは、バスティアンと魔王だけになった。
「……魔、王……」
バスティアンはゆっくりと立ち上がり、ベルナ――否、魔王をじっと見つめた。
魔王は赤仮面に向けていたのと同じ、無表情に見えるほど静かな、怒りの表情のままだ。
「聖女よ」
魔王はバスティアンに呼びかける。

その声音に、バスティアンは一瞬、息を呑み――慄然とした。
（なぜだ……）
魔王が一歩、彼に近づく。
（なぜ私は、今、こいつの声音を――）
懐かしい、と思ったんだ？
生まれ出でた新たな疑問に、バスティアンは戸惑う。
だが、それを口に出すのよりも早く――
「っ！」
魔王は膝から、がくんと崩れ落ちた。

その目からふっと力が消え、少女の身体は、地面に倒れ伏す。
「ベルナデット！」
バスティアンは駆け寄り、彼女を助け起こした。
「おい！　……おい、しっかりしろ！」
揺らすが、ベルナは目覚めない。
瞼を閉ざしたまま静かに眠る彼女を、バスティアンは、ただ複雑な表情で眺めていた。
腕の中に感じるその身体はあまりにも細く、だが、温かい。

（こいつ……黙って眠っていると、なかなか……いや、何を考えているんだ、私は）

逸らした視線の先に見えた彼女の手には、いましがたまで『剣』を成していた小さな欠片と――真っ赤に灼け爛れた、傷跡があった。

（ベルナデット、お前は――）

彼女にその傷を負わせた自分自身の手を、ゆっくりと広げる。

自分の危険をも顧みず、ベルナデットは――バスティアンを、守ろうとしてくれた。

そう思うと、彼の胸には、これまでにない痛みが生まれる。

（なんだ、この気持ちは）

「……ん!?」

その時。背後に聞こえた強烈な爆発音に、バスティアンは慌てて振り返る。

視界には、夜闇の中で燃え盛る屋敷と――爆風に乗せられ、吹き飛んでくる木々が！

（馬鹿な！　……まさか、あの赤仮面）

証拠隠滅のために、最後の悪あがきのために、自らのアジトを――！

そう思う間にも、爆炎と吹き飛ばされた破片はみるみるうちにこちらに迫って来る。

バスティアンは咄嗟に――ベルナの身体に、覆いかぶさっていた。



——ベルナの目の前に、美しい湖が見える。
そしてそのほとりに力なく倒れている、白い馬の姿も。
いや、ただの馬ではない。その尾は馬のものではなく、鱗の生えた魚の尾だった。
これは、水棲馬（オヒシュキ）だ。
「——どうするつもりだ、貴様」
傍らに立つネメシロが、こちらに言う。
「此奴の命はもう、そう長くはない。相当（そうとう）人間に痛めつけられた後らしい。……まさか、助けるつもりではないだろうな？」
「……いや」
開いた口——ベルナは開くつもりもなかったのだが、勝手に開いた口から出た声は、落ち着いた青年の声だった。
「助ける。助かる命だからな」
「やれやれ」
肩を竦めるネメシロを置いて、青年はしゃがみ込み、魔物に手をかざした。

手から魔力を注ぎ込まれ、水棲馬は、活力を得たかのようにびくりと身を震わせる。
『うう……』
馬の口から漏れた声は、悲痛ながら、どこか能天気な声だった。
（もしかして、この馬――ウシュクさん……!?）

驚く間もなく、視界が揺らぐ。
次いで彼女の視界に映ったのは、どこか見知らぬ荒れ果てた土地。
そしてその地に何千とひしめいている、魔物たちの群れ。
彼らは一様にこちらに向かって、魔王を称える唄を歌っていた。
「――さあ、魔王」
また傍らに立っているネメシロが、此度は少し嬉しそうな表情で言った。
「これが貴様の軍、貴様の望んだ力だ。これで本懐も、遂げられたというものだろう？」
「いや」
青年――先ほどよりは幾分低い調子となったその声が、再びネメシロの言葉を否定した。
「私の望みは、力ではない。……かつてはそうだったかもしれない。だが今の私には、もうそれは、あって当たり前のものになってしまった」
「では、何を望む？　世界、か？」

「いや。……それは正しい表現ではない、ネメシロ。私の望みは一つ。ただ――」
（ただ――？）
魔王は、何を――
（ただ何を望んだのかしら……？）
言葉の先を聞くこともできず――ベルナの視界が、また揺らぐ。
（待って）
ベルナは呼びかけた。
（待ってください、魔王さん！　あなたは何を望んだのですか？　……世界の支配では、ないのですか？　一体――）
虚空に伸ばした手は、何も摑むことなく――彼女の意識は、闇に落ちる。

――そしてベルナの意識が蘇ると。
「はっ!?」
「……ベルナデット。目が覚めたか」
彼女の視界に映ったのは、バスティアンの顔だった。
仰向けに寝転がった身体の真上に、彼の温もりを感じる。

「えっ、あ……！」

どうやら彼女の身体は、バスティアン殿下に乗りかかられているらしい。

そう気付くと、ベルナは心臓がどきんと跳ね上がるのを感じた。

（あ、わ、私）

すぐ目の前に、彼の神々しい、美しい面貌がある。

息遣いすら感じられるほどの近くに。

「怪我は……」

彼は指を伸ばし、そっとベルナの髪に触れた。

触れられた髪は、神経など通っていないはずなのに、じんじんと不思議な痛みを帯びた。

「していないな」

そう言うと、考え込む様子だったバスティアンの表情にふと、小さな笑みが浮かんだ。

それを見た途端に、また彼女の心臓は激しく鼓動する。

（私、ど、どきどきして）

顔が真っ赤になっていくのが、自分でもよくわかる。

胸の中いっぱいに、甘い疼きが広がっていく。

（私、また、また『殺意』が）

ベルナは焦った。また魔王の殺意が目覚めているのかと。——しかし。

（あ……）

彼女は気付いた。

（違うわ）

胸の中を埋め尽くし、頭の中をいっぱいにするこの想いは――――

その笑顔を見るだけで喜びに溢れ、その嘆きを見ればそれを取り除きたいと願う、この想いにつけられた名前は――――

恋だ。

（私、殿下のことを……）

身を離し、起き上がったバスティアンに視線を向けたまま、彼女はぼうっと熱くなっている自分の頬が恥ずかしく、面を伏せる。

屋敷が爆破されたという報を受けて、彼女が思い切り慌てるのは、それからすぐだった。

――朦朧とした意識の中で覚えているのは、爆発音と、誰かに抱きとめられる感触。

「あわわ、危ない危ない！」

やや間延びしたように聞こえるその声を、カロリーヌは――なぜか、素敵だと思った。

「だーから、ちゃんと樹は全部燃やしたべ。霧も消えたから、きっともうすぐ人類がこっちに来ると思うべ」

少し遠くから聞こえる、見知らぬ男の声で、カロリーヌ嬢は目を覚ます。

誰かの腕に、彼女は抱きかかえられている。

「しっかし、突然屋敷が吹っ飛ぶんだもの、驚いたべ。なんか、爆弾とやらが仕掛けてあったんだって？　あの白仮面の連中は、みんなやられちまったのけ？」

「ああ。我らならともかく、人間では一溜まりもなかったようだ。まさかあの赤仮面、自らの仲間ごと屋敷を吹き飛ばすとは……ウシュクが水に変化し、あの娘を助けはしたが」

あの娘――それは、自分のことだろうか。カロリーヌは瞼を震わせ、そっと目を開く。

すると、そこにいたのは――

「あっ、気がついた！」

「きゃあ！」

作り物のように端整な顔に、うっとりするような笑みを浮かべた、鎧姿の男だった。

「えっ!?　ど、どなたですの？　あ、わ、私は一体……？」

「心配しないでいいです。ここは死後の世界ではないですよ」

そう言って、謎の男は彼女を地面に下ろした。

その所作に奇妙な動悸を覚えつつ、カロリーヌは慌てて辺りを見回す。

すぐ目の前に、燃え盛る屋敷と、そこから少し離れて立つ、二人の男の姿があった。
波の音がすぐ近くに聞こえる。
（私、確か、急に倒れて……そう、何者かに連れ去られたような……！）
「よかったぁ。怪我はないのですね」
思い出し、改めてぞっとしている彼女に、鎧男はにっこりと笑いかけながら言う。
「無事で、本当によかったですよぉ」
「えっ……？」
「あなたが怪我をしていたら、どうしようかと思ってしまってましたから」
その声は、さっき自分を助けてくれた声と、同じだ。
「あ、そのっ……！」
カロリーヌは扇を持っていないことを恥じた。
夜とはいえ、こう月が明るくては——顔が赤いのが、わかってしまうからだ。
（い、嫌ですわ、私としたことが……どうして、この方の言葉にいちいち、胸がどきどきしますの……？）
よろよろと立ち上がったカロリーヌは、ひとまず深々と一礼した。
「あ、あの……見知らぬ方。ありがとうございますわ、その、助けていただいて……」
「いいえ！」

鎧男はにぱぁっ、と輝く笑顔で言った。
「当然のことをしたまでですよぉ」
「はうっ……！」
カロリーヌの胸が、どきんと跳ね上がる！
（ど、どうしたことですの。私。まさか……）
彼女は自分の胸を押さえ、はっと息を呑む。
恋や愛なんて、くだらないと思っていたのに。
（まさか、まさか。私、こっ、この方のこと……）
「ウシュクさーん！」
と、その時。
どこかで聞いたことのあるような、やや低めの少女の声が、彼女の耳に届いた。
「ウシュクさん、ああ、ネメシロさんたちも！」
「おぉ、陛下！　不届き者の征伐は終えられたのですか？」
「陛下……？」
視点を動かし、カロリーヌは驚愕した。
「なっ、べっ、ベルナデットさん!?」
「ああ、カロリーヌさん！」

こちらに気付くなり、呪殺令嬢は、目をカッと見開いて近づいて来た。
「よかった！　ご無事だったのですね」
「あわわわわ、ちっ、近い、近いですわ！」
至近距離でその三白眼に射られるのが怖くて、カロリーヌは慌てた。
「そっ、それにしてもこれは……どういうことですの!?　私はなぜこんな、吹きっさらしのところにいるのです！」
「その理由は、私からお話しします」
そう言って声をかけてきたのは、いつもと同じ柔和な表情の、バスティアン殿下だ。彼はその手に、紫色の宝石を持っている。
屋敷の炎を見つけた人々が集まって来たのは、彼女が事のあらましを聞いた後だった。

一方、その頃――
「……やーやー、これは。ずいぶん手ひどくやられてしまったみたいですねー」
遠く水平線の向こうに、揺らぐ炎が見える海辺。
なんとか泳ぎ着いた赤仮面のすぐ隣に、一人の男が立っていた。
まだ年若い、黒々とした髪を短く切り揃えた、清潔な雰囲気のその男は、典型的な神父服を

身に纏い、穏やかで人好きのする笑顔を浮かべて、赤仮面を見つめている。
赤仮面が何か言う前に、神父服の男は、さっと片方の手を挙げる。その手には、ピエロのパペットがはめられていた。パペットはぱくぱくと口を動かす。
『手ひどくやられたって言うかヨ！　惨敗じゃねえか、だっせえナ！』
「こらソムニ君、駄目ですよ。彼はその部下たちを犠牲にしてまで、やっとのことで帰ってきたのですから」
空いているもう片方の手でコツンとパペットの頭を小突き、男は腹話術をしている。
『おうおう無敵の赤仮面さんヨ！　どんな気分だイ、魔王に会ったご感想はヨ！』
「そうですよ。それに、ああ、命を落としたたくさんの仲間たちのこと、悔やまれますねー。あなたの望みのために命を落とした彼らに対して、憐れみの気持ちはないのですか？」
「……ふっ」
赤仮面は、そこで、初めて口を開いた。
「魔物に人の道を説かれる筋合いはない。……早くこの傷を治してくれ。ヴェルムト」
「ああ、はいはいそうですねー。まったくあなたときたら、どこへでも自分で行こうとするもんだから、いっつも大怪我じゃないですかー。私も大変なんですよー」
『それがお前の仕事だロ！』
「ソムニ君は黙っててくださいねー」

ヴェルムトと呼ばれたその男は、腹話術をやめぬまま、赤仮面の傷口に手を添える。
送り込まれる魔力によって、その傷は、徐々に塞がっていった。
「……で、これからどうするんですか？　フランシス。ちゃんと計画はあるんですか？」
「当たり前だ」
フランシス、と呼ばれた赤仮面は頷く。
「既に手は打ってある。まずは――」
と、そこで彼は激しく咳き込んだ。
「ありゃっ!?　ちゃんと怪我、治せませんでした？」
『ヴェルムトのせいだゾー』
「っ、げほっ、けほっ……いや、そうではない。どうやら、『時間』が来たらしい」
そう言うと、赤仮面は俯き、仮面に手をかけた。
「……後は頼む」
「はいはい。いつも通り、ちゃーんと『彼』に伝えておきますからねー」
『よく眠れヨ！』
「……ふっ」
仮面を外し、それをヴェルムトに託すと、フランシスは目を閉じ――
「あ、あれ？」

次に目を開けた時、彼は、気弱な甲高い声になっていた。
「ぼっ、ぼぼぼ僕、また変なところで寝て……あわわわ、今度は海!?　この前川に落ちたばっかりだったのに……ああっ、神父様だ！」
「おはようございます～♪」
ヴェルムトは温かい眼差しで彼を見つめる。
「し、神父様、ぼ、僕の眼鏡知りませんか？　あれがないと、ななな何も見えない……」
「ああ、はいはいこれですね。どうぞ」
神父は懐のケースから黒縁の眼鏡を取り出し、彼に渡す。
「あ、ありがとうございます……」
しとどに濡れた、老人のような灰色の髪を気にしながら、それを受け取り――
「そ、それで、神父様」
青年、ジャンは、こう述べた。
「――僕、何をすればいいですか？」

終章　魔王様の活躍にご期待ください

「そ……それでですな。気絶からかろうじて目覚めたわしは、恐ろしいものを目の当たりにしたのです！」

二月の初め。陽光降り注ぐ、王宮の小部屋。

貴族たちのサロンにて、一人の老男爵が、熱弁をふるっていた。

「ロートシルト侯爵家の庭から、月光を受けてまっすぐに飛んで行く怪物の姿と――それに跨った、あの『呪殺令嬢』の姿を！」

『呪殺令嬢』という言葉が出た途端に、聴衆の貴族たちはどよめき、悲鳴をあげた。

「まあ……それでは、カロリーヌさんが襲われた事件も!?」

「ああ、間違いありませんぞ。表向きはあくまで『テロ集団の仕業』ということになっとりますが……きっとそのテロ集団も、ベルナデット嬢に踊らされた犠牲者に過ぎません！」

「わしは呪殺令嬢が、屋根から飛び降りて無傷だったのを見ましたぞ」

「私は呪殺令嬢が、巨大な箱を叩き割っているのを見ました！」

「そっ、そんな！　ベルナデット嬢が、まさかそこまでの力をつけていたなんて……！」
「これは、世界滅亡の日も近いか……」
――彼らが噂話に花を咲かせていた、その時。
「クックック……」
底知れぬ深淵より届くかのような、低くしゃがれた笑い声が聞こえる。
貴族たちはびくりと身を震わせ、一斉にそちらを振り返った。
そこに立っていたのは、彼らと同じ貴族の、令嬢。
顔の半分を黒い羽根扇子で隠した彼女は、ゆっくりとこちらに近づき、なおも笑う。
「ククク……失礼。そのお話……」
彼女が、扇子をぱっと外した。
「……て、訂正させていただけませんか？」
ニタリとした微笑み。睨め上げるような三白眼。長いダークブルネットの髪。
「ひっ……！」
男爵たちは、一斉に腰を浮かす。
「でっ……出たぁあああーっ!!」
『呪殺令嬢』ベルナデットの姿に、人々はてんでばらばらに逃げて行った。

「あ……あら？」
ただ一人取り残されたベルナは、がくりとうなだれた。
「ああ……またまた失敗したのね、私……」
「まだ無駄な努力をしているのか、ベルナデット」
ぽんと肩に手を置かれ、彼女の心臓はどきっと高鳴る。
「お前の顔では、笑いかけるだけで相手の寿命を縮めるだけだぞと、前に言ったよな？」
「あっ……あ、で、殿下」
「なんだそんな真っ赤な顔で。……調子が狂うな」
そう言って、バスティアンはやや憮然とした表情を浮かべた。

結局のところ、ロートシルト侯爵家を襲った事件は、テロ集団によるものと断定された。
奪われた『ウェヌスの涙』も、再び回収され、今は博物館に展示されている。
ただ、事件のせいで「呪われた宝石」という肩書がついてしまったらしく、怖いもの見たさの客ばかり来ているそうだが。
一方で、白仮面『白竜の顎門』たちの足取りは、官憲が必死に調査をしているものの、屋敷が爆破され、手がかりが消失したことで、捜査は難航しているようだ。

ベルナがジャンと共に調べた倉庫からも、特に何も見つからなかったらしい。
だがそれまで貴族たちを脅かしていた物盗りや放火は、これを機にぱたりと止んだ。
人々の間には、再び平穏が訪れた。もっとも――――
（……は、恥ずかしいわ。殿下にお会いするだけで、こんなに胸が苦しくなって……）
ベルナの心中は、まったく平穏ではないのだが。

「陛下ーっ」
そこへ、小部屋の花瓶からにゅるりと顔を出す者がいた。ウシュクだ。
「陛下、聞いてくださいよぉ、変なんですよう。なんか見覚えのあるようなないようなニンゲンの女が、わたくしにつきまとってくるんですう」
よっこいしょ、と花瓶から身体を引き出しながら、彼はぼやく。
「なんかぁ、『勘違いしないでくださいませね！』とか言って、色んなものを献上してくるから、何もわたくしは勘違いしてないと言い聞かせてるんですけどねぇ。なんなんだと思われます？」
「――それはきっと、あのカロリーヌとかいう奴だろう」
と、窓辺からネメシロが入って来た。
「ほれ、今も」

「え？」
「はっ！」
ウシュクが視線を動かすと、扉を細く開けてこちらを覗く、カロリーヌの姿があった。
「なっ……わ、わ、私は、べ、別に……！」
「カロリーヌさん……？」
ベルナが声をかけようとすると、彼女は大きく後ずさった。
「ななななんでもないですわ!!　ちょっと珍しい方がいらっしゃると思っただけで……」
魔界関係のことはうまく伏せて説明したため、カロリーヌはウシュクのことを「ベルナのお付き」としか知らない。
「別に、ウシュクさんのことが気になったり、ベルナデットさんのことを羨ましく思ったりなど、まったく全然微塵もしていないですわっ！　勘違いしないでくださいませっ！」
言うなり彼女は真っ赤な顔になり、素早くその場を立ち去ってしまった。
「ほら、またぁ。なんなんですか、あのニンゲン？」
「おおかた、貴様の魅了の術が相当に効いてしまったのだろうな」
「えぇーっ、それってあれだべ。恋ってやつだべ？」
同じく窓から滑り込んできたギンレーが、どうやら王宮の台所から調達してきたらしい、大ぶりのニンジンを齧りながら言う。



「オエェー。人類はこう、ペアで放っとくとすーぐにくっつくべな。気持ち悪っ。何がいいんだかさっぱりわからんべ」

「おいおい、いつからこの王宮は魔物の溜まり場になったんだ？」

魔物たちに、バスティアンが冷ややかな、しかしどこか愉快そうな視線を向ける。

「確かに今回の事件、解決したのはお前たちの力もあるが――それと私たちの因縁は話が別だ。今ここで、討ってやってもいいんだぞ？」

「で、殿下……」

ぱりぱりと『光』を手に纏わせるバスティアンを見て、ベルナはおずおずと声をあげる。

しかし。

「なーに言ってんだべ、聖女サマ」

「あっ」

ギンレーにぐいっと手を引っ張られ、ベルナはバスティアンと対峙する形に立たされる。

「前に会った時に言ったべ？　オレは執念深いから、千年前につけられた傷の落とし前は必ずつけてもらうべ。というわけで」

四天王たちの視線が、ベルナに刺さる。

「ほれ魔王さ、行け」

「ええっ！　そ、そんな！　わ、私……無理ですよ！」

「とぼけるな魔王。聞いた話では、以前覚醒した時に魔剣を顕現させたそうではないか」
「きっと、そろそろ魔力が目覚めてきてるんですよう！　わたくしにはわかります！」
「わ、私にはわからないです……」
「ほれほれ、どーんと行って寄越せ！」
「い、嫌ぁああ～!!」
どんと背中を突かれ、つんのめるベルナ。
自覚した自分自身の想いを伝える術も、己を見るバスティアンの心中を知る術も、彼女は持たない。
（わ、私……これから、どうなるのかしら……！）
目の前に山積みの問題に、ベルナはくらくらする心地だった。
けれども、彼女は知らない。
さらに大きな事件が、もう間もなくのところまで、迫り来ていることを――

END

あとがき

こんにちは、甲斐田紫乃です。
シリーズ第二巻をお手に取ってくださり、ありがとうございます！
一巻目と合わせて、お楽しみいただければ幸いです。
今回の話では新キャラクターが何人か登場しましたが、四天王のギンレーは書いていて一番面白かったです。ちなみに彼が喋っているのは魔界の「ドラゴン弁」という設定です。

この巻の執筆においても、担当編集様、イラスト担当の吟先生には大変お世話になりました。本当にありがとうございます！　表紙絵、さっそくデスクトップに飾っています……！
またこの本に、そして筆者に関わってくださったすべての方々にも、感謝申し上げます。
魔王の戦い（という名の苦労）はまだまだ続きますが、今後ともよろしくお願いします。

甲斐田紫乃

■ご意見、ご感想をお寄せください。
《ファンレターの宛て先》
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ビーズログ文庫編集部
甲斐田 紫乃　先生・吟　先生

B's-LOG BUNKO
ビーズログ文庫

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。
エンターブレインカスタマーサポート：0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

か-6-05

大魔王は笑わない!!
～信じてください、聖女サマ～

甲斐田紫乃

2011年12月27日 初刷発行

発行人　浜村弘一
編集人　森 好正
編集長　森 好正
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1
（代表）0570-060-555
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
編集　ビーズログ文庫編集部
デザイン　永野友紀子（Zapp!）
印刷所　凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

ISBN978-4-04-727704-5
©Shino KAIDA 2011　Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

Enterbrain Entertainment Awards

第14回 エンターブレインえんため大賞

作品募集中!!

主催：株式会社エンターブレイン
後援・協賛：学校法人 東放学園

【応募規定】ガールズノベルズ部門

1）パソコン、ワープロ等で原稿を作成し、1枚あたり42字詰め34行で80～140枚。下記のふたつの方法で応募することができます。

A：プリントアウトでの応募。

A4用紙横使用。タテ組、42字詰め34行80～140枚で印刷。必ず1行目には「作品タイトル」、2行目には「氏名／ペンネーム」を明記のうえ原稿1枚毎にページ番号を記入。右上端をダブルクリップなどでとめてください。

B：データでの応募。

ウィンドウズで読み込み可能なフロッピーディスク、あるいはCD-ROMにテキスト形式で応募原稿のデータファイルのみを保存してください。原稿データの1行目には「作品タイトル」、2行目には「氏名／ペンネーム」を忘れずに記入してください。ディスクには必ずラベルを貼り、「応募作品のタイトル、氏名／ペンネーム」を明記してください。なお、編集部でデータを開く際に「郵送中の事故による媒体の破損やフォーマットの違いなどでデータが開かない」「明らかに原稿の改行が乱れていたり、文字化けがある」「テキスト以外の形式で保存してある」場合は、応募作品としてエントリーされません。確実を期する場合は、プリントアウトで応募してください。

2）いずれの応募の際にも、作品の梗概（800字以内）、エントリー表として以下の項目（タイトル／氏名※ペンネームの場合は本名も併記／生年月日／郵便番号、住所／電話番号／メールアドレス／職業／執筆歴／小説賞への応募歴）を記入したものを必ずプリントアウトして添付してください。※手書きでも可

3）手書き原稿での応募は不可とします。

4）応募作品は日本語で記述された応募者自身の創作による未発表（PC、携帯などでWEB公開したものは発表済みとみなす）の作品に限ります。同一作品による他の文学賞への応募は認めていません。第三者の権利を侵害した作品（他の作品を模倣する等）は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。応募作品の著作権は、応募者に帰属します。
なお、入賞作品については、株式会社エンターブレインが、作品の出版（電子書籍、CD-ROM等の電子メディアを含む）、映像化、公衆送信（インターネットでの配布、販売）等に関する独占的権利を取得できるものとし、賞金の支払い時に契約を締結します。
※選考に関してのお問い合わせ・質問には一切応じかねます。
※応募作品の返却はいたしません。

【応募方法&宛先】原則として郵便に限ります。

〒102-8431　東京都千代田区三番町6-1　(株)エンターブレイン
第14回 エンターブレインえんため大賞
ガールズノベルズ部門係

2次選考通過者に評価シート送付！
発表はすべての選考が終了した後になります。

テキストデータ（郵送）での応募を受付開始！

【応募受付締切】
2012年4月30日
（当日消印有効）

【応募資格】
年齢・性別・国籍は問いません。
【選考】
森好正(ebi 取締役)、ビーズログ文庫編集部
【入賞発表】
2012年8月以降発売のエンターブレイン刊行各雑誌、及び弊社ホームページ。

表彰・賞金（各部門共通）

【大賞】（1名）
正賞および副賞賞金100万

【優秀賞】（1名）
正賞および副賞賞金50万

【東放学園特別賞】（1名）
正賞および副賞賞金5万

※東放学園特別賞は学校法人東放学園の在校生および卒業生の応募作品の中からもっとも優れた作品に与えられるものです。

◉お問い合わせ先
エンターブレイン　カスタマーサポート
（ナビダイヤル）0570-060-555
◉受付時間
正午～午後5時（祝祭日を除く月～金）
support@ml.enterbrain.co.jp

※えんため大賞にご応募いただく際にご提供いただいた個人情報につきましては、弊社のプライバシーポリシー（URL http://www.enterbrain.co.jp/）の定めるところにより、取り扱わせていただきます。

詳しくは公式サイトをチェック！！！！

http://www.enterbrain.co.jp/entertainment/

9784047277045

ISBN978-4-04-727704-5
C0193 ¥580E

1920193005806

発行：エンターブレイン

定価：本体580円＋税

B's-LOG BUNKO

大魔王は笑わない!! ～信じてください、聖女サマ～

伝説の大魔王の生まれ変わりである呪殺令嬢・ベルナ。彼女は、聖女の転生体であるバスティアン殿下に、『悪さ』をしないよう監視される日々。そこへ、最後の四天王・ギンレーが到着！　しかし彼は、「魔王に従う気はない」と言い出し……!?　一方、市中では怪しげな事件が発生！　すると殿下は、犯人をベルナ達だと決めつけて――!?　本気で滅ぼされる日も近い!?　魔王ファンタジー第2弾!!